神奈川県考古学会設立20周年記念事業記録集

神奈川県考古学会の
過去・現在・未来

―神奈川県考古学会設立20周年記念講演および
平成22年度考古学講座『神奈川の考古学・最近の動向』の記録―

平成27年（2015年）3月
神 奈 川 県 考 古 学 会

目　　次

緒言　神奈川県考古学会会長　岡本孝之…… 1

第Ⅰ部　神奈川県考古学会設立20周年記念講演の記録

1．【記念講演１】…… 5

神奈川県考古学会の発足前夜と今後への期待

神奈川県考古学会　村田　文夫

2．【記念講演２】…… 13

神奈川県考古学会と埋蔵文化財～新たな遺跡保護と活用を目指して～

茅ヶ崎市教育委員会　大村　浩司

3．積み重ねること　創りだすこと

神奈川県考古学会の未来に向けて～記念講演を受けて～…… 23

神奈川県考古学会　副会長　中村　若枝

第Ⅱ部　平成22年度考古学講座『神奈川県の考古学・最近の動向』の記録

趣旨説明　井出　智之…… 37

1．旧石器時代の動向　諏訪間　順…… 38

2．港北N.T.地域の整理作業20年　石井　寛…… 45

3．神奈川県下の弥生時代研究　この20年　西川　修一…… 57

4．古墳時代の動向　柏木　善治…… 77

5．奈良・平安時代の動向　服部みはる…… 85

6．中世の動向　玉林　美男…… 92

7．近世の動向　山口　剛志…… 99

8．近代・現代の動向－近代遺跡の調査研究事例から－　天野　賢一…… 109

例　　言

1．本書は、神奈川県考古学会の設立20周年を記念して行われた事業のうち平成22年度発表会の講演記録（第Ⅰ部）と、平成22年度講座の記録（第Ⅱ部）とを収録したものである。

2．収録内容は、各発表者の発言を音声記録媒体より活字に再現した上で、各発表者に加筆・修正いただいたものである。挿図については、各発表者に用意・調整いただいた。体裁は、各発表者によるものと、編集担当により整えたものとがある。なお、編集段階において数年を経過しているため、一部その後の研究の進展について盛り込まれたものもある。

3．本書収録の平成22年度発表会および平成22年度講座については、開催当日に要旨集が刊行・配布されており、本書と合わせてご利用いただきたい。

4．本書における発言再現および編集作業については、神奈川県考古学会役員のうち、第Ⅰ部を平成22～25年度発表会担当者が、第Ⅱ部を平成23～26年度講座担当者が担い、実施した。担当者名は任期により年度毎に変更があるため、担当別に列挙することとする（50音順）。

発表会担当：栗田一生、鯉渕義紀、橋口豊、山田光洋

講 座 担 当：五十嵐睦、井出智之、宇都洋平、鈴木次郎、中三川昇、横山諒人

緒　　言

―神奈川県考古学会創立 20 年の成果―

神奈川の考古学は、モース以来、格好のフィールドとして輝かしい研究史をもってきましたが、県考古学会としてまとまったのは、20年ほど前でしかありません。

1970年代からの開発ラッシュによって多くの遺跡が発掘され、その成果を広く県民・市民に示そうではないかと、1977年に第1回神奈川県遺跡調査・研究発表会が横浜市開港記念会館で開催され、その実施を支えるために1991年に本考古学会が結成されたのです。

研究者だけでなく同好者など広く会員を募り、一時は400名を誇りました。発表会だけでなく、考古学講座を毎年実施し、県内考古学の解説や掘下げ、問題点の提示など普及にもつとめ、見学会の開催、連絡紙「考古かながわ」を刊行してきました。会誌『考古論叢神奈河』では、専門的な研究成果を示してきました。創立20周年を記念した発表会や考古学講座を2010年と2011年に開催しました。本書にその成果をまとめることができました。ご講演いただいた諸氏に改めて感謝申し上げます。

ところが、その記録集を刊行する段になって停滞し、4年を経過してしまいました。発表いただいた講演者各位と会員の皆様に深くお詫び申し上げますとともに、今後の会の運営をしっかりせねばと決意する次第です。近年の会員の減少傾向は止まらず、350人となってきました。魅力ある考古学を広く示すためにも、役員一同一丸となって努力してゆく所存です。もし、来る30周年を祝うならば、今から準備しなければなりません。時代にあった会運営をめざし、その体制を固めたいと思います。

本会の運営には、熱意ある役員の活躍と考古学に関心をもつ多くの会員のご支持がなければなりません。今後ともよろしくご支援をお願いいたします。

神奈川県考古学会会長

岡　本　孝　之

第Ⅰ部

神奈川県考古学会設立20周年記念講演の記録

【記念講演１】

神奈川県考古学会の発足前夜と今後への期待

村田（むらた）　文夫（ふみお）

司会：　それでは時間になりましたので、これより、神奈川県考古学会設立２０周年記念講演として、二本のご講演をいただきたいと思います。まずはじめに、「神奈川県考古学会の発足前夜と今後への期待」と題しまして、神奈川県考古学会員の村田文夫さんにお願いいたしますけれども、その前に簡単に村田さんの略歴をご紹介したいと思います。村田さんは、立正大学を卒業されまして、昭和 40 年 4 月に川崎市に採用されました。それ以降、一貫して川崎市の文化財や博物館行政に長く携わってこられまして、その間に縄文時代を中心とした考古学の研究も進められてきました。平成 15 年 3 月に川崎市を定年退職なされた後も、川崎市あるいは県内において考古学のご研究を積極的に行っているという状況であります。また、今日の題名にも書かれておりますように、当学会の設立のメンバーの一人として活躍された方でもあります。それでは、よろしくお願いいたします。

村田：　今、ご紹介いただきました村田でございます。今日は、この会が発足して 20 年という記念的な行事があって、その中で昔のことを知っている人が何か喋っても良いのではないかということで、私の方へお鉢が回ってきたものとみられます。経過はともかく、このような機会を作っていただきましたことに、心から御礼申し上げたいと思います。

写真１　講演中の村田文夫氏

思い出しますと、この学会が発足したのは、平成３年４月22日。横浜の開港記念会館で第一回目があったわけですが、学会は突然できたものではありません。その前身がありまして、それが昭和52年に発足した神奈川県遺跡調査研究発表会準備委員会でした。その中では、もちろん遺跡発表会が中心で行われておりました。その遺跡発表会準備委員会を引き継いだのが、この神奈川県考古学会ということになります。平成３年、今から20年前というと、私はまだ48歳で、若かった。さらに遡って、昭和52年の遺跡発表会の時となりますと、まだ34歳でした。役所の方の仕事もまさに一兵卒で、東奔西走していました。まだ足腰が丈夫だった時代です。今68歳になりますので、34歳というと丁度半分。人生の半分が、神奈川県の考古学会と何らかの関係を持ったということです。

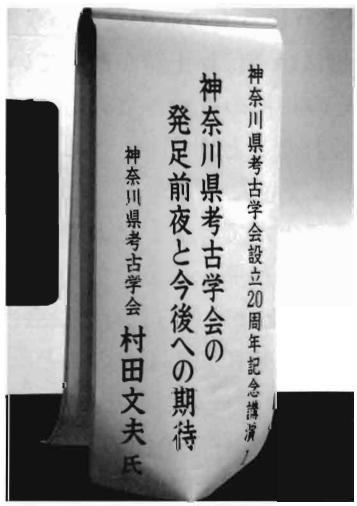


写真2　記念講演の演目

そして、平成３年に学会は発足したのですが、平成 13 年、10 年経ちました時に、色々会の内部で規約等の見直しがありました。と言うのは、もうだいぶ長くなった方、私も含めてですがおりますし、もっと新しい血を入れた方が良いのではないかということで、機構の色々な見直しがありました。私たちは十分長くやりましたので、10 年に顧み、一応役員という立場は引退いたしまして、その後は、若い人達に託したということです。そもそも組織というのは、10 年も経ちますとやはり段々淀んで、老朽化してきます。そういう意味で 10 年で切り替えるのは、丁度いいタイミングであったと思っております。私はこの会の役員と言う立場が切れてから 10 年ですが、今でも遺跡発表会等があるときには、できるだけ顔を出して懐かしんでおります。

私としては、本日この席に立つにあたって、幾人かの人の思い出があります。初代会長が日野一郎先生、二代目の会長が岡本勇先生でした。ご両人とも、この世界からあの世へ行ってしまわれております。日野先生はその当時の方にしては非常に身長が高く痩身な方で、歴史考古学の権威者でした。その傍ら、武相高校の校長さんをされておりました。意外と知られていないのは、高校野球連盟（高野連）の大変重職におりました。ご本人の研究者としての実績はもちろん十分ですが、そういう要職に就かれていることから分かるように、大変バランス感覚の良い先生でした。ですから仲間と色々相談し、初代の会長さんにはそういう意味で日野先生が一番良いのではないかということで、先生のところへ下打ち合わせに行きましたら、やってもいいですよと言う感じでしたので、それで総会の席ではかり、日野先生にご了解いただいたというのが第一の思い出です。

それから、岡本先生。先生は日本の縄文研究を引っ張ってきた第一人者と言ったら間違いないと思うのです。後年はあの港北ニュータウンという広大な地域の遺跡群研究を身を以て進展させた、まさに考古学界を代表する研究者であったと思うのですね。私は、岡本先生と長くお付き合い頂いてまいりましたが、先生はご承知のとおり大変お酒の強い方でした。私も考古学をやっているくらいですからお酒は大好きな方なのですが、どういうわけか岡本先生と二、三人の席でゆっくり飲む機会が持てなかったのが一番残念です。もっともっと岡本先生の人間性に触れたような話が聞きたかったと思っています。

亡くなられた方の思い出話ばかりで申し訳ないのですが、この会にとって、私たちの同志として頑張ってくれた方が、東海大学の織笠昭先生でした。織笠先生はご承知のとおり、旧石器研究の第一人者ですが、この会の発足の時にも、大変奔走された方なのです。先生は、御研究の内容を見てもわかるように、ぶれない頑固一徹な方で、この会の運営にあたっても、常に自己の考え方を明確に言ってくれました。それに賛成する人も反対する人もおりましたが、織笠先生は非常にその辺はピシッとわきまえた人で、いつも筋を通された人でした。そういう先生が平成15年5月21日、突然お亡くなりになり、私たちは本当にショックを受けました。

そのような訳で、まず私がこの話を引き受けた時に、最初に浮かんだのは、そういう先生方への思い出でした。

＊　　＊

これからは話の本題に入っていくのですが、いきなり「県の考古学会を」といってもピンとこないでしょうから、私の自己紹介を兼ねながら、段々本題へと入っていきたいと思っております。

私は昭和18年３月10日に川崎に生まれ、ずっと地元の小・中学校を出てきたのですが、その後、立正大学の方に入学し、そこで考古学と出会うわけです。そして、最初に行った発掘が、横浜市の三殿台遺跡です。私は、歴史は嫌いではなかったのですが、遺跡のことは全く知らなくて、ただその時に三殿台遺跡の発掘に行くと、一日300円の日当が出るということと、10日間行けばよいと。ですから、私は世に言う「考古ボーイ」ではありません。土器片というのはこういうものなのだということを、実はその時初めて知ったのです。我が家に帰ってきますと、家の畑にいっぱい土器が散っているわけですね。「ああ、なんだ俺のところの畑も遺跡だったのだ」と、その時初めて知った訳です。もう一つ良いことがあったのですね。先輩達がお酒をたらふく飲ませてくれたことです。

私はもともと、中学校の先生になるつもりでした。その準備をしていたのですが、たまたま川崎市の採用試験があると教えられて受けたのです。運よくそこに入ることができましたので、学校の先生は諦めました。市役所内で配属されたところが教育委員会です。私の経歴を面接した人事担当の人が記憶してくれたのだと思います。「おまえは市長部局にいても役に立たないから教育委員会へ行け」ということで、教育委員会社会教育課文化係に配属されました。それが昭和40年４月のこと。正直言いまして、大学で学んできたことが仕事で活かせるということは大変ラッキーなことだったのですが、ご承知のとおり昭和40年代は、東名高速は走る、第三京浜は走る、大規模な住宅公団の開発が始まる、ということで、大規模開発の所謂「草創期」みたいなころだったのです。都道府県では、その当時40数名の専門職員がいたと思うのですが、市町村ではまだゼロでした。川崎市に入った私と、浦和市に

青木義脩さん、市川市に熊野正也さんがおられた程度でした。僕らは同期なのですが、そのあたりが首都圏の市町村で文化財担当をやっていたわけです。

それで川崎市の事情で言いますと、第三京浜、東名高速が走り、東名高速では長尾下原遺跡がひっかかった訳です。またその頃に集中したのは、小田急とか、東急による沿線の区画整理事業だったわけですね。

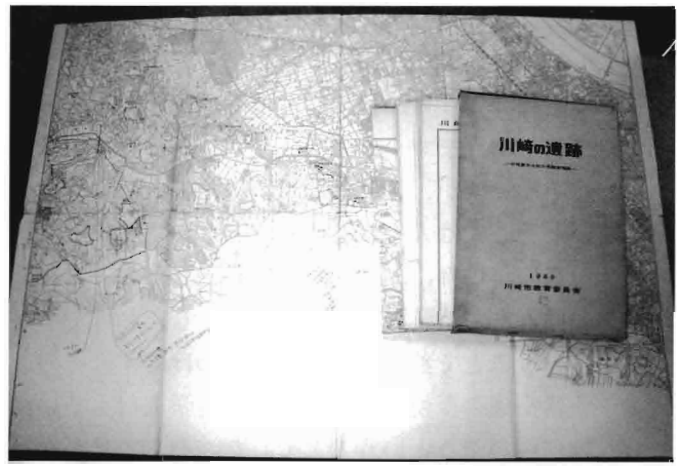


写真3　最初に刊行された遺跡地図（昭和 42 年度）

大手の企業と地元の農家の人と連携して電車の路線を延長したり、区画整理をしていく、ということをやったわけです。しかしその頃は、どこの市町村も遺跡の実態が把握されていなかったのです。確かに当時の文化財保護委員会からは遺跡地図は出ていましたが、非常にスケールの粗いもので、小さな点で遺跡の位置を示してあるだけでした。実際に市町村に入った我々が開発計画内の遺跡をどうするか行政指導する材料としては不十分でした。川崎市に入ってまずやったことは、遺跡地図を作るということでした。幸い川崎市には文化財調査員という制度がありました。これは条例設置の文化財審議会ではなくて、もっと若い研究者を中心とした実動部隊としての調査員制度でして、そこに考古担当の調査員もいたわけです。そのお一人が、私が長くお付き合いさせていただいている渡辺誠先生だったのです。渡辺先生は今は名古屋大学の名誉教授ですが、あの当時は、慶應義塾大学の大学院生でした。それから、私の先輩にあたる関俊彦先生、高山純先生、あと伊東秀吉先生だとか、多くの先生方にとにかくお願いいたしまして、一万分の一のスケールで遺跡地図を作りました。今、本会の会長をやられています岡本孝之さんも一緒に私たちと回って一生懸命、撚糸文土器を集めていたと思うのです。それが『古代文化』誌上で撚糸文のすぐれた論文を書いた時の基だったと思うのです。

そのころから、全国的に、特に関東甲信越がそうなのですが、「○○遺跡発表会」とか「○○遺跡学会」といったものが、都道府県単位で開催されてきました。そこでお互いに情報を共有する訳です。要するに、いくら遺跡を掘っても報告書ができるまで何も分からないのではしょうがない。良い成果をあげたのならば、速報的な意味も含めて遺跡発表会をしようという訳です。当然、我々にも情報が入っていましたので、神奈川県でもつくりたいという声が40年代から段々出始めてきました。この頃には港北ニュータウンなどの計画が具体化していますから、当然の成り行きであったと思うのです。ただ神奈川県の場合、いきなりできなかった背景があります。一つには、発掘件数がどんどん増えていたのです。ものすごい量を川崎市でも掘っていましたが、横浜市内ではさらに多くの遺跡を掘っていました。つまり、日々の発掘の方が優先されていた状態であったということ。それから神奈川県の場合は、比較的早い段階から、川崎、横浜などには、○○調査会とか、○○研究会というのが活躍していました。実績がなければ新しい会を作り上げることは容易なのですが、既に数々の実績を上げている会があるわけですね。それらのグループとどのように協力し合っていくかという問題がありましたので、神奈川県考古学会の発足と発表会を一緒に立ち上げることができなかった訳です。ともかく発表会を先にやろう、ということで、学会の設立を遅らせ発表会を先行させた訳です。それが昭和51年に「発表会」ということで、県内在住の考古学研究者とか、所謂研究団体が集まりまして「準備委員会」を発足させた背景です。そのとき、レジュメにも書いておきましたけれど、岡本勇先生が大変きつい一言を言われたのです。「遺跡調査発表会では駄目だ。遺跡調査・研究発表会でなければ」と。私は今回のレジュメを書くにあたって、その当時の記憶をもう一度確認するため、同じ仲間の小川裕久さんに確認してみました。「小川さん、あの時岡本先生は研究ということを強く押したけれど記憶してますか」と聞きましたら、小川さんも「間違いなくそう言っていたよ」ということ。岡本先生の想いがそこには十分あった訳ですね。岡本先生が「研究という二文字を入れろ」と言った真意は何か、後輩の私たちに

とっては永遠のテーマみたいなものだと思っております。

＊　　＊

昭和52年６月26日、横浜市開港記念会館で第１回目の発表会を行いました。その時は14遺跡が紹介されております。その発表会のレジュメの表紙は「準備委員会」という名前で、今から思うと大変中途半端ですが、これは先程言った考古学会の設立よりも、遺跡発表会の方をはやくしたい、という思いがそこには入っているわけです。

この年以降、順次やっていきました。一方、準備員会の中でも色々な議論があり、要するに神奈川県は遅れて遺跡発表会をスタートしたわけですから、よその県と違う独自性を出さなくてはいけない、ということで独自性を工夫したわけです。その一つは、発表会場を巡回させること。1回目、2回目は、一番交通の至便なところで、考古学人口も多い横浜市でやりました。これを横浜市だけではなく、各地に回わそうということでした。そこで私が次は川崎市で引き受けますよ、と手をあげて川崎市で開きました。そのあと平塚市、大和市、鎌倉市、相模原市というように各市を巡回しました。二つには、遺跡発掘成果の発表だけではなくて、記念講演をやろうということになりました。記念講演は考古学と隣接する学問のところから色々な話を聞いて学習してみようということで行いました。どのような先生にお願いしたかと言いますと、縄文研究の大御所である江坂輝彌先生とか、テレビの時代考証でお馴染みの小和田哲男先生、鎌倉にお住まいの作家・永井路子さん、火山灰研究の町田洋先生、文献学の平川南先生、形質人類学の森本岩太郎先生、板碑研究の大御所・服部清道先生、そういった錚々たる先生方に必ず一本お願いしておりました。丁度、江坂先生の時は、10周年の記念でしたので、会員に事前にアンケートし、希望を聞きましたら、江坂先生のお話を聞きたいということでした。私は幸い江坂先生に長いことお世話になり、教えていただいておりましたので、事前にお前が交渉して来いということ。電話で交渉しましたらば「いいですよ」ということでした。以前、ご一緒に韓国旅行した時の江坂先生は非常に敏捷で、山坂を駈けるようにして登っておりましたが、講演の時にお見えの先生はちょっと御足が弱っておられました。ただ講演の内容はしっかりしておりまして、神奈川県下の貝塚がどのような順序でどのようにして掘られたのかというお話しを、秘話の類も含めて聞くことができ、10周年記念に相応しい素晴らしい講演であったと今でも思っております。

次に考えたのが、400名前後いた会員をどのようにして引っ張っていくかということ。一番大きな長野県考古学会に次ぐくらいの会員数でした。また、非常に特徴的だったのは、三分の一ぐらいの会員は、考古学に関心を持つ考古学ファンだったのです。三分の二くらいはプロパー、言わば考古学のプロで、業としている人もいました。でも、我々としては、考古学に関心を持ってもらっている三分の一ぐらいの人たちにどう活動を訴え、関心を継続していただくかということが大きな課題でした。そのためには専門的なことをできるだけ易しく解説して、現代の事象と古い考古学の世界がどのように繋がっていくのかということを、できるだけ分かりやすく説明していく。そのような会にしよう、というのが、そのときの約束事でありました。

＊　　＊

そんなことで独自性は打ち出していったのですが、その一方で、深刻な問題が遺跡発表会の中で出てきました。最大の問題は、事務局が無かったことです。結局、準備委員会ということでしたから、しっかりした事務局というものを持っておらず、その当時すでに発足していました神奈川県考古同人会、これは神奈川県教育委員会の職員が事実上中心となってやっている会ですが、実はそこに「おんぶにだっこ」してもらっていました。そこに事務局的な機能もお願いをしたり、さらに厚かましい話ですが、資金が足りなかったのですね。だからレジュメも印刷できない。そんなことで、神奈川県考古同人会から運営経費の一部まで拝借し、その拝借したお金は発表会当日のレジュメを売って返還していました。なんともすごい自転車操業をやっていたわけです。二つ目は、会場が巡回するということとも関連するのですが、要するに会計担当がいなかったわけです。会計がいなかったため、2回目の時の資金は1回目の売り上げの金を溜めておいて、その都度充当していく。これを次回から次の回へと繰り返していくわけですね。ですから、誰一人として全体的な数字が統括できていなかった訳です。実は

川崎市が13回目の平成元年に、やりましょうという声を上げたのですが、送られて来た資金は、もう完全に底をついていました。私はその何年か前、資金に若干余裕があった頃を記憶していましたから、当然それがあるものだと思っていました。でもこれは、開催を担当してくれたところを全然責めるつもりはなくて、会として会計担当者という重要な責任者を置かなかった方が明らかに悪かった訳です。次回の開催市についても、発表会の都度、お酒を飲みながら反省会を開き、その席で次回開催市を決めていたという、今から思うと大変恥ずかしい話ですが、そんなことをしていたのですね。ですから会計担当とか、事務局とかの問題がすっとんじゃっていたわけです。

川崎市では引き受けたはいいけれどお金が無い。私は、開催を受託した側の責任者ですからいろいろ考え、結局、コマーシャルを入れることにしました。13回目のレジュメの最後の方のページには、コマーシャルがいっぱい入っています。コマーシャルが入っているレジュメは、この後一、二回くらいしかないです。８ページか９ページ全てコマーシャル。協力してくれたのは、地元で書籍を扱っている文教堂、六一書房、考古学とは全く関係ない中央農協、川崎信用金庫、博物館展示をやっている京都科学、トータルメディア、パリノ・サーベイ、神奈川考古同人会も入っていました。全部で11か所もありました。当然内部からコマーシャルは向かないという声があがりました。でもこのときには、それをやるしかなかった訳です。それからポスターを作りました。それはプロのカメラマンが撮った写真です。「今、地下三尺から甦る」という見出しをつけてあちこちに貼りました。

このような経過がありましたので、当然、磐石な組織作りというものが課題になってきたわけですね。そのためには平成２年６月30日、色々な関係者が集まって神奈川県考古学会の設立に向けた発起人会を作りました。もう準備委員会というかたちでは事が成りゆかなくなってしまった訳です。そして平成２年８月20日、県内の研究者とか研究団体の方々、とにかくありとあらゆる人たちに呼び掛けまして、90名くらいは来たかと思うのですが、そこで発起人会で決めた内容を説明したわけです。結果的には賛成を得たのですが、やっぱりこの席は賛否両論がものすごく激突しました。特に既存の団体がありますから、そういった人たちからは、当然それとの関係はどうなるのか、そういうことで大変厳しい意見も出ました。それには私と小川裕久さんがおもにお答えしましたが、結果的には大きな議論を経たうえで、一応は了解をしていただきました。そして、平成３年４月22日に発足にこぎ着けたわけであります。

第１回から第14回までは、「県遺跡調査・研究発表会準備委員会」という長ったらしい看板でやってきた訳ですが、第15回からは「神奈川県考古学会」というすっきりした名前の発表会に切り替わったわけです。その後、色々と検討を加えまして、県考古学会プラス開催市が横浜なら横浜市教育委員会、川崎なら川崎市教育委員会といった、開催市と共催で行うようになりました。場所によっては博物館なども共催に入るケースも出来ました。共催関係が認められますと、会場の使用料の減免という大きなメリットが魅力的でした。

発足は平成３年４月22日ですから、平成13年には10年経ちました。そこでもう一度内部の機構を見直そうということになりました。役員の数とか、いろいろな部署の新設など、今でいうところの「仕分け」をしました。この時に大きかったのは、役員の任期を明確にしたことです。会長・副会長の任期は、これは問わない、というようになっておりますが、それ以外の役員は一応、10年を超えないということになりました。私などは準備段階から20何年もやっていますから、当然身を引くいいタイミングだった訳です。このときに相当多くの役員方、三分の二くらいが入れ替わったと思います。そして、新しい県考古学会としての活動が出発した訳であります。今回はその新しい体制で早くも10年を迎えたということであります。

＊　　＊

それで、まだ少し時間がありますので、今後の考古学会に期待したいことを、年寄りが言うのもおかしいのですが、実はいくつかあります。

一つは、遺跡調査・研究発表会について言いますと、勿論内容は良いものをやられていますが、私はもっと独自性があってもいいかなと、とも常々思っています。要するに日本考古学協会の地方版で

はありませんから。神奈川県としての独自の目玉があってもいいのではないかなと思う訳ですね。私達の時代にやってきた記念講演、すなわち隣接科学の第一人者の話を聞く、これをそのまま復活しろと言う訳ではありませんが、その種の何か独自の仕掛けがあったら、それだけでも見たい・聞きたいという気持ちが湧いてくるのではないかと思っています。

それから、遺跡の持っている個性と言うものをもっともっと前面に出しても良いのではないかなと思うのですね。かつては今と違ってパワーポイントはありませんから、スライドでやっていた訳です。司会者が名前と遺跡名を言うと、発表者が壇に登り、まず最初に発した言葉が「スライドをお願いします」。そうすると、その遺跡（調査）にどういう目的があって、どういう成果があって、何に課題を残したのか、それはスライドの中で順次説明していくのでしょうけれど、やっぱり聞く側にしますと、まっさらな状態でその事柄を５分でも10分でもいいから説明してほしいですね。そこでスライドの枚数を制限しようかというような話も真剣にありました。出てきた土器を、取っ換え引っ換えやられたら、何の意味で掘ったか分からない。それだけで時間が過ぎていく訳ですから。つまり遺跡を調査した意味が聞く側に十分伝達されないという気がかりであったのです。残念ながら今もあまり改善されていませんね。発掘した遺跡が持っている意味、大いなる個性、何の成果があったかということをもっと正面に据えて大きな声で言ってもらいたいと思っています　（誌）

それから細かなことですが、今日、色々な映像が紹介されましたが、ほとんど人物が写っていません。特に遺構が写っている場面では、できれば人間が写っているのがいいと思ってます。要するにヒューマンスケール。二、三年前ですか、慶應義塾大学の日吉校舎の所から第二次大戦時の遺構が出てきました。あの発表を見ていて、ヒューム管のようなものが出ているのですが、その直径が1メートルあるのか２メートルあるのか、映像を見ていても分からない。発表者は何メートルとかナレーションしてくれたと思うのですが、私なんかから見れば、そこに人間が一人入った写真をみせてくれれば、大人の男性なら170センチメートル前後ですから、直径2メートル前後の管だなと一目でわかります。それから、今日もありましたけれど、この竪穴の住まいが大きいとか、小さいとか、人数を入れて写していました。私はあれは非常に良いと思うのですね。ああいう風にやってもらえると、「ああこれはでかい住居だ」と一目で分かるわけです。そもそも竪穴住居は、そこに何人が起居できてナンボの世界ですから。そういうヒューマンスケールをもっとやって欲しいなと思っています。これは先年亡くなられた佐原真先生も盛んに言っておられたことです。

それから考古学の講座。私はやはり発足当時の原点がありますので、考古学プロパーではないが、考古学に関心を持っておられる人達にいつまでも会場に足を運んでほしいと願っています。おそらく徐々に会員数は減っているのだと思うのですが、なぜ減っていくのかということを考えた時、だんだん専門的に特化していったということが大きな理由ではないかと思うのです。私はできるだけ易しくして多くの人々が興味を持ってもらえるよう、発表方法も工夫してほしいと思っています。同志社大学名誉教授の森浩一先生が、「考古学は地域に勇気を与える」ということを色々な本に書いています。よそから新しく入ってきた人が、その土地に残されている、例えば貝塚や古墳を見たり、勉強をした時、こういう歴史があったところにこれから住むのだとか、あるいは長く住んでいる人にも、実はこんな歴史があったのかという、地域に対する誇り、あるいは勇気、そういったものを与えるのが考古学だという意味のことであると思っています。この遺跡発表会にも、そういう側面もあるのだということをもっともっと真剣に考えて欲しいと思っています。

写真4 『かながわ遺跡めぐり』

レジュメの中にも書いておきましたけれど、平成11年にこの会では『かながわ遺跡めぐり』という本を出しています。Ｂ６判の260ページくらいの本です。これは多摩川新聞社という、川崎市に拠点を置く新聞社ですが、そこの社長さんと私は長いこと付き合いがあ

り、それで「是非とも出したいのだ。私も考古学が好きだから」ということになった訳です。ですから出版元は多摩川新聞社で、 編集は神奈川県考古学会になっているのです。これは大勢のスタッフが集まって、神奈川県の代表的な遺跡を、年代と地域に目配りしながら選びました。そして、原則として発掘調査を担当した人に原稿を書いてもらいました。何故、発掘調査の担当者に書いてもらったかというと、遺跡が地下から出てきたときの感動というのは、やっぱり掘った人でなければ分からないだろうということで書いてもらいました。したがって、神奈川県考古学会は一銭も出していないです。多摩川新聞社は2000円前後で売ったのかな。そしてこの種の企画は、その後、音沙汰なしとなっています。本が売れたかどうか別にしても、私はあのような企画は、今後カタチを変えてもいいし、あのままでもいいのですが、もっと続編あっても良いのではないかなと希望しております。

それから遺跡の現地案内等は、私が出不精になってしまっただけなので、今後も続けてほしいなと思っています。

それから、『考古論叢・神奈河』。これは会として刊行する学術的な論文集です。今も大変充実した内容のものが出ていますので、当然継続してほしいと願っています。ただ願わくばですね、考古学をやっている人達はみな一国一城の主だと思っています。ですから、紙面の中でもっともっと真摯な論争というのがあってもいいのではないかと思っています。そうすれば紙面はさらに充実するし、緊張感がでるでしょう。わが身に照らせば、これまで負け戦ばかりですが、生まれつき論争好きな性格だと自己分析しています。

最後の一言で申し上げたいのは、岡本先生が調査・研究発表会にこだわったのはどういう意味かなという問いであります。私たちは、もう岡本先生からは真意を聞くことはできません。ただ、私のように年齢の近い者は、岡本先生に数多く接することができていましたから、その気持ちというものは何となく読み取れるのです。おそらく先生が一番言いたかったのは、やっぱり遺跡を掘った本人にしか分からないような歴史は、その本人が精一杯語ってくれよ、ということだったと思うのです。つまり、「遺跡をして歴史を語らしむ」と言うこと。例えば遺跡は、その歴史が終わってから万（年）の単位、千の単位、百の単位で塵が積もって現在に至っている訳です。考古学は、合法的にその歴史を掘り起こすことができるわけですね。発掘調査を担当する人は、遺跡が持っている目鼻立ちの輝きといいますか、本来の歴史の輝きをもう一度甦らせる責任を持っている訳です。しかし、積もった塵を綺麗にクリーンアップする前に、既存の学説だとか通説だとかに頼って、眼を曇らせてはいけないぞ、そういうことを一番言いたかったのではないでしょうか。勿論、先人の説は大事にしなくてはいけないし、その周辺で研究されたものは沢山ありますけれど、それにはとらわれない、掘った人にしか分からない見方も語ってくれ、と言いたかったのでしょう。

身近なところで言いますと、川崎市宮前区野川に影向寺という古刹があります。有名なお寺ですからご存知だと思います。そこから、「无射志国荏原評」という文字瓦が見つかりました。これが7世紀第4四半期に製作された瓦であることは、間違いない訳です。ですから多くの研究者は、そこから影向寺の歴史が、そこまで遡るということを色々な形で発表されております。大多数の研究者はそれを信じていると思います。しかし私は考古学の立場ですからちょっと待ってくれと言いたい。何故かといいますと、その瓦は8世紀中頃の掘立柱建物の柱を受ける瓦として転用されていたのです。そうすると瓦の製作年代と、そこに二次的に転用された発掘状態との間には、約50年の年代差がある訳です。文献史の人はともかく、考古学をやっている人は、その50年の謎を当然問題視しなくてはならないと思っています。そこで私は少し大胆ですが、この文字瓦は当時強い連帯感で結ばれれば

写真5　影向寺の薬師堂

れていた荏原評衙から、橘樹評衙に同盟の証として寄進された可能性も考えています。それが転じて半世紀後、影向寺の掘立柱建物の柱受けにあてられた。つまり、はじめから屋根に乗せる瓦ではなかったと推測しています。まさに、遺跡の発掘現場から歴史をどう語らしめるかということです。

関連付けてもう一つだけ例を上げますと、これは森浩一先生の本によく出てくる話ですが、大阪府の和泉に黄金塚という前方後円墳があり、終戦直後に森先生が掘られました。内部主体が三つあって、高野槙の巨木を使った割竹形木棺でした。その上の方から、景初三年銘の鏡が出ています。それで多くの人はこの古墳を「景初三年の鏡が出た古墳ですね」という。でも森先生は、「それは正解ではない」と。正しくは、「景初三年銘の鏡が出た古墳ですよ」と言っている訳です。何故かといいますと、問題の鏡は、内部主体の割竹形木棺の中から出てきた訳ではないのです。棺外に鉄斧や鉄鎌と一緒に置かれていた銅鏡だったのです。そうすると、鏡は墓主にとってはすでに大きな意味は無かったのです。そこで最後に置いたわけですね。ですから、考古学というのはまさに「出たところが勝負」。「出たとこ勝負」では、丁半のやくざの世界、博打になってしまいまずいです。考古学は「出たところが勝負」ということです。その「出たところ」をどうちゃんと押さえるか。おそらく岡本先生も、森先生も、或いは我々の多くの先輩たちも、みなそのところを真剣に考えていたのだと思います。私が言うのではありません。尊敬する我々の先達が言っている言葉の意味をみんなで噛み締めながら、遺跡調査や研究に励んでほしいと思っております。

丁度時間になりました。大変余分なことを言いました。けれども、この会がある日突然にできたわけではございません。その前段の歴史があるということを改めて強調し、つたない記念の講演とさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。（拍手）

＊　　＊

（註）本講演は、2010年11月21日。その後、遺跡調査・研究発表会を聞く機会があったが、印象としては調査目的・成果等を明確にした発表が多くなっていた。是非とも今後も継承してほしいと願っている。

【記念講演２】

神奈川県考古学会と埋蔵文化財

～新たな遺跡保護と活用を目指して～

茅ヶ崎市教育委員会　大村　浩司

司会：　大村さんの略歴、これを簡単ではありますが、ご紹介したいと思います。大村さんは國學院大学を卒業されて、昭和55年4月に茅ヶ崎市教育委員会へ入庁されております。それ以後、現在まで茅ヶ崎市の埋蔵文化財行政に携わっております。特に、民間開発と埋蔵文化財保護の調整、遺跡の整備、史跡の指定を目指した発掘調査など、幅広く活躍されております。それではどうぞよろしくお願いいたします。

大村：　茅ヶ崎市教育委員会の大村です。過分なご紹介をいただきましてありがとうございます。この会の記念講演ということで、お話をいただいた時、とても私などにこれは出来ないと辞退したのですが、何というのでしょうか、少し今後の未来のことを含めてということをさかんに言われまして、未来は私もよく分からないのですが、未来を考えるのに現状を知ってもらうという意味合いの中で、例えば私が現在携わっております埋蔵文化財の保護行政の部分での内容を知ってもらうことで、それが神奈川県考古学会との関連の中で、今後を考える一つのきっかけになればということでお話を受けたのですが、いざ自分の中で整理をしてみると、なかなかタイトルのように新しい保護と活用を目指してという特効薬というようなものはありません。結論から言わせていただけば、考え方をきちっと整理していくことが重要ではないかと思っております。それを今日みなさんに聞いていただければと思います。

写真1　講演中の大村浩司氏

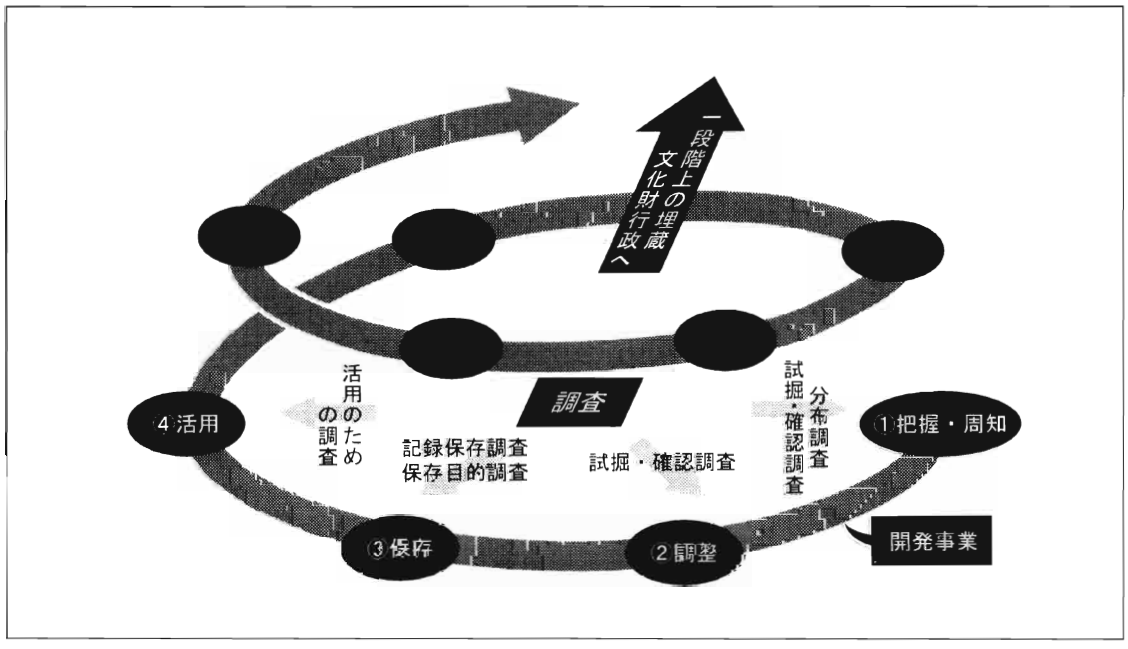
本日は遺跡の保護における4本の柱について話をさせていただきます。私のつたない話よりも映像をたくさんみていただきながらということで、調査発表の、そこに研究が入るか分かりませんが、その延長ということでこの時間を一緒にすごしていただければと思います。柱としては、1つ目に、遺跡と周知の埋蔵文化財包蔵地。これは何をいいたいのかというと、遺跡とは通常神奈川県考古学会を含め、私たちが活動の対象としている遺跡ということですが、これは考古学上でいう遺跡でして、埋蔵文化財行政という立場で扱っている、行政の中で扱っている遺跡とは、必ずしも同じではないということをまず整理してみたいと思いました。そして2つ目は、この保護行政が行っている現在の埋蔵文化財行政にはどんな現状やシステム、そして課題があるのかを整理してみたい。3つ目として、そうした中で、埋蔵文化財行政、考古学をベースにしたものが、現実的にどういうことが行うことができるのかを、私が少し携わらせていただいた保存と活用に係る調査事例を通じてみていただければと。そして、最後の4つ目として、何か整理が出来たらという組み立てで行きたいと思っております。

写真2　記念講演の演目

まず、遺跡と周知の埋蔵文化財包蔵地ですが、これは会場には諸先輩達や行政のメンバーもいらっしゃるので、何をいまさらということがたくさんあると思いますが、そのあたりはご存知の方は聞き

流していただければと思います。日本は法治国家ですので、法律によって文化財が現在守られている一面があります。文化財保護法の中に規定されている埋蔵文化財、これが初めて法律で出てくる言葉ですが、土地に埋蔵されている文化財。ただ、全部埋まっているものだけではありません。古墳のように表に出ているものも含めて埋蔵文化財として保護の対象としております。この埋蔵文化財が周知されているところを、平たくいえば遺跡とみなさんがいっているのです。全国で44万箇所、神奈川県でも7千箇所ぐらいあるといわれておりますが、その数というのは埋蔵文化財行政に基づいて周知されている遺跡分布地図等によって把握されている数ということになります。先ほど村田さんのお話でもありましたように、この包蔵地というのは、徹底的に散布を見ていけば、その数は変わっていくということです。加えて、考古学という学問の研究が進めば、今まで遺跡と認識されていなかったものもまた加わってくるということです。ただ注意しなければならないのが、考古学という学問で遺跡と平たくいっているもの、学問の中にはいろいろと説がありますが、人類誕生から昨日までという説もあれば、そうではないという人もいると思います。そういう部分で自由に遺跡の定義がされる訳ですが、文化財保護法に基づく定義というものは、このような一定程度の限定がされる。これは後ほどまたいいますが、現在文化庁として考えているのは、概ね中世までの遺跡ということになります。そういうことになると、近世・近代の遺跡は入らないのかということになりますが、近世についてはその地域にとって重要なもの、近代についてはさらにその地域にとって特に重要なものということで、周知の埋蔵文化財包蔵地として保護対象とすることになっております。そういった保護対象を決めることがまず第一なんですが、そういった埋蔵文化財行政の実際の業務はどういうことがあるかと。これがずっと長きに渡って先輩達が築かれてきた埋文行政のやり方ですが、最近そのあたりが、文化庁を含めて整備されてきて一つの段階的な項目に整備されております。

まず最初に①把握・周知ということがある。そして②調整。③保存。④活用ということになります。そして、考古学に必要な調査というものがこの各段階に、①～④の中に全部に入ってくる。こういう風に整理されています。ですから、大学等でやる調査というものは、埋蔵文化財行政の調査とはまた違ってくるということになります。これら4項目を少し詳しくみていきたいと思います。まず、①把握・周知です。これは遺跡の所在と内容を把握して、その存在を国民に周知する。まあ文字通りなんですが、繰り返しですが、遺跡の範囲、所在を知る方法として考古学でやっているところの分布調査、マッピングであるとか、そういうことがございます。そしてそれらを反映させて地図を作ったり台帳を作っていくということになります。この部分というのが、以外と地味なことなんですが、本来の遺



第1図　埋蔵文化財行政の構造　「埋蔵文化財の保存と活用」より転載

跡の保護をしていく最も基本的な、いわいる分布調査というものというような、遺跡の把握をするということです。茅ヶ崎の場合には214箇所、この12月で1ヶ所増える予定ですので215箇所を、現在遺跡として登録して、茅ヶ崎市遺跡地図に載せています。そして、これを窓口に置いたり、各課に置いたり、開発等の工事からそれを取扱いの対象とするという、基本的な把握・周知というのがあります。

そして次が、②調整ということです。これは遺跡の、この私がいう今言っている遺跡というのは周知の埋蔵文化財包蔵地ということですが、そこでいろんな工事が発生する場合には、基本的には法的に届出が必要になります。でこの届出を出していただくと、それに対してどういう扱いをという、こういうキャッチボールで基本的に遺跡は守られて、守られる取り扱いを決定していくということになります。この辺りは、非常に目に見えない、普段表には出てこないのですが、最も重要な段階になります。この取扱いの最終権限者というのは都道府県、あとは政令市を含めて、そこが決定権限をもって行っているということになります。届出にはいくつか種類があるのですが、発掘調査に伴う届出というのは文化財保護法第92条というものがございまして、開発等に伴う土木工事等の届出というのは文化財保護法第93条というものになります。この辺りは法律的なものなんですが、要はこうしたきめ細かい法律上で保護されているということが、日常あまり知られていませんので、こういった中のシステムをよく理解をしていただきたいと思います。で、その取扱いを決めるに際して、実はここでも調査が発生しています。全部ではありませんが、遺跡の状況を知るためにこういう小さな、2m×2mぐらいの穴を地面に掘って、遺跡のあるなし、状況、深さというのを調べる。当然のことながら、それに基づいて取扱いを決めていくということになります。まあ簡単な記録を取って、調査が1日ないし2日で終わるということで、年間で何10件という調査をこなしていっていると。これも言わば発掘調査のミニ版で、わずかな時間の中、狭い範囲の調査で遺跡の内容を捉えて判断するということが求められる調査です。

そして、③保存です。この段階で、調整段階で決定した方針に基づいて、遺跡が保存されるわけです。保存という項目ですから、全部残るような勘違いが起こってしまうわけですが、現状として残る、例えば幸いなことに史跡になったり、あるいは開発の部分から外されたり、設計変更が起きたりというようなことについては、遺跡のために最も良い形で残っていくわけですが、残念ながらその開発行為によって遺跡が痛んでしまう場合には、現状で残すことと同等な内容として記録で残すということになります。まあこれを記録保存という言葉で国を含めて言っています。これが保存に当たるかどうかはいろいろ議論があると思いますが、通常記録保存といわれる、記録をとるための調査、これが発掘調査ということになります。この記録保存調査、これが現在全国で行われている9割以上の調査であることを、私たちはよく自覚しなければならないと思います。その中で、ごく一部が今日のような場所でその成果がみなさんに知っていただくことができる。ということは、逆を言えば、ほとんどの遺跡の存在が目にすることもなく、記録保存という名の下で、現状はなくなっていくということがあります。また、発掘調査というのは現地での調査だけではなくて、記録を報告書として刊行することまでが一環ということに今なっています。

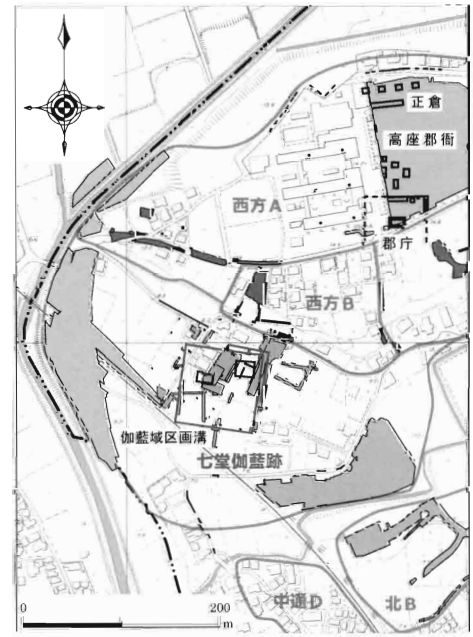
最後が④活用です。現在では、発掘調査を活用するという段階も重要視されています。これは現地での見学会、本日やっておられる発表会、その他博物館での展示、そして史跡等を利用する、これは幸いにも残ったようなところはそういう形も出来ると思います。

ここで整理をしますと、埋蔵文化財の保護、つまり文化財保護法によって保護しているそのシステムというのは、実は把握をして、調整をして、そして保存をして、活用していくという一連の流れであるといえます。そして、それらには全て調査が伴っていると。そしてその活用によって、また周知されていくと。そうすると、理解が段々広まっていくだろうという、この一段階上の行政ができるという、これは文化庁が作られた非常に崇高な内容でございますが、こういう考えの下に現在のいわゆる遺跡が調査され、保存され、そして活用されているという現状があるということになります。

ただ、文化財行政にもいろんな課題がございます。本日はその部分の課題をうんぬんするという趣旨ではございませんので、さらっと触れますが、例えば市町村における埋文行政、いわゆる行政の能

力の格差がそのまま反映しているところもある。先ほど言った届出が出てないところも現状としてある。さらに発掘調査費用の原因者の負担原則の限界。これは国・県事業をやられている県の方、あるいは県の行政では起きないのですが、市町村の場合には今現在、開発行為を行う事業者（原因者）に記録保存をする部分の負担を求めているということがありますので、その部分のいろんな軋轢が生じているという事実があるということですね。埋蔵文化財行政のいろいろな偏りというのは、どうしても発掘調査が中心となって行われていて、どうしても事前の周知・把握、そして活用の部分、調整の部分というのがどうしても弱い形があってバランスが取れていないであろうと。そしてそうした行政の中での専門職員がだんだん少なくなってきて、行政での能力の維持という問題が大きく、年代が、まあ私を含めて先が見えてきた状況の中では危機感があるということになります。そして、埋蔵文化財と考古学の違い、これは端的に遺跡と周知の埋蔵文化財包蔵地という言葉の違いのとおりに、全てが文化財保護法の中でカバーしきれていないという現状があるということになります。

こうした状況が、今、遺跡を取り巻く環境の中にある訳ですが、こうした状況の中で、少しでも保存と活用を進めていくということで、茅ヶ崎市においてこれまで取り組んできた事例を少しご紹介して、その中からどういったものが教訓になるのか、あるいは課題になるのかということを触れてみたいと思います。大変な枚数をたくさん見てもらいたくてもってきてますので、かなり早い状況で動かしますので、またどうしても見たい場合には待ったをかけてください。まず、まず保存を目指している遺跡。茅ヶ崎市で今保存を目指している、つまり保存の形で最もベストなのは史跡指定をしてその遺跡を残すのですが、その保存を目指している遺跡の調査の状況と現在までの成果、それによる課題等を挙げてみたいと思います。



第2図　下寺尾遺跡群の概念図

茅ヶ崎市の北西部です。遺跡調査発表ではないので、ちょっと位置関係がわかりずらいのですが、１つのエリアに古代高座郡の役所跡である郡衙跡、市の方で調査を進めてまいりました古代寺院、区画整理で確認された水辺祭祀などの古代遺跡、そういったものがセットで存在しているということで、これらを下寺尾遺跡群として位置づけて、市としても何とか保存を目指していきたいということです。高座郡衙は県立茅ヶ崎北陵高校のところで平成14年に確認されております。現在ここは埋め戻しをして、校庭として、いわゆる学校の機能をそのままもっています。北側では倉庫群、長大な建物が確認されています。古代だけではなくて、弥生時代の環濠集落もここはあるということで、いずれにしても茅ヶ崎市内においてもかなり密度の高い遺跡であるということです。この南側には区画整理によって古代の河道が出てまして、ここからいろいろ祭祀遺跡を思わせる内容が出てきている。神奈川県内で初めての出土例である漆紙文書も出ている。いうような周りからそういう状況が出てきた中で、古代寺院跡である七堂伽藍も10年前くらいから茅ヶ崎市の方では本格的に確認を始めていると、保存を目指しているということです。

写真３　「七堂伽藍跡」記念碑

この七堂伽藍の場所に記念碑が建っています。この記念碑は、この地点の一つの特徴なんですが、今から約50年前、昭和32年に町の有志がここにお寺の跡があるということで、それを何とか残していきたいということで記念碑を建てられた。その段階ではどちらにどういう風なお寺があるのか、もっ

写真4　記念碑建立時の記念写真

というならば本当にお寺なのかどうかという不安要素があった中で、こういった記念碑を建てて、地域でこのエリアを守っていきたい、継承していきたいという動きが起きたものです。これは重要なことで、行政が動くというよりは、住民が動く良い例であったと思います。現在は行政が充実してくると、なかなか住民パワーが出てこないということがありますので、一つのこういったものが50年前におきて、土地がある程度残ったことによってですね、われわれがそれを引き継いでやっていくことができるという大きな特徴があるのだと思います。先ほど申し上げましたように50年前に記念碑が建てられ、市史の調査が、先ほど村田さんのお話に出ました岡本勇先生が茅ヶ崎市に関わっていただきまして、最初の学術調査を行っておられます。昭和53年ですね。まだ私も入っていませんでしたけど、先生のこの調査の資料が後々いろいろな研究をするのに大変重要なポイントになっております。そしてその後、開発であるとか、現会長である岡本孝之先生が中心となって市民の方と一緒に岡本勇先生の資料をまとめられたということも大きな原動力となっています。そして申し上げましたように10年前から、今度は行政の方できちっと計画的に調査を開始したということになります。現在までの成果としては、伽藍を区画する遺構が発見されたり、主要な建物が発見されたり、もろもろのお寺関係のものが見つかっているということなります。これは岡本勇先生の昭和53年の、約31年前の調査ですね。こういう調査を行われていました。その後は平成12年以降、教育委員会の方で進めた中のほんの一部の成果ですが、瓦が集中している部分。村田さんにヒューマンスケールが入ってないよと怒られてしまいますが、瓦がたくさんということがあるということなんですが、これはなんらかの建物の基礎になっているのではないかという考え方も出ております。土器が集中している、このお寺の最後の時期、10世紀末から11世紀代までの土器が集中して廃棄されている状況が示されている。そして、なかなか復元できなかったお寺の範囲、区画をする部分が少しづつ出てきたというこういう状況です。その状況としては、2種類ありまして、新旧のお寺の古い方は大型の柱穴列で区画をしているだろうということで、これが西側の部分です。こういった形で成果が出てきているということです。これが柱穴（はしらあな）で、これがずっと西側の北辺を区画するものであろうと考えています。そして遺物もお寺に関係するようなもの、これは軸端ですね。これが出てきている。こちらが正倉院のものですが、お経の芯の部分のはしっこを止める、これが出てきていることになります。それから平成14年の調査では銅匙が出てきている。二彩あるいは三彩も出てきている。墨書土器もこういう形で出てきている。遺物も遺構もそこそこ、特に遺物に関しては大分出てきているのですが、毎年この成果をもって、県あるいは文化庁の方に何とか史跡にという話を協議しているのですが、いろんなハードルが出てきている。そうした中でその範囲を確認することから、今度はお寺の内容について面的に調査をするという作業を平成20年から始めております。13次調査という調査から、この面的に行うことに変更しまして、ここで大きな成果を挙がっています。この瓦が少し集中しているところにですね、この部分を掘削して、周りと違うだろう、何らかの遺構があるということで、ここの断面の確認をしたところ、掘り込み地業と呼ばれるお寺等によく使われる建物の基礎工事ですね、そういったものが確認されたということで、ここに主要な建物があったということで、やっと区画とその中の建物が出てきたということが分かったわけです。これもスケールが入ってないので怒られてしまいますが、1m20cmくらいの中で、一旦掘った中に互層できれいに版築をして固めていって、ここから上がおそらく基壇で乗っけていくというようなものです。一旦掘ったものにこういう風に版築をしていって、その上に基壇のまた版築をしていくというような成果が出てきたわけです。これも確認ですので、一部分で掘って、また現在の建物として処理しているということです。この確認したところから、何ヶ所か、ほんのわずかづつ、これは壊すことが前提ではありません。全てを知ることが前提ではなくて、存在

を知ることが前提ですので、あくまでも推定ラインになりますが、この建物の存在というのが明らかになったのです。しかしながら、どうしても指定には大きさの把握が必要だということで、その翌年に、現在茅ヶ崎北陵高校の仮校舎がある敷地内で調査をやったところ、この掘り込み地業の範囲が明らかになって、間違いなくここに基壇をもつ、そして礎石建ちの建物が存在したということで、やっとお寺の存在が具体的に分かったということだと思います。この活用にあたって、地域の方に毎回公開しているということになります。今後、当然地元の協力を得なければならない、それから開発に対する扱いをしていく、そして50年前の思いをそのまま継続していく必要があるだろうと考えています。全てがこういう幸運な遺跡ばかりではないのですが、この出発であった50年前の思い、そこに記念碑があったことによって、地元では何かお寺があるんだよといわれていた、その言葉がずっと40年近くつながってきて、行政も動いてきたという１つの事例で、今後は開発に基づいて偶然発見されるだけではなくて、積極的に守っていく、調査をしていくという１つの事例だと思います。

次は大正年間に指定を受けている、保存されている遺跡の調査と活用の部分の事例です。茅ヶ崎の相模川のすぐ脇のところですが、これが関東大震災によって出てきた遺跡といわれています。大正12年の震災の時に出てきたこの当時の写真なんですが、ここの遺跡の特徴は、まず地震で出てきたということもあるのですが、その出現後すぐに、大正から昭和初期にかけて、当時の研究者であった沼田大輔先生と行政の、国のトップであった柴田常恵先生達の動き、またこの歴史的事象の陰で動いたのは地元の人間であったというようなことが今回の整理でわかってきています。つまり、研究者と地元そして行政が一体となって、この大正年間、今から80年数年前に行ったという事例で、非常に特徴があると思います。

指定は、最初これは、今はこういうことはあまりないのですが、神奈川県による仮指定という手法を使っています。これは現状を変えることがないようにということで、国の史跡となることを前提にしているのですが、当時の神奈川県のその英断で、いち早く、その出現から半年ですかね、約５ヶ月くらいの中で指定にしているということになります。そして一昨年の2007年に追加の指定を受けています。

写真5　出現時の旧相模川橋脚

この写真は、神奈川県が仮指定したときの状況です。これは看板1つ立てればいいという悠長な時代だったということもあるんでしょうが、これによって木を掘り出してもっていくという不届きな人間はいなくなって、まあ御神木扱いになったということです。これから80年経って、大分痛んできたということで、平成13年からその調査と保存を始めたわけです。内容を確認するということを踏まえて、まず本当にこれが橋脚なのかどうか、沼田先生が言われたとおりであるかどうかというのを調べた方が良いという国の指導もあり、部分的な調査を行っています。この場合の調査というものは、今度は史跡の中ですから、現状変更していって、かなり細かい調査計画を踏まえていくことになります。調査の結果、橋であるということが明らかになったのですが、地震の跡がはっきりしている、そして驚くことに大正時代の初期の保存

写真6　初期保存整備の状況

整備した痕跡もきちっと残っているというようなことも明らかになった。橋の状況ですが、これは3.6ｍくらいしか残っていませんでしたが、先端が尖っているということで、1本が独立したものがそれぞれ配置されていて、最も深い、地震であまり出てこなかったものの残りの良いものに切れ込みがあって、これが橋である決め手になったものです。こういう基本的な配置の中で、おそらく橋遺構で間違いないだろうということが分かった内容です。３次にわたる調査の中では、新たに地震で出てきた橋脚以外の中世の土留めという、いわゆる橋に伴う護岸のまとめる、そういった遺構が出てきた、ここが追加指定になっている訳です。そしてこの土留め遺構の時に、出土遺物等が出てきて、中世前半の遺構であるということも明らかになって、沼田先生の考えがかなり近いものであったことも証明することもできました。さらに驚くのは橋脚の土留めで、土留めに用いられた板が一枚板で、厚さが10㎝ぐらい、幅が約１ｍ、2枚出ているのですが、１枚は5m20㎝以上、もう1枚は７ｍ以上で、まだ調査区外に伸びているということで、非常に立派な材を土留めに使っているということが分かりました。いろいろな検討をしたのですが、こうした加工痕であるとか、こういったダボと呼ばれる穴が側板にあるというようなことから、これは本来の目的のものではない、何らかの材料を2次利用して土留め材として使ったのではないかということを現在のところ考えております。元々の材については、これはあくまで可能性ですが、もしかしたら船材の可能性が高いと考えております。ただ、これは史跡ですので、取り出すことはなく、そのままの現位置で残して、そのままま埋め戻しをしております。もしこれが船材ということであれば、この時期の船材の資料というのは数少ないということですので、そちらの部分でもかなり貴重な資料となるということになります。また、この土留めの板を止めている大きな角材との間に、古銭が4枚埋納されていたということで、この古銭の年代観から鎌倉時代前半の行為であろうということが分かった訳です。

そしてこの史跡は、先ほども申し上げました、大正年間からいち早く初期の保存整備を行ったということが大きな特徴といえます。これはたまたま写真が残っていたのですが、一旦掘り下げて、周りに堤を、堤防を作っているのですが、これが今回の調査で確認できました。まあこれができあがった初期の保存池の形です。良く見ると、ここに草が生えたりしていますので、その後のケアがあまりされていなかったかなというふうに思います。今回の調査の段階では、こういったいろいろな器があって、先ほどの写真に出てきた初期の段階のものが池底の中にそのまま埋まっていたと。さらにここにあるのが昭和16年の説明看板。これがまだ茅ヶ崎町の時代ですが、それが立っていたのが、昭和16年ですから戦争の時代で、そのまま池に埋まってしまって、それすら忘れ去られていたということが今回の調査でも分かったということです。これが大正年間に作られた護岸ですね。これがその時の堤土手ですね。ここにこういった土留めをやって、こうやって堤をやって、中に水をやって、橋脚を守るという、初期の保存方法も分かった訳です。そしてもう１つ、この橋脚というのは非常にいろいろなエピソードをもっているのですが、そもそも遺跡の発見というのが、地震によって下から液状化現象で出てきたということで、調査区の中で、数ヶ所で、こういった地震の痕跡を観察することが出来ています。例えばこれは橋脚の1本ですが、この周りにこういうふうに花びら状に砂が盛り上がって噴き出しているんですね。これを断面にしますと、こういうことで、こういう風な形でひきづられて、ここから砂を噴き出して、先ほどのように花びらになるということです。砂まじりのエネルギーが地震の時に起きて、この木をせり上げているということもわかったわけです。これも当時としてはあまり確認されることなく埋まってしまっています。それには元々低い場所ですので、全体に全部水漬けの状態なんですね。今回私達がやったのは、全部水を、水

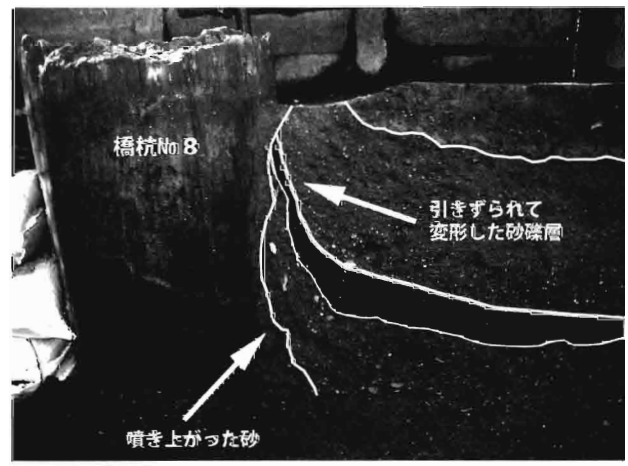
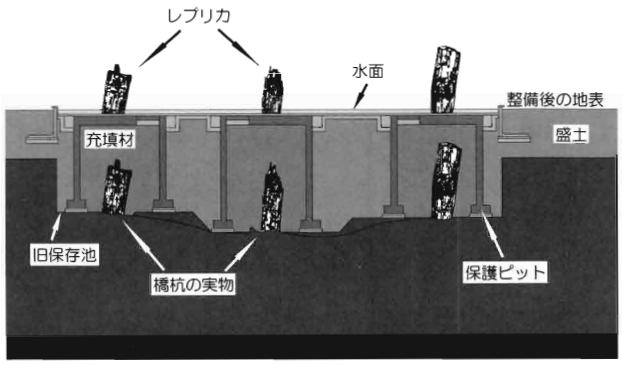


写真7　液状化現象の状況



第3図　橋脚保護方法の模式図

位を下げて調査をやったということで、こういった現象を捉えることができたということです。史跡になって次にどう後世に継承していくかということを、専門委員会の先生方にも入っていただいて、保存の方針を決めていったのですが、まずは原位置を動かさないということと、本物は見せるのは危ないであろうということで、本物についてはこういう保護ピットを作って中に入れて密閉状態にすると、そして見れなくなった部分を同じレプリカを作って全体を上げて景観は維持するということにしました。全体に屋根をかけて博物館にしてしまえという大変豪気な意見とか、もうそのままでいいではないかという消極的な意見とかいろいろあったのですが、そう両方をとって調整して国の方での許可が出たのがこの方法ということになります。これは整備前の状態ですね。池の水を引いた状態です。これにコンクリートの管を１つづつかぶせていくという状況です。この中に全部こういった保護ピットを作って、中を密閉していくというものです。中に埋めていくのはいわゆる荒木田土という粘土ですが、これを完全に埋めることによって、地震前の状態に戻すという発想になっています。これが10本のピットが出来た状態になります。これを埋め戻して、上に同じ状況・景観を作っていきたいという、ここからは活用の整備ということになります。どういう風に整備するかという議論もあったのですが、発掘調査で出てきた初期の保存池、この形をそのまま今回の復元に際して形を活かそうということで、ここはそのままの調査成果を活かしています。そして各ピットの、実は点検坑というのを残しておりまして、3年から5年に1度確認をするということになっています。余談ですが、今年が5年目になるので、年明けに1回開けることになっています。開けるときもまた文化庁の許可を得ながらやることになっています。こういったレプリカ、パッと見は橋脚をちょっときれいにしたようなもので、傾きと位置、長さ、これを全部シリコンで作っています。博物館の中でやるぐらいの技術のものを外で展示したいということで、これも相当お金をかけてやっています。で、これが出来上がった状態ですね。復元のどの状態を復元するか。つまり元々橋脚であったので、橋を架けるという保存の復元という選択もあったのですが、それだと莫大な費用と、果たしてその正しいのかどうかということで議論がありました。遺跡の特徴である地震によって出てきた。それがもう80年前ならいざ知らず、今となると関東大震災の状況を示す大変良い資料であろうということで、出土原位置の発掘状況のまま復元して、まわりには保存整備初期の保存池の復元をするという形をとった訳です。はじめて史跡旧相模川橋脚という石碑を建てることができました。現地は、今度は活用のための、公開活用のための説明板、これは琺瑯（ほうろう）で作っています。長持ちをさせるということで、何度も作り直しが難しいということもありますので、そういったものを用いています。そしてレプリカで立面的な復元が出来ない、先ほどの中世の土留め板に関しては、平面表示を選択しました。こういったことで厚い板と角柱を表すと。そして、この橋脚の出方は、全部地震によって違っていますので、一番出方の少ないものが水の中に埋まって、一番出ているものが

写真8　保存整備後の橋脚

当然水面から出てくるということで、高さだけ変えて、あとは傾き・位置関係は全部同じという表現をとっています。そして、ここでは橋脚は橋である、そしてそれが相模川に架かった重要な橋であるということを示すために、地図と地形模型を作っています。これは鎌倉から西を見た場合に、まず相模川というのが一番の防御になる場所で、いわゆる大きな鎌倉エリアという部分で、この場所というのが位置づけられるであろうと。現在はこういう状況になっています。見学会も都合3回やっています。直接この深さを知ってもらうために中に入っていただいたのですが、さらに深い所は危険なんで、こんな状態でやっていただいています。そして80周年のちょうど記念でしたので、橋脚について文献、あるいは土木、建築の分野からのシンポジウムを行っているということになります。史跡の特徴というのは、橋脚としての交通関連遺跡として非常に価値があると同時に、震災によって出てきたという価値もある、それから遺跡保全・保護の歴史を残すというようなことで、いろいろな所で私が発表させていただいておりますので、何度も見ておられる方もがいられると思いますが、こうしたこの遺跡に関しては、まず突如として出てきたものを、先ほど言いましたように、研究者・地元・行政が一体となっていち早く仮指定をした。そして、この映像の中では出てきませんでしたが、仮指定をしてその後約40年ぐらい経ったときに、地元のこの周りの土地を買った民間会社の人がそこを綺麗に公園として整備したという経過も実はあります。そしてその40年後に、今度は行政の方とみなさんのお力添えでまた整備したということですので、検証されていく方々に対しては、とにかく保護をする意味合いというものを伝えていかなければならないと思っています。

写真9　現地見学会

最後にですね、残念ながら残されなかった、消滅してしまった遺跡、これは万の単位です。そういった中で、当然発表会であるとか、特別展であるとか、いろいろな報告書であるとかで、記録保存されているのですが、以外と少ないのが現地で残っているものです。現実何もなくなっているのですが、そこにあったという土地の記憶を残すことも実は重要ではないかと思っています。いくつかの事例が茅ヶ崎市内にありますので、それをご紹介します。これは県の方で調査をされました配水池なんですが、ここで県のお力添えを得て、こういった説明板、こういうレプリカを設置させてもらって置いていると。遺跡自体は完全になくなっているのですが、そこの場所でそれらを見ることができるという事例です。そしてこれは、民間のマンション開発ですが、御理解があるとかないとかは別として、施主の方がこの場所で遺跡の調査をしたということを残したいということで、こういう看板を立てさせていただいたと。こんなわずかな看板でも、報告書と合わせて現地を訪れれば、土地の記憶というのが出来るであろうという活用の方法ですね。これは画像が悪いのですが、大きな道路の拡幅、これはもう完全に道路になってしまうと何がしがあったというだけで分からないんですが、この部分に、歩道にいろいろな仕掛けをしました。まあ竪穴住居の大きさをそのままタイルで貼ったものを表したり、こういうモニュメント的なものを表したりと、普段通る人が、まあもちろん全員が気にはしないかもしれませんが、関心のある人、あるいは目に留まる人が、ここに遺跡があったんだなということが分かるきっかけを作ることが重要ではないかと思っています。これはたまたま、バス停で人が回遊するということを狙って、こういった展示物を、実物大のものを作っているということになります。

これからの遺跡の保護と活用ですが、いろいろと自問自答すると、まず考古学、埋蔵文化財どちらでもいいのですが、身近なものになっているのか。それは我々ではなくて、市民とか、一般の人の身近なものになっているのでしょうかということです。つまり、我々が独りよがりでやっていないのであろうかと、そういうことを常日頃感じることがあります。それから、教育委員会にありながら、学校教育との連携はどうなんだろうか。まあみなさん、いろいろな形でやっています。生涯学習、そし

てそれぞれの文化財・遺跡等が地域の資源として最近見直されている新たな認識があるのですが、この活用の効果。そして最後に、そういった歴史を活かしてまちづくりされているかというようなことも常日頃思っています。それを今日はそのまま疑問符で出しているのですが、それがそのまま目指していくものではないかと思っています。私が考えているのは、考古学の成果、埋蔵文化財保護をした成果でもかまわないのですが、それを地域、市民に還元する考古学、埋蔵文化財行政でなければやはり理解は得られない。そして、そうするとなかなか協力を求めるにしても難しい。そして、せっかくの時間・費用をかけてやったものが死蔵しまうという現状が片方ではあるのではないかと思っています。そのためには、研究者と行政の協力、行政の中でも他の行政との協働というような、いろいろな分野での共同作業が必要であろうと思っています。この県の考古学会との関係はどうなんだということで、私なりにちょっと考えてみました。私も役員を数年やらせていただいたんですが、まず県の考古学会、先ほどの村田さんのお話にありましたように、発表会から始めたという、この実績があります。まずは行政に先立って、この成果を発表していくというこの34回の実績は大きなものがあって、今日があるのだと思います。そういった実績の継承というが今後の考古学会にはもちろん重要だと思います。それから考古学と埋蔵文化財の違いというのを触れましたが、例えば県の考古学会では近世・近代を取り上げて講座を組まれたりしています。これはまだ埋蔵文化財の方では遺跡としての周知をしていない部分を含めた、そういうテーマで議論をされたことで、そういった取組みを、行政では出来ない取組みが県考古学会の中ではどんどんできるだろうという実績があるんではないかと思います。そしてその部分をもっと活かしていかなければいけないではないかと思っています。規約に総合的な調査研究を通してということがありました。これは総合的な調査というのがどういうことをいうのか、これはみなさんで考えていかなければいけないですが、先ほどの村田さんが言われた、岡本勇先生の調査・研究という、まさに同じような話になりますが、その部分をもう一回、ふり返って考える良い機会なのかもしれません。

最後ですが、これは道のそばにこういうモニュメントを作りました。人通りは悪いんですが、少しでもこれを関心をもって、まさにこの場所にあった遺構の復元もここに置いていくのですが、こういったことで、さっきも申し上げましたけれども、土地の記憶をそのまま残していく、しつこいぐらいにそういうことをやっていくことが、本当に遺跡があったんだという言葉が出るように還元していく一歩ではないかという風に私は考えています。もちろん、関西あるいは県内でも、たくさんそういうことにチャレンジされている所もあるかと思いますけど、抽象的ですが、同じ行為をやるにしても、目的が市民の方に見てもらいたい、見てもらうんだ、知ってもらうんだという意識をもたなければ、ただお金があまったから何かを置こうとか、整備をやろうというだけでは気持ちは通じないと思っています。そしてそれは行政だけが出来ることではなくて、先ほど県の考古学会を含めた市民の方の一緒の動きがなければ出来ないことだと思っていますので、今後の神奈川県考古学会には期待していきたいと思っております。はなはだ記念講演ということではなくて、事例発表で終わった感がありますが、御清聴ありがとうございました。

写真 10　歩道に設置されたモニュメント

積み重ねること　創りだすこと

神奈川県考古学会の未来にむけて
～記念講演を受けて～

神奈川県考古学会副会長　中村　若枝

本会発足 20 周年にあたり記念講演として、村田文夫氏には「神奈川県考古学会発足前夜と今後への期待」、大村浩司氏には「神奈川県考古学会と埋蔵文化財～新たな遺跡保護と活用を目指して～」ということで、お話をしていただきました。本当にありがとうございました。

お二人のお話しを伺いながら、いろいろなことを思いました。私が本会に関わったのは、会が発足しようとしていた時でした。発足時の主要メンバーのおひとり故織笠昭さんから、「役員を」とお話しを頂いただきました。その時は子供が小さいこと、当時船橋まで２時間かけて通っていたことを理由にお断りをしたのですが、できる範囲でいいからと言われ、参加させていただくことになりました。「自分の意見を言って欲しいという」織笠さんの想いに応えているかどうか、まだ何もできていないのではないかと思いながら、今ここに立っています。

１．一般の人も参加を・誰でも参加を・誰でもどうぞ

本会の発足に際し総務として多大な尽力をされた村田文夫さんに「会発足前夜と今後の期待」についてお話していただくと伺い、まず頭の中によぎったのは、新聞記事です。村田さんとともに総務として会の実質的な立ち上げと運営をされた小川裕久さんが、満面の笑みを浮かべ、「いやぁ新聞に出たんだよ」と新聞のコピーをくださいました。県考古学会の発足を報じた記事でした。ファイルにはさんだことは記憶にあるのですが、そのファイルが探し出せず、図書館に３回通いました。発会が４月 27 日ですので、翌日の新聞に載っているはずだと、朝日・毎日・読売・神奈川新聞といくつかのマイクロフィルムをまわしてみたのですが、みつけることができませんでした。三回目に４月 23 日の朝日新聞川崎版で、やっと頭の中に入っていた記事と巡り合いました（第１図）。

20 年ぶりに読んで、驚いたことがあります。「会が発足した」という記事だったと思い込んでいたのですが、「会が発足します」という案内で、それが催し物案内のコーナーではなく、記事として掲載されていたことです。「研究の進展、文化財の保護のためには全県的な組織があったほうがいい。一般の人にも参加してもらって、広がりのある組織にしていきたい。」と、発起人の一人として当時川崎市民ミュージアムの学芸員をされていた村田さんのコメントものっていました。

実は、この記事はそれぞれ横浜版、横浜西部版にも掲載され、その見出しは川崎版「一般の人も参加を」、横浜西部版「誰でも参加を」（第２図）、横浜版「誰でもどうぞ」（第３図）というものでした。この言葉は大きな意味を持っていると、今日でも思っています。

また、４月 28 日付朝日新聞湘南版に「県考古学会が発足　初代会長に日野氏」という記事も載っていました（第４図）。埋蔵文化財の研究や保存などを目的とした、県内で初めての考古学研究者の連絡組織として紹介され、横浜市開港記念会館で開かれた設立総会には 250 人が出席し、約１時間の質疑応答の後、当時武相高校校長日野一郎氏が初代会長に選ばれたことが報じられました。

発起人代表として発足の挨拶をされた日野一郎先生は、会の目的として次の３つのことを話されました。発掘調査内容と研究成果を早期公開するために、有志の好意により運営されてきた調査研究発表会を組織的に永続的に運営し、「調査研究の成果をたかめ、全国的にも寄与したい」「自然環境と調和を配慮の上で遺跡の保存につとめる」「会員相互の親睦を深める機関とする」という設立趣旨を述べられました。その内容は、1991 年９月７日発刊本会連絡誌「考古かながわ」第１号の巻頭文「神奈川県考古学会発足にあたって」に

県考古学会発足へ

27日横浜で設立総会

「一般の人も参加を」

神奈川県内の考古学研究者でつくる連絡組織「神奈川県考古学会」の設立総会が、二十七日午後二時から、横浜市中区本町二丁目の横浜市開港記念会館で開かれる。関係者は「興味のある人にはだれでも参加してもらい、広がりのある組織にしていきたい」と話している。

神奈川県は古くから開けたこともあって、古代から近世の遺跡が多いことで知られているが、これまで県内の考古学研究者が集まる組織はなかった。このため二年前から研究者ら十数人が集まって、「情報交換できる場を作ろう」と、組織づくりが進められてきた。

同会は、遺跡の見学会や研究発表会のほか、県下で調査中の遺跡の概要を報告する連絡誌の発行などを行う予定。会費は年三千円。会員は約三百人を見込んでいるという。

発起人の一人、川崎市民ミュージアムの村田文夫学芸員(㊨)は「研究の進展や文化財保護のためには、全県的な組織があった方がいい。一般の人にも参加してもらって、広がりのある組織にしていきたい」と話している。

二十七日の設立総会では、横浜国立大の岡本勇講師の講演「神奈川の考古学を築いた人たち」などが行われる。当日参加可。

第1図　1991 年 4 月 23 日付朝日新聞川崎版

県考古学会27日に設立

中区で総会

「だれでもどうぞ」

神奈川県内の考古学研究者でつくる連絡組織「神奈川県考古学会」の設立総会が、二十七日午後二時から、横浜市中区本町二丁目の横浜市開港記念会館で開かれる。関係者は「興味のある人にはだれでも参加してもらい、広がりのある組織にしていきたい」と話している。

同会は、遺跡の見学会や研究発表会のほか、県下で調査中の遺跡の概要を報告する連絡誌の発行などを行う予定。会費は年三千円。会員は約三百人を見込んでいるという。

二十七日の設立総会では、横浜国立大の岡本勇講師の講演「神奈川の考古学を築いた人たち」などが行われる。当日参加可。

第2図　1991 年 4 月 23 日付朝日新聞横浜西部版

県考古学会が27日設立総会

「だれでも参加を」

神奈川県内の考古学研究者でつくる連絡組織「神奈川県考古学会」の設立総会が、二十七日午後二時から、横浜市中区本町二丁目の横浜市開港記念会館で開かれる。関係者は「興味のある人にはだれでも参加してもらい、広がりのある組織にしていきたい」と話している。

同会は、遺跡の見学会や研究発表会のほか、県下で調査中の遺跡の概要を報告する連絡誌の発行などを行う予定。会費は年三千円。会員は約三百人を見込んでいるという。

二十七日の設立総会では、横浜国立大の岡本勇講師の講演「神奈川の考古学を築いた人たち」などが行われる。当日参加可。

第3図　1991 年 4 月 23 日付朝日新聞横浜版

県考古学会が発足

初代会長に日野氏

埋蔵文化財の研究や保存などを目的とした、県内で初めての考古学研究者の連絡組織「神奈川県考古学会」の設立総会が二十七日、横浜市中区の市開港記念会館で開かれた。

総会には県内の考古学関係者ら約二百五十人が出席した。約一時間の質疑応答の後、初代会長に武相高校長の日野一郎さん(七六)が選ばれた。

第4図　1991 年 4 月 28 日付朝日新聞湘南版

第34回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

2010年11月21日（日）

会場：横浜市歴史博物館　講堂

横浜市都筑区中川中央1-18-1（横浜市営地下鉄「センター北」駅より徒歩5分）

共催：横浜市歴史博物館

後援：神奈川県教育委員会・横浜市教育委員会・川崎市教育委員会・秦野市教育委員会

9:40～　受付　　10:00　開会挨拶

10:10～10:40
横浜市　三ツ沢貝塚
―沢渡55番80号地点の調査―
安井千栄子氏・今泉克巳氏・芝田英行氏
〔(有)有明文化財研究所〕

10:40～11:10
川崎市　野川神明社南遺跡第2次調査
―弥生時代の大型住居群・古代の掘立柱建物群―
浅賀貴広氏〔(株)盤古堂〕

11:20～11:50
秦野市　神奈川県指定史跡 二子塚古墳
―銀装大刀を副葬する前方後円墳―
霜出俊浩氏〔秦野市桜土手古墳展示館〕

11:50～13:20　昼休み

13:20～13:50
小田原市　小田原城下筋違橋町遺跡第Ⅴ地点
―町屋の上水施設と旧東海道の調査―
渡辺千尋氏〔小田原市教育委員会〕

20th

入場無料

＊図書交換会を研修室で行います。

神奈川県考古学会 設立20周年記念講演

記念講演1　14:00～15:00
神奈川県考古学会の発足前夜と今後への期待
村田文夫氏〔神奈川県考古学会〕

記念講演2　15:10～16:10
神奈川県考古学会と埋蔵文化財
―新たな遺跡保護と活用を目指して―
大村浩司氏〔茅ヶ崎市教育委員会〕

16:15～16:35
神奈川県考古学会の未来へ向けて―講演を受けて―
中村若枝〔神奈川県考古学会 副会長〕

16:35～16:45　閉会挨拶

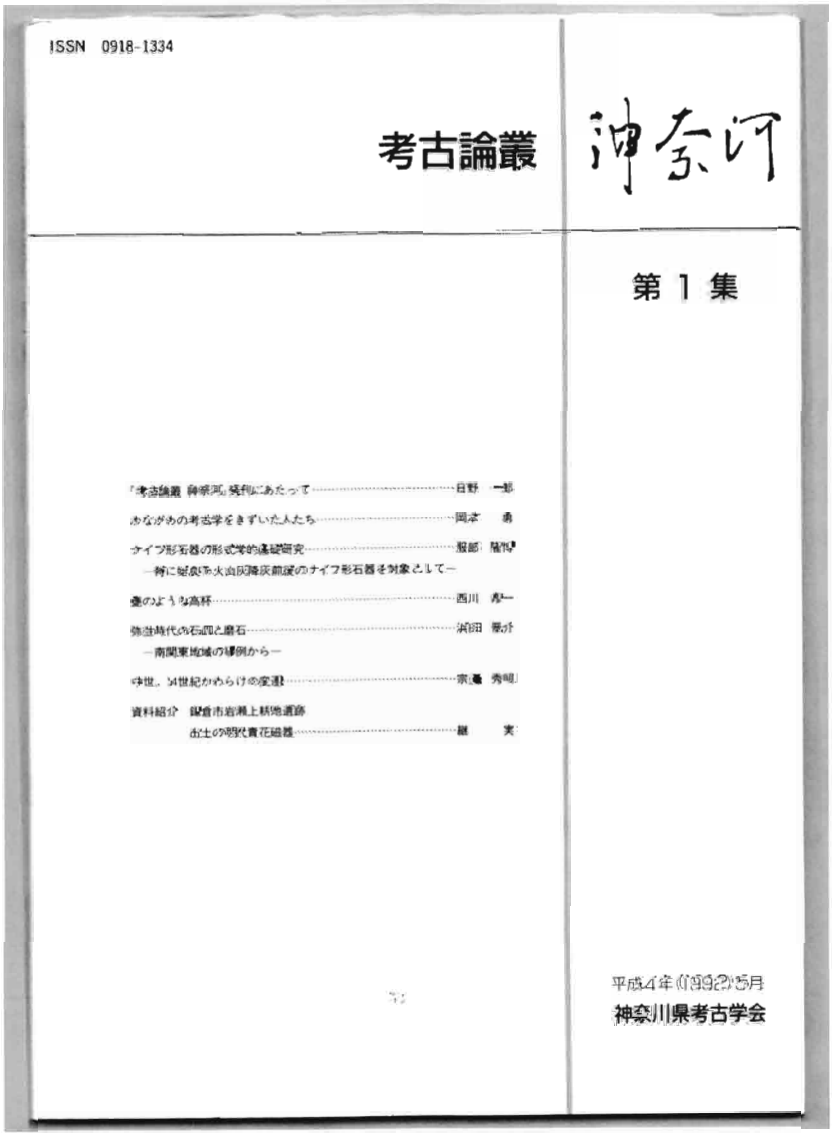
神奈川県考古学会

第5図　2010 年 11 月　第 34 回遺跡調査・研究発表会チラシ

も掲載されました（日野 1991）。設立総会は川上久夫氏を議長に進められ、小川裕久氏の会設立準備の経過報告後、会の設立が満場の拍手で承認されたことが報告されています。会則の採択後、21 名の役員が選出されところで一旦休憩になり、その間舞台の袖で役員の互選により会長に日野一郎先生・副会長に小出義治先生が選出されました。設立総会の会場であった開港資料館の講堂は、熱気に包まれていたことを記憶しています。

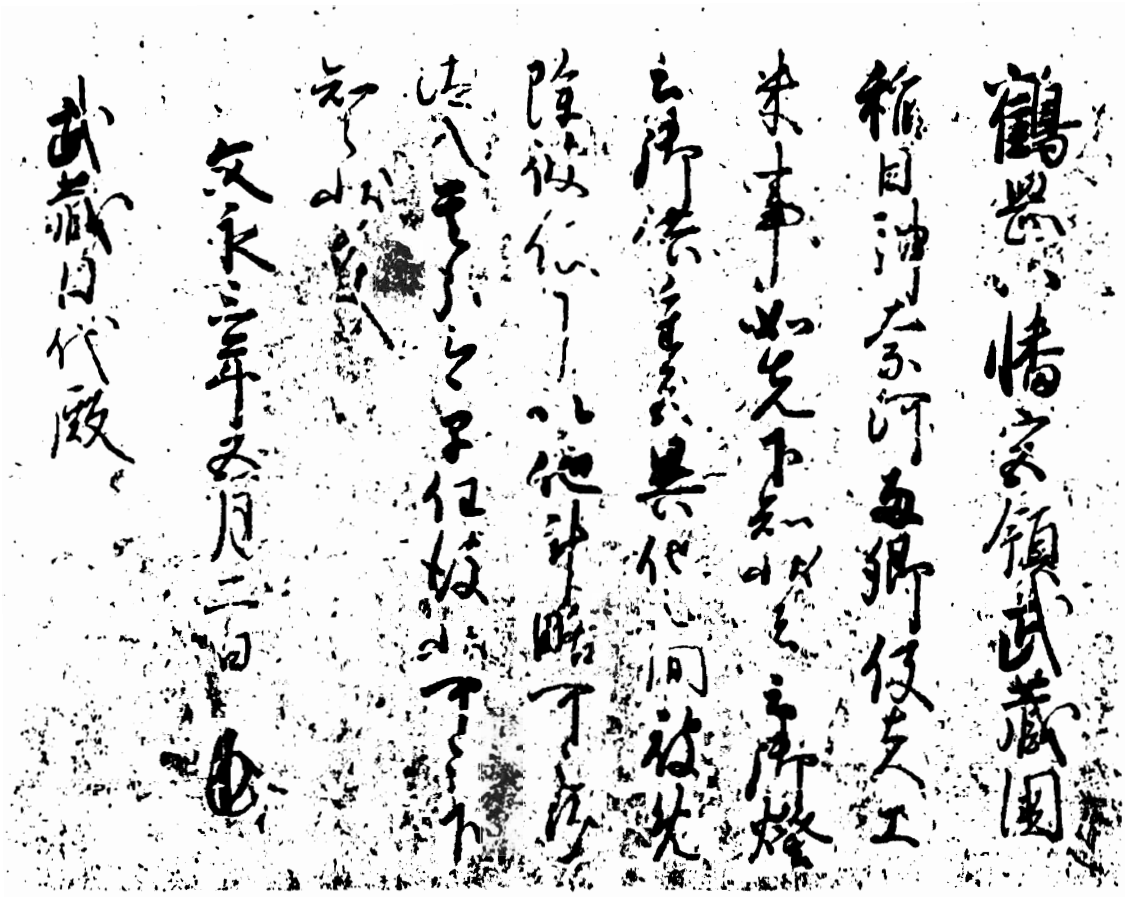
本会会誌「考古論叢神奈河」は、初代機関誌担当委員責任者であられた村田文夫さんがデザインされました。見返しに「神奈河」の文字の由来が書いてあり、神奈川という地名の初出文書として、鶴岡八幡宮の文書のうち北条時宗が 1266 年（文永 3 年）に武蔵目代殿あてに発給した下文を引用された旨が記されています（第 7 図）。縦書きを村田さんが横書きに直されたというお話を伺ったことがあります。非常にシンプルなデザインですが、号ごとに横線と第〇集という文字の色が変わっていく趣向が凝らされています。

また、本会連絡誌「考古かながわ」の題字は、初代連絡誌担当委員の責任者川口徳次朗さんの揮毫によります（第 8 図）。



誌名中の「神奈河」は，鶴岡八幡宮文書のうち，北条時宗が文永 3 年（1266）5 月 2 日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので，これが地名神奈川の初出文書である。

第6図『考古論叢神奈河』第1集　表紙・見返しの文



第7図　北条時宗が武蔵目代殿あてに発給した下し文（1980 鶴岡八幡宮古文書集鶴岡叢書第三輯）

「執権北条時宗（1251 ～ 84）は、文永三年（1266）5 月、八幡宮領である武州橘樹郡稲目郷（川崎市内）と同郡神奈河郷（横浜市神奈川区）に課せられた伊勢大神宮の役夫工米のことにつき、同国目代某をして、先例のとおり、その公事を免じ、ほかの方法でまかなうよう命じた文書。」（同書解説より）

神奈川県考古学会

考古かながわ　第1号

1991年9月7日

神奈川県考古学会

考古かながわ　第9号

1995年9月1日

第8図　連絡誌「考古かながわ」の題字（書　川口徳治朗氏）

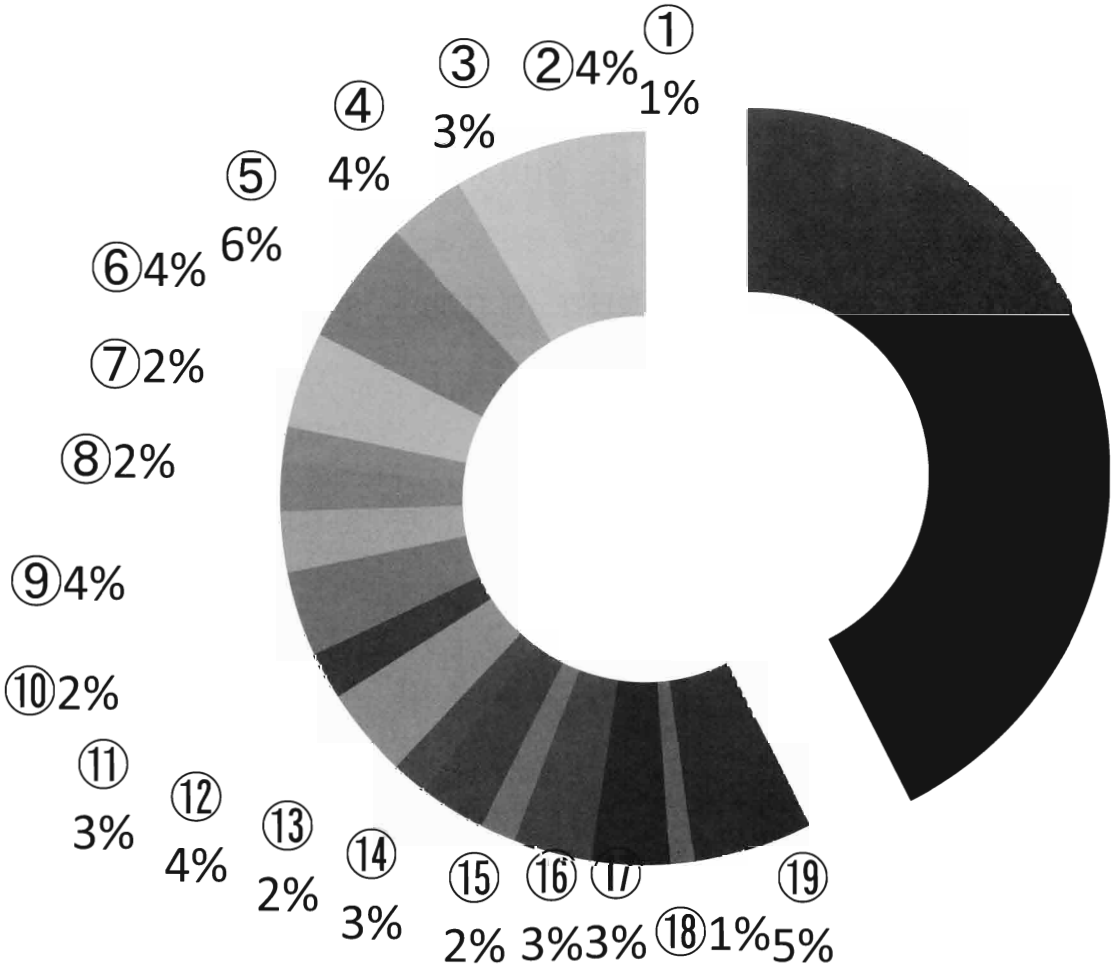
1995 年 9 月 1 日発刊第 9 号より、題字の背景に波をイメージした波線が加えられた。

２．会員構成

現在の会員数は 376 人ですが、その中で設立当時からの会員数を調べてみますと半数弱の 160 人、43 パーセントの方が 20 年会員です。先ほどのお話によりますと、有志で調査研究発表会を開催していた期間が 15 年間ありますから、実質的には 35 年会員だった方もいらっしゃることになります。全体では 10 年以上の会員が70 パーセントを占めています(第8図)会員の母体は、設立時から大きく変わらないことがわかりました。

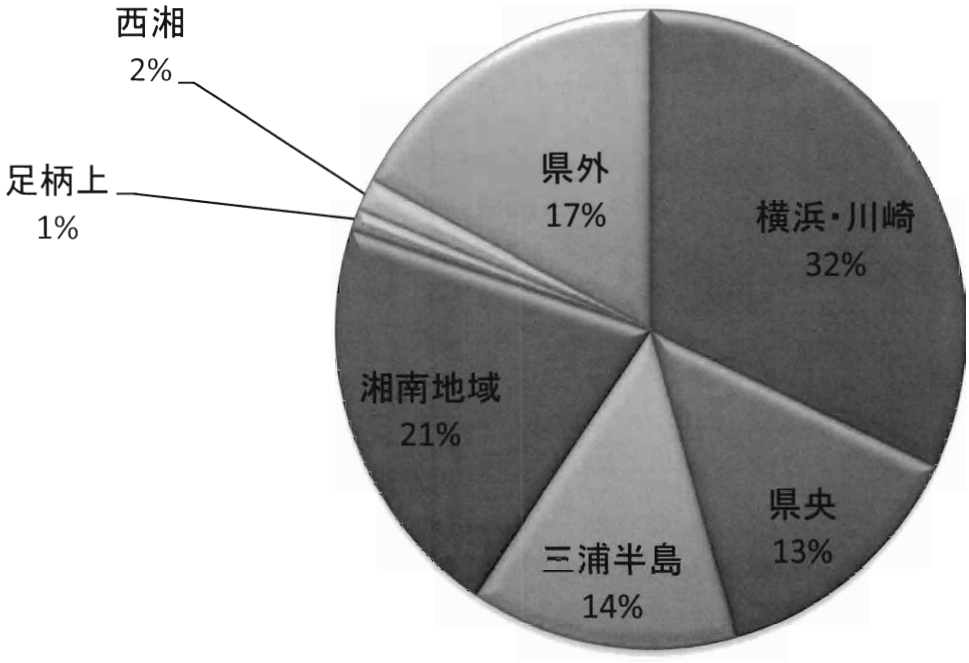
会員の皆さんの地域別の構成を見てみますと、おそらく人口に比例しているのではないかと思うデータがでました。横浜・川崎の方が一番多く 32%を占めています。少し詳しく見てみますと、各区に 3 ～ 10 名の会員がいて、会員数が 0 という区は一つもありません。次いで多いのは湘南地域の 21%、さらに三浦半島・県央地域の順となっており、本会の会員構成は全県を網羅していることが分かりました。県外の方も 17% と多く、北は岩手県から南は鳥取県まで 1 都 11 県にわたり、一番多いのは東京都で 42 人います（第 10 図)。

このように、半数近くが設立当初からの会員で、人口に比例するように全県を網羅しており、神奈川県の考古学研究を推し進める団体としてふさわしい構成となっています。また、県外の会員も関東を中心に 2 割弱おり、層の厚さを示しています。



第9図　継続年数に見る会員構成

2010 年 11 月現在　会員数 376 人



第 10 図　地域別に見た会員構成
2010 年 11 月現在　会員数 376 人

３．神奈川県考古学会の指針

①国際的な考古学研究に貢献を　―初代会長日野一郎（1991 ～ 1994 年度）

第 11 図　初代会長　日野　一郎氏
（2000 考古論叢神奈河第８集より）

初代会長の日野先生は、「 かつては外国の研究者より啓発された神奈川県の考古学だが、今後は国際的な考古学研究に貢献できるように」という研究の方向を示されました（日野 1992）。

外国の研究者として、まず日本に近代考古学をもたらしたエドワード・シルベスター・モースをあげています。江の島のモース博士を記念した碑がありますが、考古学ではなくダ―ウィンの進化論を実証するために来日し、1877 年に東洋で初めて臨海実験所を作ったことを記念し建てた碑です（第 13 図）。モースが腕足動物の生きた化石と言われているシャミセンガイを求めて江の島へ来たことはよく知られていますが、江の島では 500 個採集できたようです。この時モースには、この臨海実験所の仕事を早く終えて、来日早々車窓から発見した大森貝塚に行ってみたいという思いがあったようです。

私は、江の島の土産物屋で、ミドリジャミセンガイの標本を手に入れたことがあります（第 12 図）。福岡県柳川有明産と書いてありました。福岡では、今日でも食用にしているようです。シャーレの底には、モースが臨海実験所跡の解説文が入っていました。土産物屋さんが、文化を発信しているこの地域力の深さはすごいと感じました。

考古学の場では、モースの影響を受けた動物学者丘浅次郎が、進化論を紹介しただけでなく貝塚に目を向け、1887 年に久比里貝塚（横須賀市江戸坂貝塚）を発掘しています（中村 2003）。

もう一人日野先生が挙げられたのが、ハインリッヒ＝フォン＝シーボルトです。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの次男で小シーボルトと言われています。邦文『考古略説』を書いたことで有名ですが、1876 年『Stone　Age』を横浜で発表したということを日野先生が書かれていました（日野 1992）。

第 12 図　ミドリシャミセン
生きた化石といわれており、モースは江の島で 500 個採集した

第 13 図　江の島にあるモース記念碑（2003 中村若枝撮影）

②「本会かいかにあるべきか、何をなすべきか」衆知を集めて議論すべき
―第 2 代会長　岡本　勇（1995 ～ 1996 年度）

第 14 図　2代会長　岡本　勇氏
（1999 岡本勇先生追悼論文刊行会より）

設立総会終了後、「神奈川の考古学を築いた人たち」と題して、岡本勇先生の記念講演がありました。本会が与えられた課題に取り組んでいくために、今何を考えればよいのかということを得るための参考になればと思うと、話始められました。

この日、岡本先生が神奈川の考古学を築いた人として、八木奘三郎・沼田頼輔・山崎直方 N・G・マンロー・柴田常恵・榊原正職・石野瑛・山内清男・中山毎吉・酒詰仲男・赤星直忠・和島誠一各氏を取り上げられました。講演内容は、『考古論叢神奈河』第 1 集に掲載されています（岡本 1991）。

講演の始まる前、講堂脇の控室で岡本先生は「この本はぜひ読みなさい」と、桑原千代子さんの『わがマンロー伝―ある英人医師・アイヌ研究家の生涯』を見せてくださいました。（第）。主婦が 30 年間かけて調べ上げ、書いたものだと言われなすた。さっそく書店に注文したのですが、新宿書房という大手の出版社でなかったためか、数週間かかりやっと入手できた記憶があります。書によれば、医師の夫を持つ桑原さんは、マンロー未亡人チヨさんと軽井沢で出会ったことがきっかけで、マンローに関する唯一の伝記を出版することになったとあります。

「ここに、記録されねばならなかった筈の、一人の人間の偉大な生涯があった。しかし何の記憶もされないままに時は過ぎ去っていく。人間の記憶ほど頼りないものはない。長い年月の間には語りつがれるべきくさぐさも、茫々たる時の流れの中に風化埋没して、虚しくなり果ててしまうかもしれない。ドクター・ニール・ゴードン・マンロー博士の場合いも例外ではなく、正しい記録をされなかったものは、始めから無かったものと同じにされてしまう。」この書き出しの文を読んだ時、岡本先生がこの本を薦められた事由がわかった気がしました。

私は 2003 年、当時はまだ非公開でしたが、北海道平取町二風谷の旧マンロー邸である記念館を訪れた際、管理人でマンローとチヨ夫妻とも親交のあった貝沢さんに、トイピラの丘にあるマンローの墓に案内してい

ただいたことがありました。大雨の直後で道がすべりやすく登りきれるかわからないと言われ、また蜂のシーズンということで撃退用スプレー２本を両脇に携えたいでたちに圧倒されながら、共同墓地となっている丘につきました。桑原さんの本にある写真ではマンローとチヨ夫妻の比翼の十字架でしたが、墓地改修により桑原千代子さんも加わり３人が一つのお墓に眠っていました。話ながら墓石を磨いたり周りの草を取ったりする貝沢さんの姿に、保存会のみなさんの思いも感じました。

岡本先生の記念講演は、「先人の業績の上に私たちは仕事を一つ一つ積み上げていかなくてはなりません。１人よりも２人が、２人よりも３人の人の力がそれを可能にしていくのだと思うのです」という言葉で締めくくられました。

第 15 図　N・G・マンロー
（桑原 1983 より）

第 16 図　桑原千代子著
『わがマンロー伝』

第 17 図　二風谷のマンローの墓
トイピラの丘にチヨ・マンロー、桑原千代子さんとともに眠る（2003 中村若枝撮影）

1995 年、岡本勇先生は第２代会長に就任されました。「本会はいかにあるべきか、また何をなすべきか、衆知を集めて議論するべきだ」と言われました。役員会等で、大いに議論が重ねられたことは確かです。先生の言葉の中で、私の心に残っているのは、考古かながわ９号の巻頭の文章です（岡本 1995）。本会会長に就任された 1995 年は、敗戦から 50 年の節目に当たりました。

「敗戦を境に日本の考古学は 180 度の転換をとげた。その時期に考古学の道を志したぼくらは、神話に代わる科学的な魅力ある歴史叙述をしたいというのが共通の願望であった。」そして「これらは地道な地域研究を積み重ねることによって可能であると知らされた。」と説かれました。「これからもこの道を歩んでいきたい」と結ばれた言葉は、会長として示された指針でもありました。

③多岐にわたる会員の多様な要望に応えていこう―第３代会長　寺田兼方（1997 ～ 2006 年度）

第 18 図　第3代会長　寺田　兼方氏
（2012.5　県考古学会総会にて）

寺田兼方先生は、活動方向が専門家向けにいるのではないかと危惧されておられました。先生は長いこと地域の考古学の同好の方々をまとめるという活動をされていますので、とてもそのことに危惧を持たれたのではないかと思います。多岐にわたる会員の多様な要望に応えていこうと留意され、その姿勢を常に保たれていらっしゃいました。1997 年（平成９）に就任されてから 2007 年に退任されるまでの 10 年間の長きにわたり、本会を牽引されてきました。現在も本会顧問として、会全体を見守っていてくださいます。

④時代や地域を超えた議論の場に―第４代会長　岡本孝之（2007～　）

第 19 図　第4代会長　岡本　孝之氏
（県考古学会にて）

現会長は「時代や地域を超えた議論の場に」ということを謳われています。やはり議論の場ということが大事だと言われました。さらに「神奈川の特性をもっと明らかにしていきたい。そのためには、研究の成果を公開できる施設、神奈川に考古博物館を作ろう」という目標も掲げられました。博物館建設は以前から言われていまして基本的な思いは変わることなく、2007 年に開設された本会のホームページのリレーエッセイでも、「神奈川の考古博物館を創ろう」とよびかけられました。また、市民の考古学活動の場として本会の役割あるのではないかと、会の活動の展開について見解を示され、本会理念の具現化に向け、取り組んでおられます。

４．20 周年記念講演を受けて

20 周年記念講演の中で村田文夫氏がお話されたことは、今私たちの頭と心の中に、鮮明に刻まれています。調査の成果を早い機会に普及・啓発することは喫緊の課題であったという差し迫った状況は、1976 年（昭和 51）に、遺跡調査研究発表会を推進する母体として準備委員会か結成され、翌 1977（昭和 52）年　6 月 26 日に同会を主催者として「第１回神奈川県遺跡・調査研究発表会」が開かれたことからも、察せられます。当時、東京都遺跡調査発表会・埼玉県遺跡調査発表会といった発表会が、全国各地で開催されていましたので、当たり前のように、会に参加させていただいていました。このような多大なご尽力があって初めて開催されていたことは知るよしもありませんでした。本会立ち上げとその運営にあたられ先達の労をとられた諸氏に深謝申し上げます。

今後への期待として、本会の柱となる遺跡調査研究発表会については、独自性を持つ企画で、「わかりやすさ」が大事だと指南されました。これは講座などのついても言えることです。さらに、村田さんのご尽力で会から発刊されや「神奈川の遺跡めぐり」の続編の発刊をと期したいと結ばれました。今後ともよろしくお願いします。

また記念講演２の大村浩司氏の講演では、「遺跡の保護と活用」というなかで、特に私たちに関係してくるのは、活用という部分だと思います。学校教育・生涯学習など歴史資料としての活用、地域資源としての活用があるようですが、先ほどお話で、茅ケ崎にはたくさんの場所に、遺跡の記憶が残されていることがわかりましたが、これは本当にすごいことです。今景気が厳しいという経済状態の中で、なかなか思うようにいかないことが多い状況の中で、限られた予算で何をするかという時に大村さんのように思いを持って立ち向かっている方がいらっしゃるということは本当に力強いことです。先日、経済的な余裕が出てきた中国では、失われた文書を取り戻すために、今日本の古本屋を漁っているというニュースを見ましたが、経済が厳しい時だからこそ、私たちはもっとちゃんとしなければいけないのではないかと改めて思いました。現時点で遺跡を失ってしまうことだけは、避けていかなくてはならないと思います。「歴史に学び、歴史を生かす」遺跡を守ることはこの一連の活動を支える大前提なのですから。

５．議論と学びで集い、それを語る行動に広げる

アインシュタインは「空想は知識より重要である」という言葉を残しています。「知識には限界がある、想像力は世界を包み込む」という風に言っています。考古学というのは、モノを通してヒトを知る学問ではないかと思います。かつては文字のない時代のモノを対象にしていましたが、今は文字のある時代でも同様の手法で行うようになりました。ここでは、モノを通してモノから人間行動に結び付くイメージをどのように

立ち上げるか、ということが一番大事になってくると思います。
例えば底の尖った土器が出てきたら、「これどうやって作るのか、どうやって使ったのか」と、尖底土器について知識のない人でも持つ（本質的な）疑問を持ち、「こんな風に作ったのではないか」とイメージした場合、それを科学的に説明付けていくのが、考古学の中の手法だと私は考えます。重要なのは、どういうイメージを抱くかということです。アインシュタインの言う限界のある知識ではなく、世界を包み込む想像力が重要となります。それには、実際にモノを触ったり、現場に立ってみるといった体感が、想像力起動のきっかけをもたらすと考えられます。例えば先ほどの大村さんのお話にあった茅ケ崎の試みのように、現地に遺跡はなくてもそこに立つとかつての人が見た景観が残っている可能性があります。そこで感じたこと、そこでイメージしたこと、それをきっかけにいろいろな疑問を解き明かしていく手立てができるのではないかと思います。

第 20 図　エドヴァルド・ムンク 1909-1911『歴史』（1978『MUNCH』美術出版社）
オスロ大学アラウ講堂を取り囲む壁画 11 面のうちの 1 枚である。

ムンクの作品の中に「歴史」というタイトルの絵があります。大きな木の下で、毅然とした姿勢で岩に座っている老人が、横にいる孫のような年齢の子どもに何かを語りかけています。背景には彼の故郷、ノルウェーのフィヨルドが広がっています。この絵を見ると、ムンクがイメージした歴史は、「語り継ぐもの」だったのではないかということがわかります。

私たちはこの会で、今日もいろいろな話を聞き学びました。地中深く眠っていた痕跡から、初めて知る地域の姿もあったと思います。参加した私たちは、そこに生きた人たちの知恵を、たとえば家に帰って誰かに語るという行動を起こすことが、もう一つ大事な課題としてあるのではないかと思いました。ムンクの絵のように、孫など子どもたちに語れば、子どもたちは、自然に考古学を身近なものに感じるのではないでしょうか。研究成果とあいまって、こうした小さなことが地域力として積み重なった時、新しい文化を生み出す力に結びついていくのではないかと思います。地域を知り、そこに生きた人（遺跡）に学び、語りつぐ（遺跡を残し記録に残す）。

これからも会員の皆さんと一緒に考え議論を重ねながら、進めていきたいと思っています。お二人の講師の先生、本日の会の運営にあたられた役員の皆さま、そして参加された会員の皆さま、今日はありがとうございました。

（本稿は講演記録です。発表会の運営から記録集の発刊まで担当された栗田一生氏をはじめ、山田光洋・鯉渕義紀・橋口豊氏に深謝申し上げます。多大な時間をさいてテープから起こしていただいた原稿を元に、加筆訂正いたしました）。

参考文献

岡本　勇　1992「かながわの考古学をきずいた人たち」『考古論叢　神奈河』第1集　神奈川県考古学会
岡本　勇　1995「魅力ある歴史の叙述を！」『連絡誌　考古かながわ』第9号　神奈川県考古学会
岡本勇先生追悼論文集刊行会　1999『岡本勇　その人と学問』岡本孝之
神奈川県考古学会　2000『日野一郎先生追悼号』考古論叢神奈河第8集
桑原千代子　1983　『わがマンロー伝―ある英人医師・アイヌ研究家の生涯』新宿書房
日野一郎　1991「神奈川県考古学会発足にあたって」『連絡誌　考古かながわ』第1号　神奈川県考古学会
日野一郎　1992「発刊にあたって」『考古論叢　神奈河』第1集　神奈川県考古学会
寺田兼方　1997「会長になって」『考古かながわ』第13号　神奈川県考古学会
中村若枝　2003「かながわの貝塚調査研究史」『学史を語る～学史を踏まえた最新の研究～』平成14年度考古学講座　神奈川県考古学会

第II部

平成22年度考古学講座『神奈川県の考古学・最近の動向』の記録

趣旨説明

講座担当　井出　智之

今回の趣旨説明ということで、私の方からご案内させていただきます。今回、神奈川県考古学会は20周年ということで、ひとつ大きな節目を迎えました。この20年間神奈川県内の発掘調査の中でみていきますと、各地方自治体の職員の中に発掘調査ができる体制ということで、職員が少しずつ配置されて、多大な発掘調査についてきちっと成果があがってきた20年になるかと思います。ちょうど20年前、今回発表いただく方々の中で半数近い方が、その頃ようやく考古学の世界に足を踏み込んできた時代、というような時代経過がございます。そういった方々に20年経った今現在、どういう風な成果があがってきたのかということを振り返ってみたいな、という部分とですね、今から大体10年くらい前を境に少しずつその成果を発表する、出していくというだけではなくて、もう少し違った形の活用という方法で動いていく形となります。その部分につきましては、発表会の中で、基調講演ということで2本、神奈川県の考古学会の今までの動きと今後の課題ということで、お話をしていただきましたこととリンクして参ります。ここ数年特に、国の方からも活用に向けた事業というのは、非常に必要であるということと、今まで県内で調査をしてきました調査主体者の方からも徐々に徐々に新しい方向に活用の方向へと目が向いてきているのかな、と思います。そういったことを踏まえて、ここ20年各時代でどういう風に動いてきたのか、また、これから先、活用に向けても含めて、ごく最近の動向というのをお話をしていただきたい、という風にお願いをしてございます。特に個人的な部分で考えましても、数年前までは中世以降というのは、中世より新しい時代というのは、なかなか考古学の世界とは一線を画する部分があったという風に個人的な認識ではありますが、しております。ところが最近各地で見られますのは、やはり中世以降のものも考古学の対象としては必要だと、ということで近代・現代の部分にまで発掘調査が進んできている地域的な特色もあるかと思いますけれども、そういった部分にも徐々に徐々に目が向いてきた、その辺がここ数年大きく変わってきているのかなと、ということで近現代の部分についても、本日発表される方にお願いをしてございます。20周年という節目、大きく考古学が神奈川の中で動いてきた、変わっていくものもある。その中でどういうふうにここ数年考古学が神奈川県内の発掘事例が変わってきたのかということをお話をいただきたいということで今回の企画をさせていただいております。一日ちょっと長丁場になりますけれども、よろしくお願いしたいと思います。

旧石器時代の動向

諏訪間　順

皆さん、おはようございます。小田原城天守閣学芸員の諏訪間と申します。昨年、文化財課から観光課に異動になり、天守閣の学芸員として、特別展や天守閣の耐震改修や木造再建の可能性の検討などを担当しています。よろしくお願いします。

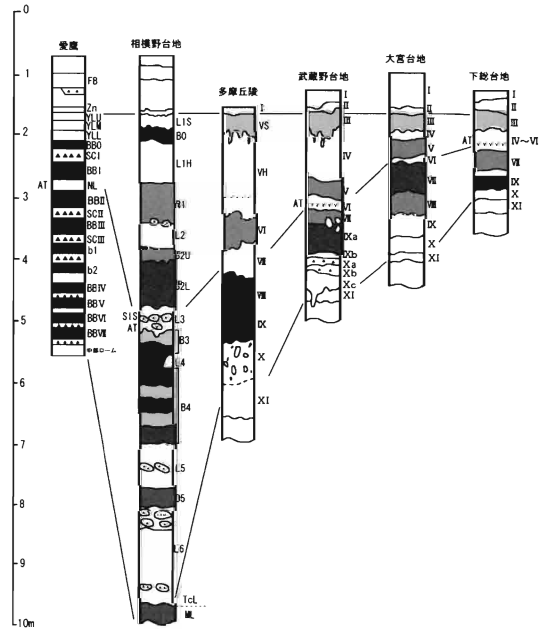
さて、私に与えられたテーマは、神奈川県における旧石器時代研究の動向ということで早速お話をしたいと思います。

神奈川県というと相模野台地が県中央にありますけれども、そこが非常に旧石器研究にとって良いフィールドだということであります。昨年3月には、「かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る」というシンポジウムがありました。本日の司会をされています鈴木次郎さんがご苦労されて立派な記録集が刊行されました。そちらも神奈川の旧石器研究の最新成果の一端が掲載されていますので、ご覧いただければと思います。

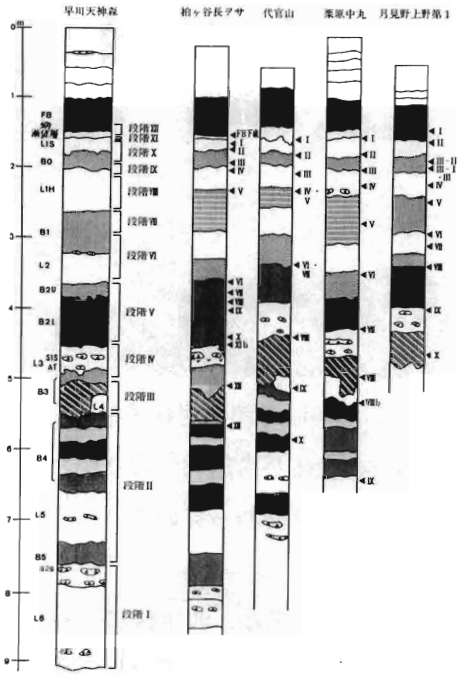
さて、本題に入ります。相模野台地の特徴、優位性は一言でいうと旧石器時代の石器群が包含する関東ローム層が厚く堆積しているという点です。それは富士山に近いことと偏西風のルート上に位置するということにあります。富士山から噴火した火山灰が偏西風に乗って相模原市や大和市などが位置する相模野台地に厚く堆積しております。

この富士山を給源とする火山灰は、およそ4万年前から1万5千年ぐらい前までに堆積した立川ローム層と呼ばれるもので、ほぼ後期旧石器時代に重なります。そして、地層が厚いということは、旧石器時代の時期を違えて生活した跡、石器や礫群、炭化物などが、層位的に時間的な順序を違えずに発見されることになります。それが神奈川県、相模野台地の大きな特徴の一つです。従いまして、石器群の移り変わり、変遷が、最も細分できる、よくわかる地域の一つだといわれています。特に後期旧石器時代の後半期については、日本でも一番細分ができている地域ですが、それよりも古い、後期旧石器時代の前半期は地層が厚いことが災いしてか、発掘事例が後半期ほど多くありません。愛鷹・箱根山麓や武蔵野台地など近隣の地域の成果と繋ぎ合わせることによって、南関東・東海地方の旧石器時代石器群の編年が非常に精緻なものになっているといえます。それは世界的にみても、層位的な出土例に裏付けられた精緻な編年が組上げられているという点で特筆されるものといえます。

これは関東・東海地方の立川ロームの層序で、左側から愛鷹山麓、相模野台地、武蔵野台地、下総台地と並べたものです。偏西風の軸上にある相模野台地は、立川ローム層が6mから７mと非常に厚いということがわかります。それは東に行くに従って、千葉県の下総台地では1.5mとか2mとか、4分の１位に薄くなります。これらの各台地の層位対比はＡＴ火山灰や黒色帯などによって層位対比が可能となっています。ＡＴは、最近では3万年とかいわれてい



第１図　東海から関東地方のローム層対比



第2図　相模野の層位的出土例

る非常に古い年代が与えられていますが、このＡＴ火山灰以前と以後で後期旧石器時代の前半／後半を区分する指標にもなっています。

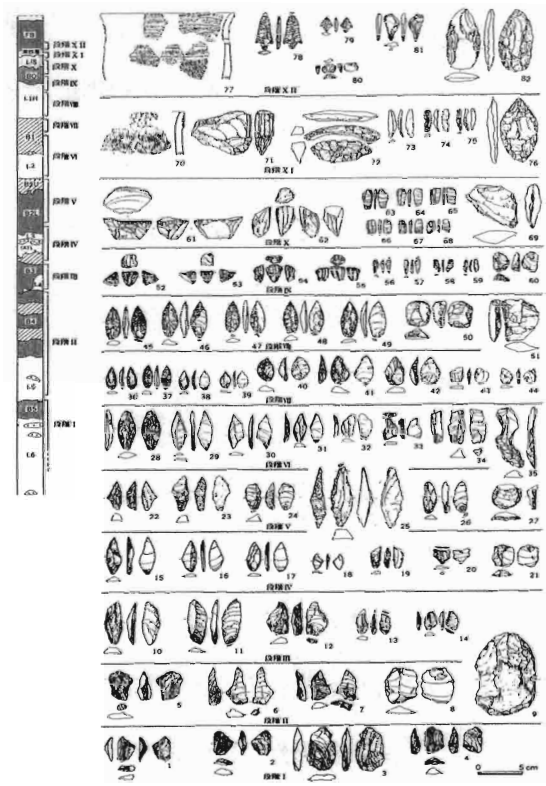
神奈川県内では、1970年代の後半頃から80年代前半にかけて大規模な開発に伴う大規模な発掘調査が多く行われるようになり、寺尾遺跡、月見野遺跡群上野遺跡、栗原中丸遺跡、柏ケ谷長ヲサ遺跡などの良好な遺跡の調査が相次ぎました。相模野台地の旧石器編年は、鈴木次郎さん達が、相模野5期編年というのを1970年代の半ばに確立したのですが、こうした良好な石器群の検出が増えたことにより、これまでの編年の細分が可能になりました。それが、私が1988年に『神奈川考古』24号に発表した、「相模野台地における石器群の変遷について～層位的出土例による石器群の段階的把握～」という論文です。それはタイトルのとおり、相模野の最大の強みである層位的出土により、相模野の旧石器から縄文時代草創期、石鏃出現までの石器群を12の段階に再構築・細分をしたわけです。

写真1　柏ヶ谷長ヲサ遺跡の層位的出土例

具体的には、この柱状図にあるように、一つの遺跡で、十枚とか十数枚の時期を違えた石器が出るということです。ただ残念ながら、相模野の場合は非常に厚いということで、発掘調査は開発に伴って行われるものですので、限られた時間、限られた予算の中で、なかなか古い層まで到達できない。残念ながらそういったこともありまして、ＡＴ降灰以前の後期旧石器時代前半期の資料については、他の地域と比べると少ないということがあります。発掘をしていってどんどん上からいっぱい出てきてしまうと、なかなか期間も予算も無くなって、全部最後まで掘りきれてないってこともあるかもしれませんし、開発深度がそこまで達しないということなど、色々な条件が重なっているということです。

具体的に層位的な出土の具体的でわかりやすい例としては柏ケ谷長ヲサ遺跡の写真を示します。これは海老名の相鉄線の柏台駅前の区画整理で、私が学生の時の1981年から82年に掘ったものですが、石器とともにたくさんの礫が出土します。

写真1では、第Ⅸ文化層という礫群とその上の第Ⅵ文化層の礫群との層位差が50㎝くらいあります。そういった遺

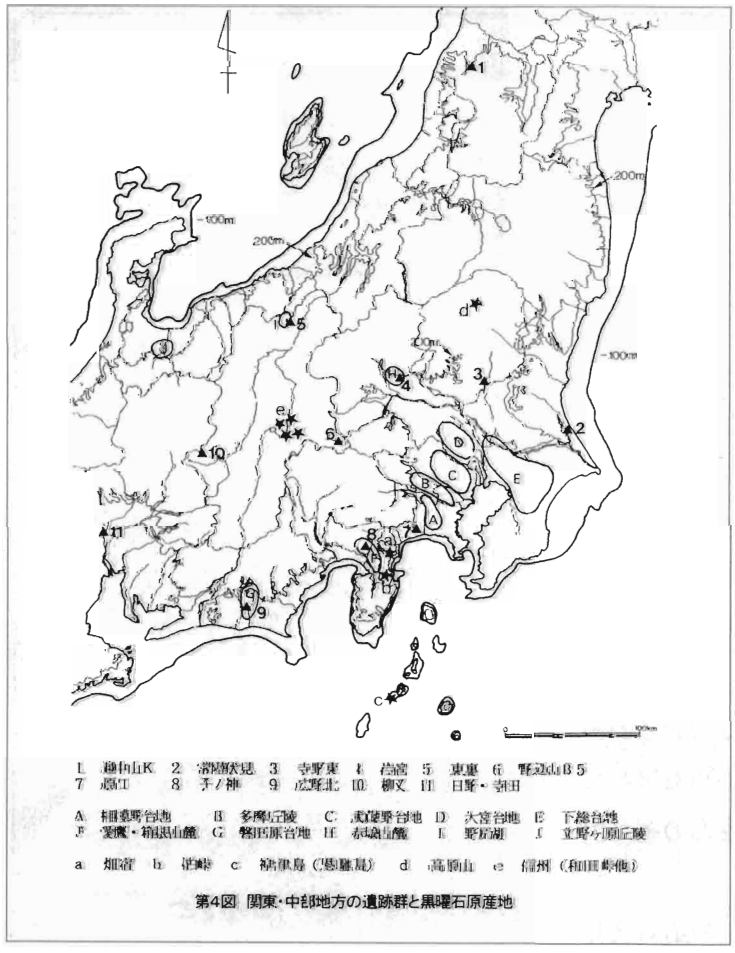


第3図　相模野の石器群の変遷

跡ごとの出土層位の違いを、繰り返して、比較することによって、細かい石器の移り変わりがわかるようになるのです。そうやって、相模野台地の石器群がおおむね12の段階に区分されるということがわかってきたということです。そして、ナイフ形石器とか槍先形尖頭器、あるいは細石刃といった、新しく出現する器種の登場によって、段階を区分していくという考え方です。新しい器種が出現するということは、その器種が出現するだけでなくて、それを作り出す剥片剥離技術とか、石器を作る調整加工技術とかが連動して変わっていくということです。それは、石器群の全体が構造的に移り変わっていくことになります。そして、それにあわせて、石器の技術だけでなく石材も移り変わっていくというようなこともわかってきております。

写真２ 田名向原遺跡住居状遺構

それが、1980年代あるいは90年代にかけてですけども、その後半になってきますと、90年代に入ってきますと、今までの旧石器の編年研究とか型式研究とか、石器の製作技術研究とそういったものから、さらに遺構とか遺跡群に関係する調査成果がたくさん出てきます。綾瀬市の用田鳥居前遺跡では大形の炭化材が出たり、丹沢山中の宮ケ瀬遺跡群では、サザランケ遺跡や中原遺跡で石囲い炉の跡が出たり、皆さんもご存知のように相模原市の田名向原遺跡では旧石器時代の住居じゃないかといわれるような遺構が出てきたわけです。そして、綾瀬市吉岡遺跡と藤沢市用田鳥居前遺跡では、2㎞ぐらい離れたところで石器が接合するということがわかりました。それは当時の人々が移動生活のなかで、それぞれの場所で石器を作って残していったことが石器の接合という形で、具体的な形で示されものです。こうした最近の発掘調査によって、旧石器時代の人々の移動生活といいますか、暮らしぶりがある程度わかるようになってきました。こうした新しい展開については、シンポジウム「かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る」の記録集として成果として取りまとめられています。本日、はじめて世に出された本ですので、是非、皆さんお求めいただければと思います。



第４図 関東・中部地方の遺跡群と石材産地

これは田名向原遺跡ですけれども、相模川のすぐ脇に、たくさんの石器とか礫が円形にまとまって発見されました。石器だけでなくて、周辺に礫があったり、炉跡があったり、柱の穴があったりそういったことがあります。これが住居状遺構といわれるものです。日本列島において、それまでいく

つか旧石器時代の住居でないかといわれるものがあったのですけれども、いずれも住居と認定するには何らかの問題がありましたが、田名向原遺跡については、炉や柱穴などの住居としての要件を満たすことから、「住居で良いのではないか」という意見が大勢を占め、国の指定史跡になりました。国の指定史跡になった現在では、史跡公園として整備されまして、隣接地に旧石器ハテナ館という展示施設と学習施設を兼ねたガイダンス施設も設置されています。全国に旧石器時代の史跡はいくつもありますけれども、史跡公園として展示・学習施設をも整備されている史跡は、田名向原遺跡と北海道の美利河遺跡くらいしかありません。

そうこうしているうちに我々旧石器時代を研究するものにとって大変な出来事が起こります。皆さんもご承知の、2000年の11月5日に発覚した「前中期旧石器捏造事件」です。ちょうど90年代は、全国でたくさんの発掘によって新発見が続き、考古学ブームのような時代だったと思います。その中でも、前期旧石器ブームといいますか、原人ブームといいますか、すごい状況になっていました。それが11月5日の毎日新聞のスクープによってねつ造されたということが世に知らされることになりまして、連日のようにニュースで取り上げられました。我々のように旧石器時代を研究するものにとっても大変なショックであったことです。その後、旧石器の研究者を中心にして、日本考古学協会は検証委員会をつくりまして、色んな検証を始めたわけです。私も参加しましたが、いくつかの遺跡の検証発掘をして捏造の証拠というのが次々と明らかにされたわけです。それで、捏造発覚から3年後の2003年にこれらをまとめた報告書を作りました。その結果、捏造というのは1970年代当初から行われていたと。今までに捏造者が係わった資料というのは全て駄目だということで、残念ながら日本における3万～4万年を超える前期旧石器あるいは中期旧石器といわれるものというのは、確実なものがなくなってしまった、ということになったわけです。そういったことを受けまして、日本列島の中で、各地域で色々な研究会があったり、地域の研究をしているグループがあったりしましたけれども、そういった人たちと連携を取りながら、あるいは考古学者だけでなくて自然科学の分野の研究者とも連携を取りながら、ということもありまして、日本旧石器学会というものを設立したわけです。旧石器研究者による双方の連携とか学問的倫理の確立を目指したものです。また、旧石器時代というのは日本列島だけで完結しない、評価することができない、少なくともアジア、ユーラシアとそういった広い範囲の中での大きな人の動きというのを研究しなければいけない、ということもありまして、アジア旧石器協会というロシア、中国、韓国、日本と4カ国で、そういった協会が設立されました。現在、各国、持ち回りで国際学会を開いております。最後にお話しますけれども、今年が第4回目の大会として今年の6月に日本で開催されるということになります。

これで捏造事件の話は終わりにし、最新の研究動向についてお話をします。1990年代から遺跡・遺構の研究に続いて石器石材の研究が大きく進展したということです。一番大きなことは、黒曜石の産地分析が大きく展開してきました。それまでの黒曜石の分析は、石器を砕いて分析するという方法から、蛍光X線を用い、微量元素の組成の違いから原産地を判別していく方法が開発されるとともに、出土した全ての黒曜石製石器を全点分析するという画期的な研究が始まったことです。黒曜石の分析は一つの遺跡で100点の黒曜石が出たら、今までは経費の問題もあり1点とか2点しか選んでやらなかったのですけれど、例えば出土した1000点の黒曜石を全点分析することによって、一つの石器群の中で信州の黒曜石がどのくらいあって、箱根の黒曜石がどのくらいあってというのがわかるようになってきているのです。それによって石器群を残した集団の行動領域をはじめとする具体的な人とモノの関係が把握することにつながり、行動論的な研究などが大きく進展したということです。また、黒曜石以外の産地、ガラス質黒色安山岩とか硬質細粒凝灰岩とか、チャートとか、神奈川県あるいは関東地方の主要な石材の原産地の追求も進みまして、少なくとも相模野台地でも

ほとんどの石材の供給される原産地というのが明らかになっていったわけです。そういったところから相模野の石材、当時の人々が狩猟しながら移動生活を送る中で一番大切になるのが石器の石材なのですけれど、例えば神奈川県の大和市の月見野遺跡にいた人々が、そこの遺跡からどういった石材があるのかということをみることによって、大体どこから石をもってきているかというのがわかるわけですね。そうしますと、台地の礫層や河床といった遺跡近傍からその上流の10㎞ぐらい範囲に獲得できる場所がある、時間にすれば数時間かければ行けるようなものとして丹沢産の硬質細粒凝灰岩、あるいは多摩川産のチャート、そういったものがあるわけです。次に、30㎞から70 ～ 80㎞ぐらいの範囲にある箱根の畑宿の黒曜石あるいは伊豆天城の柏峠の黒曜石、箱根の安山岩など少なくても日帰りできないようなもの、あとは遠隔地の石材としまして、数日以上、石材を取りにいくためにわざわざ旅行に行くか、それとも集団そのものが移動しながら、石材採取を行ったと考えられるものに、信州の和田峠などの黒曜石、栃木県の高原山の黒曜石、あるいは海を渡って行かなければいけない神津島の黒曜石などがあります。また、東北地方の山形県あたりからは非常に質のよい硬質頁岩が相模野にも搬入されていることが明らかになってきています。

それを地図上に落としますと、相模野台地には、凝灰岩とかチャートあるいは安山岩というのが相模野台地の周囲にあって、さらに、箱根の畑宿、天城の柏峠などの近在地的な黒曜石産地があり、さらに遠隔地、例えば相模野台地から信州和田峠まで150㎞ぐらいありますけれども、信州の黒曜石、あるいは高原山、神津島､そういった相模野周辺の石材によって遺跡の石器がつくられているということがわかってきた訳です。そういったことを、それぞれの遺跡ごと、遺跡の文化層といいますか、一つの時期の石器群ごとに組成比をきちんと出していきますと、ちょっと分かりにくい図で申し訳ないんですけれど、３万数千年前、吉岡遺跡という一番古い時期から縄文時代草創期、1万5千年くらい前の土器と旧石器時代的な細石器とか尖頭器が出る時期までの12の段階をこうやって区分していきますと、黒いのが黒曜石、青いのがガラス質黒色安山岩、サヌカイトみたいな、割ると中が真っ黒なカンカンとガラス質の非常に質の良いもの、水色がチャート。あとはその他の石材です。この図を見ると、黒曜石が多い時期がだいたい3つか4つぐらいあり、反対に少ない時期もやはりある、ということです。そういったことで、石材と石器の内容とか、非常に密接な関係があるということが、石材研究の進展のおかげで分かってきたということです。

今度は黒曜石産地の変遷、その中での黒曜石がどこの産地かということをみていきますと、この黒いのが箱根の畑宿、青いのが天城の柏峠です。箱根と柏峠とは非常に近いといいますか、どちらかというと神奈川からみたらローカル、常にアクセスできる関係にあったところですので、少なくともこう見ると、柏ケ谷長ヲサ遺跡のＢ2層の時期、およそ3万年から2万4･5千年ぐらいまでの間というのは、ほとんど近いところから持ってきていることがわかります。反対に遠くの目安は信州なのですけれども、そうしますと2万3千年くらいから一気に信州の黒曜石が増えるということです。また、もう少し後になって尖頭器とかナイフ形石器の終わりぐらいになると、天城のやつが増えるとか、そういった移り変わりがわかるということです。あと注目されるのが、海を渡って採らなければいけない神津島ですけれども、これを見ると薄い水色が神津島ですけれども、神奈川、相模野台地ではＢ0期の細石刃の時期、2万年前後ぐらいの時期、2万年から1万5千年ぐらいまでの時期に非常にこう入ってくるわけです。そういったことから、色んなことが分かるようになってきたわけです。また、石材の研究とともに、今までは放射性炭素Ｃ14というのは、例えばこぶし大くらいの大きさの炭がないと年代が測れなかったのですけれども、1990年代の後半ぐらいから米粒くらいの小さな炭でも測れるようになりまして、それで反対にたくさんのデータを取るようになりました。そういったところから、地球温暖化の変遷といいますか、寒暖の差と、実際に出てくる石器の年代というのがある程度対応関

係にあって、それぞれの移り変わりの説明がある程度合理的にでるような時期であるということです。相模野台地の場合は、こういった周辺の石材関係もありますので、特に寒い時期ですね、2万5千年前後ぐらいの地球はもちろん寒かった。最終氷期の寒冷期の中でも一番寒かった頃については、例えば北関東とかにいた、あるいは中部地方にいた遺跡が非常に減ってくる。ある程度南関東に人が集中した、そういった時期もあったのではないかということが分かってきたわけです。

最近の議論としましては、捏造発覚以後、日本列島の最古の石器文化というのは何なのか、といったことです。捏造事件によって、古いといわれたものはほぼ全滅しましたので、今は捏造に関係ない資料の検討、あるいは新しい資料の発掘が続いていますけれども、いまだに確実な、後期旧石器時代を遡るような古いものがなかなかはっきりとしていないということです。最近では、日本列島最古の石器群といわれるものに長崎県平戸市の入口遺跡や山陰の方、出雲の方で見つかり新聞紙上賑わせた砂原遺跡などがありますが、私としては石器であるのか大いに疑問があります。礫が流れてきて石と石がぶつかって割れた偽石器といった言い方をしますけれども、そういった類のものでないかなと考えています。反対に相模野最古の遺跡としては、綾瀬市にある吉岡遺跡、B5層ですね、3万5千年を超え4万年に近い年代の与えられる石器です。これは完全に人の手が加わってちゃんと割っている。ただ、加工がきちんとされていないものも多くて、なかなか難しいですけども、確実に3万5千年を超えるぐらいから遺跡は見つかりだしています。

今、最古の石器文化を巡る意見としては、後期旧石器時代よりも古い石器群というのは当然あるはずだと。4万年より古い、5万年10万年とかそういったものもあるんだよということで、積極的に評価する人もいます。ですから、砂原遺跡とか入口遺跡とかそういったものの存在を肯定的に捉える考え方です。あるいは、私なんかは、後期旧石器時代の開始期、X層段階あるいは相模野B5層という、立川ローム最下底の石器群を日本列島の最古の石器文化として評価して、それ以外のものについては懐疑的あるいは慎重に評価するという立場、そういったものとが対立というわけではないですが、2つの意見があというわけですね。

最近私の方で言っているのは、後期旧石器を遡る、中期とか前期とかいわれる古いものを認定する場合というのは、次の4つの条件を全てクリアしないと認めてはいけないんじゃないかと、いうことですね。一つは、石器に残された明確な加工。誰が見ても人工的な加工がありますよ、ということ。あと遺跡そのものが偽石器の含まれる可能性のない場所。例えば礫層のなかに礫がいっぱいある中にあれば、石と石があたって石器のようにみえてしまうことは当然あります。今までも長い間、日本だけでなく世界中で偽石器、エオリスの問題が議論されてきましたが、やはり捏造でいろんな問題があったわけですから、これから古いものを認める場合というものは、偽石器の可能性のない場所での遺跡立地が重要になると、いうことですね。

あと、石器そのものはよくても層位がきちんとしていなければいけない。一番いいのは、例えば10万年の火山灰と5万年の火山灰の間にきちんとパックされている。であれば、10万年よりも新しくて5万年よりも古いということが言えるわけですから、そういった確実な年代値がわかるような火山灰に覆われている、パックされている、そういった条件を。

後は、1点だけじゃだめですね。石器が複数出て、できれば石器と石器がくっつく、そこで製作をしている痕跡があれば、これは100パーセント問題ない、ということになります。

で、この4つの条件を全てクリアしないと、日本列島において4万年を超える古い資料があるとかないとか議論ができないんじゃないか、という風に私は思っています。そういう立場でいるんですね。

日本列島で一番古い3万数千年前、3万5千年を超えるようなものですけども、静岡県愛鷹山麓、富士山の裾野に広がる愛鷹山麓では、最近たくさんの石器群が見つかっていまして、およそ3万5千年を超えるぐらい

かと思いますけども、信州の黒曜石を使っている見事な台形様石器というものが発見されています。下にあるのが富士川水系のホルンフェルスというものなのですけれども、非常に石器自体が風化して古く見えるんですね。こういったものを元にして古いんじゃないか古いんじゃないかと言っていたんですけれども、当時の旧石器時代の日本列島にいた人々というのは色んな石材を使うことができて、色んな技術を持っている、そういう風に考えてもいいんじゃないかなという風に思うわけです。

こういった議論を、何度も何度も色々な形で繰り返しますけども、この3月21日に、研究集会として、人が住み始めた頃の関東地方ということで、相模原市立博物館で開催されます。3月21日ですので、鈴木次郎さんや東京都の比田井民子さんとかが中心になってやりますので、是非おいでいただければと思います。

そういった古い石器の議論が主要なところですけれども、もともと日本列島にホモサピエンスがいつごろ来たのか、そういったホモサピエンスの拡散という大きな地球的な世界史的な人類史の中に日本列島を位置づけなければいけない、という議論がさかんに検討されています。特にホモサピエンスというものは、今までのネアンデールタールとか旧人段階と比べて、非常に知恵が発達しています。その、ホモ・サピエンスは我々と同じ現代人な訳ですから、例えば舟を使って海上渡航するとか、精神的な社会・世界というものを作り出して、象徴的なビーナスとかビーズとかで飾るとか、色々な新しいものが出でくるわけですけれども、そういったものを現代人的行動、という風にいいます。そういった痕跡をつなぎ合わせていって、いつ頃からそれぞれの地域でホモサピエンスに変わっていったのかということを、今盛んに議論しております。そういったシンポジウムを、先程も言いました日本旧石器学会あるいはアジア旧石器協会、あと国立科学博物館などが合同でシンポジウムをやります。それがシンポジウム「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現」と題しまして、6月の29日から30日まで非常に長丁場で、特に後半のシンポジウムは平日なのですけれども、アジア諸国を中心にして大勢のヨーローッパ、アメリカからも来ますので、おそらく7・80人の外国の研究者も来るのではないかと言われています。日本列島の議論、神奈川から離れてしまいますけど、旧石器時代の最初のころに石器の集中地点を環状に回る、神奈川県では少ないのですけど、津久井城のところで出ましたけど、馬込地区で出た環状集落・環状ブロックというのは世界的にも全然分からない、見つかっていないわけです。あるいは神津島の黒曜石、3万年を超えるような時期に海を渡った痕跡というのが確実なものですので、それについても、驚きの事実なわけです。

あるいは、神奈川も、横須賀の長井台地にあります打木原遺跡というところで、深さ2メートルぐらいあるような大きな陥し穴が数メートル置きに並んでつくられている。それは一人二人で作るようなものでなくて、集団が力を合わせて作った訳ですし、非常に現代人的な行動の象徴的なものと思いますけれど、そういったものは欧米の研究者に話をしても信じてもらえないということがずっと続いていまして、その辺を中心に日本列島の研究の成果という、驚きの事実を世界に発信していこうというのがシンポジウムの主な部分になるわけです。

そういうことで、最初からの話からずれてしまいましたけれども、神奈川の旧石器研究の最近の動向と、それが日本列島の中での研究の流れ、今は研究が世界的な展開を見せている、ということをお話しました。そうした世界的な議論、アジア的な議論の中で、常に神奈川の旧石器時代研究というのが、非常に重要視される注目される、といった形になっていくわけです。最近は、なかなか旧石器時代の調査が少なくなってきましたけれども、今まであった資料を含めて、さらに色々な多角的な方面から問題を掘り起こして研究を進めていくと、これからもやっていかなければならない私たちの課題という風に思っています。

以上で発表を終わりたいと思います。どうもご清聴ありがとうございます。

港北N.T.地域の整理作業20年

石井　寛

おはようございます。このお話いただいた時に、ちょうど論文を書いている最中で、ちょっと時間がありませんでした。神奈川県の縄文時代に関するこれまでの研究を、短い時間の中できちんと整理して、評価することは、大きな間違いなどありましたら失礼にあたります。この20年間というのは、港北ニュータウンの地域の遺跡群の調査が終了しまして、本格的に報告書の作成作業に着手された時期に対応します。その20年のなかで、港北ニュータウン地域の縄文時代がどこまで分かってきたかというような話に代えさせていただきたいと思います。ただ、縄文時代全般をこの30分の中でお話するというのは、とても不可能です。中・後期に限らせていただければと思います。

港北ニュータウン地域は以前から、縄文時代前期の貝塚群の存在で著名な場所でした。縄文海進時には旧海岸線近くに貝塚を伴う良好な集落跡がたくさんあったのですが、海退と共に、それらも消失していく過程にあります。それに伴って、小規模集落址が主体となってゆくのですが、そうした時期にも、宮の原貝塚とか、源東院貝塚が残されています。十三菩提式とか五領ヶ台式といった時期の貝塚ですが、この二つの貝塚の場合、前期の海進期には貝層は形成されていません。と言うより、そうした時期の集落でさえなかったのです。ですから、海退を境に大きく状況が変化していることが分かります。

そのあと、五領ヶ台式期では地域の中央部を中心に、小規模な集落址がたくさん発見されているのですけれども、勝坂式の時期になると、それらがなくなってしまいます。代わって、地域の西側に集落が集中して出現してきます。一方で、地域の東側では、集落址は群集はしないで、１㎞から1.5㎞くらいの間隔で南北に並ぶ分布状態が見られるようになる。このような集落分布がどのようにして形成されていったか、その過程をとらえる必要があるということです。

第１図の勝坂式期の集落址分布図では、勝坂式をⅠからⅤの段階に分けていますが、★印で示した勝坂Ⅰという時期の集落址は、それ以後への連絡が非常に悪いんです。集落地の継続性という面、途切れ目なく継続しているかはひとまずおくとして、繰り返してでも使用される頻度、そういった意味を含めて集落地の継続性が見られ始めるようになるのは勝坂Ⅱの段階です。下向き▼マークの段階ですね。泉日向遺跡・三の丸遺跡・高山遺跡・前高山遺跡・荏田大塚遺跡などが、西側の狭い範囲内で集中していますが、いくつかの遺跡で上向きの▲印へと集落地としての利用が続いている。その一方で、地域の東側では、大熊仲町遺跡で▲印が見られますが、住居跡1軒だけなんです。地域の東側では、▲印の段階では良好な集落地は形成されていないんですね。

つまり、地域の西側に集中的に集落が現れてきて、以後、集落の集中域として続いてゆく、その始まりが勝坂式のⅡ段階であった。東側では、後の時期へと続く集落の形成は、それより遅れて開始されている。そこで注意していただきたいのが、集落跡の分布状態なんです。集落分布というのは、机上ではひとつひとつの集落跡を別々の集団と考えて、だいたい同じような感覚で集落が分布していると想像してしまいます。しかし、1960年代から70年代の初期にかけて、日本全国で遺跡地図がつくられていきました。これは高度経済成長に伴って、遺跡の破壊が急速に進展した状況に対応した動きであった訳ですけれど、その中で遺跡の分布状態が分かってきます。遺跡の分布というのは､等間隔ではないようだということが分かってくる訳です。そうした遺跡の分布状態の実態というものを、実際の発掘調査によって明らかにしようという、そうした遺

跡群に対する調査の機会が、港北ニュータウン地域で与えられた訳です。

先ほども触れました通り、勝坂の古い段階では西側の地区に集落が集中していた。東側の地区で後の時期に続いていく集落が現れるのは、それより遅れての動きなんですね。その東側の拠点とされたのが大熊仲町遺跡で、●印は大きく表現されています。Ⅳ期のことですが、大熊仲町遺跡に続いて北川貝塚や、早渕川を渡った道中坂上遺跡に集落地がつくられて、最後に神隠丸山遺跡が開始される。それらが狭い間隔で南北に並んでいる訳です。こうした集落地群形成の動きをみていると、ひとつひとつの集落地は別々の集落を表しているのではなくて、この地域に集合した集団が、地域の活用法を考慮しながら、集落地を決めていったのではないかと受け取れるように思える。全体としてうまく地域を活用するなかで、地域的にまとまりのある集団､地域を基盤としたグループが形成されて､それらが全体として地域を活用してゆくという仕組みがあったように受け取ることができるように思えるんですね。

そうした問題意識をもって、続いて第２図の、中期後半の加曽利Ｅ式の時期をみてみます。ほぼ勝坂式の時期の集落址分布が引き継がれているんですが、細かくみると興味深い面が観察されるところがあります。大熊仲町遺跡の西側に、観音山遺跡と源東院貝塚がありますが、それぞれが谷に挟まれた舌状の台地にある。決して大規模な集落になることはないと思われますが、それなりの量の遺物を出したり、住居址を検出したりしています。つまり、比較的狭い舌状台地を管理するような、面積に見合うような規模の住居単位が割り当てられている可能性がある。しかし、その集団は、決してこの狭い舌状台地に閉じ込められている訳ではなくで、環境の悪化などがあれば、この台地から別の場所へ移住することは、ごく日常的にあったと考えて良いでしょう。つまり、地域全体の中の、ある区域の活用にあたっての、地域集団の一部の割り当てと考えれば良い。割り当てられた住居単位は、この場所に閉じ込められている訳でもないし、舌状台地を独占している訳でもない。あくまでも全体の中の、管理のあり方と考える。

まとめますと、地域内での集落の分布は、勝坂Ⅱ式の頃から一連の開発の進行と共に形成されていったと考えることができる。まずは西側の狭いエリアに集落が集中する形でこの地域の開発が開始され、勝坂Ⅳ式期になって東側でも本格的な開発に着手された。その後､東西に細長い台地のそれぞれに集落地を配置して、集落地相互は近距離で連絡性を高くするような工夫がなされた。つまり、ひとつひとつの集落地は個別に独立した別々の集団というのではなく、地域に集合した集団全体を対象とした、地域集団としての見方をしていかなければいけないということです。

では、それぞれの集落地は常に安定した生活が保たれていたのでしょうか。第３図にあげた北川貝塚は、土器型式の上では連続性があるんですが、それぞれの時期の内容にはかなりの変動がみられるのです。それが記号の大きさの変化に現れていますが、実際にはそうした記号の大きさ以上の変動があるらしい。単に、各時期の住居址が出ているというだけでは、安定した経営が続けられたとはなしにくい面がある訳です。

ひとつ参考にしたい集落址を提示します。長野県塩尻市の俎原集落ですが、この遺跡は五領ヶ台式の頃から連綿と住居址が出ているんですが、ここでは曽利式の時期だけを取り上げます。曽利というのは、こちらの加曽利Ｅ式とほぼ同じ時期にあたります。五領ヶ台式の頃から、時期ごとの住居跡址の数や分布状態は、かなり安定性に欠けているんですが、ともかく最も多くの住居址が残された曽利のⅡ式とⅢ式という時期に限って検討してみます（第４図)。ふたつの点に注目して下さい。ひとつはⅡ式の住居址は図の左側に多いのに対して、Ⅲ式の住居址は図の右側に偏っていて、全く逆の分布状態にある。そして、それぞれの時期の住居址群の分布が、全体にずれていることも分かるかと思います。

従来、集落の変遷にあって、新しい住居はそれまでの住居址よりも内側に造られると説明されてきました。

従って、住居の分布範囲は次第に狭まってゆくことになるのですが、俎原遺跡の場合、Ⅱ式とⅢ式の住居址の分布は横方向にずれており、しかも住居址の集中する場所も大きく異なってします。こうした前後に不連続な事態は、Ⅱ式とⅢ式の間に、住人がこの集落を離れた期間が狭まったために生じたと考えればスムーズに理解することができます。

俎原遺跡の場合は、顕著な住居址分布の違いが見られたことで、こうした問題がかなり明瞭な形で提示された訳ですが、集落址を細かく検討してみると、俎原遺跡と同じような理解をなすことで解釈される事象がかなりある訳です。あるいは、そうした事態の介在を示唆するような形跡を残さなかったことも多くあったかも知れません。住居址がたくさん出たからといって、それで集落が連綿と途切れなく続いているということでは、必ずしもないんだということを、常に頭の中にいれておかねばならない、狭い視野に閉ざされた集落の理解はしてはいけないということです。

次に、掘立柱建物跡について触れさせて下さい。まず、先に簡単に触れた北川貝塚ですが、遺跡の北側、台地の先端に掘立柱建物跡群が環状に巡っているのが分かるかと思います。同じ時期の竪穴住居址は検出されていません。掘立柱建物跡がけの集落址で、それらに囲まれた広場的な中央部に墓域が形成されています。時期は墓壙から出土した土器をみる限り、勝坂Ⅰ期からⅡ期にかけての、古い段階に帰属するようです。それに続くのが第５図の前高山遺跡です。勝坂のⅡ期からⅢ期にかけての集落址なんですが、外側に竪穴住居址、その内側に掘立柱建物跡群、そして中央広場には墓域が形成されるという、一応は典型的な遺構配置を見せています。竪穴住居址は径４～５ｍ程度のものが多く、１軒だけやや大形の住居址があります。対して、掘立柱建物跡は10ｍ級のものが竪穴住居址とほぼ同じ数量、検出されました。従来、こうした大形の掘立柱建物跡が出ると、公共的な施設とか、祭祀に使う施設とか、特別な施設としての解釈が出されるのですが、この遺跡では竪穴住居址と同じ数、存在していた訳ですから、特別な施設とするには難しい面がある。北川貝塚の場合は、明瞭な竪穴住居址は出ていない訳です。

こうした大形の掘立柱建物跡の母体は何かという問題を考えないといけない訳ですが、第６図は東京都八王子市の郷田原遺跡で検出された、長楕円形を呈する大形住居址です。どうも、こうした住居址が関係するらしいんです。郷田原遺跡の場合、長楕円形大形住居址は台地の先端近くにあって、他には小形の竪穴住居址が検出されてはいるものの、長楕円形大形住居址が単独で建っていた時間もあるというまとめが出されています。少数の竪穴住居址と同時に建っていた場合は、台地の先端近くを集落の中心的な位置とみたてているのでしょうか。単独で建っていた時間帯が現実にあった場合は、特別な施設という面を強調してはいけないことが分かります。

さて、港北ニュータウン地域でも、この郷田原遺跡の長楕円形大形住居址と同じような占地をする大形の掘立柱建物跡がみつかっています。第７図は小丸遺跡の勝坂式期の住居址と掘立柱建物跡を抽出したものですが、少数の竪穴住居址が略環状の分布をなして検出された中で、17.7ｍの規模を持つ大形の掘立柱建物跡が、台地の先端近くで検出されています。こうしたあり方が、郷田原遺跡の長楕円形大形住居址に良く似ていることが分かります。大形の掘立柱建物跡が、系譜の上では、郷田原遺跡の長楕円形大形住居址などと関係する可能性が高いことが、こうした面でも示唆されている形です。

勝坂式の時期で、掘立柱建物跡を検出した遺跡を見ておきたいんですが、第８図は藤沢市のナデッ原遺跡で、前高山遺跡とほぼ同じ時期のものです。やはり竪穴住居址にひけをとらない位の数の、大形の掘立柱建物跡がでている。第９図は横浜市旭区の南原遺跡ですが、ここでも勝坂式の新しい段階の集落で、たくさんの掘立柱建物跡が検出されています。非常にたくさんの掘立柱建物跡が検出された遺跡です。

規模の大きな遺跡だけではありません。第10図の花見山遺跡の場合は、竪穴住居址が２軒だけですが、大形の掘立柱建物跡が１棟、それに重複して、やや小形となる掘立柱建物跡があって、他にもその疑いのある柱穴列が検出されています。つまり、集落の規模が小さい遺跡でも掘立柱建物跡は存在しているし、その中には規模の大きな掘立柱建物跡も含まれているんです。

あと１例、大熊仲町遺跡を引用します（第11図）。掘立柱建物跡は竪穴住居址群の描く円環の内側に配置されることが多いのですが、大熊仲町遺跡の場合は、集落の西側でそれらがまとまる区域を形成しています。竪穴住居址群の内側という面を強調すれば、集落内の、居住施設以外の、何らかの施設という解釈が先行してしまうんですが、大熊仲町遺跡のように、竪穴住居址群の作る円環の一角、あるいは外側でまとまるということになると、それらが一定の単位をなした集団としての見方も許容される訳です。

こうした掘立柱建物跡は竪穴住居とは異なった、別の系譜の住居であった可能性も考えなくてはならない。竪穴住居に住まう集団とは別の集団としてみてゆく必要性ですね。ここでひとつ強調しておきたいのは、これらは「夏の家」ではないということです。1976年に私たちがこうした建物があることを小丸遺跡の調査で把握した訳ですが、最初に考えたのが、「夏の家」という構想だったのです。しかし、だいたい最初に考えつくことにはろくなことはない。実際、速報的に報告した時は、「夏の家」という構想については全く触れていません。一番最初に考えつきそうなことですから、もっと慎重になる必要がある。その後の資料の増加によって示されてきたのが、異系譜集団の住居という考え方である訳です。ひとつの集落の中での、異系譜集団の同居ですね。時間的な関係から、細かな話しはできませんが、縄文時代の掘立柱建物跡を考える上での、現在の観点のひとつとしてご記憶ください。

次に、神隠丸山遺跡を取り上げたいと思います（第12図）。この遺跡は中期と後期の集落址が重なっているんですが、両者の中心域がずれているんですね。実は、中期の集落が終焉してから、後期の集落が開始されるまでには、数百年という時期が流れています。中期最終末から後期初頭の期間、人間が住んでいない期間があって、後期前葉になって集落が再開されたときに、中期集落とは位置がずれて集落が形成された訳です。

神隠丸山遺跡の経営が途絶えた中期週末から後期初頭の状況ですが、第２図の加曽利Ｅ式期の集落址分布図で、その終末期には集落の記号がどこも小さくなっています。この時期、気候が寒冷化したと言われていまして、それが縄文中期の社会にも大きな影響を与えた可能性が考えられています。集落址の規模は小形化し、それまでは集落がつくられなかったような場所にも、規模の小さな集落がつくられるようになります。小規模で分散居住する方式に変化している訳です。こうした状況が後期初頭段階にも引き継がれていまして、住居単位の活動が比重を大きくします。それが後期集落のあり方に大きな影響を与えることになります。

1970年代前半、後期集落の構成というものはほとんど分かっていませんでした。そうした中で調査されたのが、第13図の小丸遺跡です。この図は時期的に大きく分けて示してあります。堀之内１式の段階では、住居址は遺跡全体に散らばっていますが、小さな黒丸で示した貯蔵穴が、住居址の近くに分布していることが分かるかと思います。個別住居が貯蔵穴を管理している様子が見える。個別住居単位の独立性が高かった、ひとつの集落地に集合はしていても、個々の住居が集落内の一定の場所にあって、貯蔵穴も分有している状態です。こうしたあり方は、つまるところ、中期集落の崩壊から後期初頭段階へと続いた、小規模に分散した情勢の延長上にある訳です。

ところが次の堀之内２式期になると、住居址が台地の根元に集まってきて、貯蔵穴も集落の中央にまとまるようになります。住居単位の独立性の高いように受け取れた堀之内１式期の集落に比較して、集落内に一

定のまとまりのある構成が見て取れるようになる。あとひとつ重要な点は、Dとした図に示しているんですが、掘立柱建物跡という建物が登場してくる点です。掘立柱建物跡は前に触れたように中期にもあったのですが、中期社会の崩壊に伴って、中期最終末から後期初頭段階には、存在が不明瞭となってしまいます。堀之内１式期にもはっきりとその時期のものとされる事例は僅かで、時期が確かなものは、堀之内２式期になって急増しているんです。再度、登場してきたと言って良いでしょうか。竪穴住居址は台地の根元に集中し、掘立柱建物跡を加えることで、全体として環状の遺構群配置が成立している訳です。

こうした構成は加曽利Ｂ１式期になると、更に明瞭となります。斜面の上の方に、十数回も建て替えられる住居址があって、それ以外には竪穴住居址はごく僅かになってしまう。一方で掘立柱建物跡は環状に巡っており、両者を組み合わせて、環状の構造が成り立っています。また、墓域が竪穴住居址の前面に形成されていて、この住居址が葬制の上で特別な役割を果たしていた可能性が示されているのも重要な点です。つまり、同一地点で繰り返して建てられている住居址は、集落の要たる位置にあって、墓制の上でも重要な役割を果たしている。であれば、これが住居である限り、その住人は、墓制の上で重要な役割を果たすような位置にいることは考えても良いでしょう。また、この住居址が集落の要たる位置にあって、同じ場所で繰り返して建てられ続けていることは、その存在が集落の中で、やはり特別な意味をもっていたことを表しているのでしょう。規模がやや大きめであることも加味すれば、この住居の中で、室内祭祀のようなことが執り行われているかも知れません。とすれば、この住居の住人は、祭祀の執行にあたっても、一定の役割を果たしていたでしょうし、また、集落の「長」のような性格を有していたかも知れません。こうした様々な面を考慮して、私はこのような住居址を「核家屋」と呼んでいます。

で、核家屋の引き立て役となる掘立柱建物跡ですが、実は中央に炉址を持っている事例がかなり増えました。この建物は当時の地表面をそれほど掘り込むようなことなく、地面を整地して床としているような住居で、いわゆる平地住居の仲間になります。従って、床面の位置が高く、耕作などで炉跡が破壊されてしまう可能性も高い訳です。小丸遺跡の調査で初めて掘立柱建物跡を検出した際に、炉址を持っていることが分かったのは、僅かに６～７棟ほどだったでしょうか。

第14図は、宮ヶ瀬遺跡群の中の馬場№６遺跡です。この遺跡でも緩斜面の高い部分に、同じ個所で何度も建てられる住居がありまして、入口の前面から石を配しているんです。外側から見られる景観というものを意識した施設を伴っているということです。そして、その住居址の斜面下方では、掘立柱建物跡がたくさん検出されました。黒土の中で焼土がたくさん検出されて、その面では柱穴は検出することが出来ませんので、それが検出できるところまで掘り下げたところ、柱穴がたくさん出てきた。そしてそれらの中には、掘立柱建物跡として組合せの分かるものがいくつもあった訳です。そして、上位にあった焼土、つまり炉跡と図面を合わせてみると、掘立柱建物跡と組み合わさることが分かった訳です。同様の事例としては綾瀬市の上土棚遺跡がありまして、やはり黒い土のレベルで焼土が出てきたんですが、周囲を掘り下げたところ、焼土を中心として、たくさんの柱穴が出てきまして、それらを検討したところ、掘立柱建物跡の存在が明瞭となりました。つまり、掘立柱建物跡の床面はかなり高い位置にあるために、耕作で破壊されたり、あるいは従来の調査では、黒土ということで、重機などで削ってしまっていた可能性が高い訳です。後期の生活面はかなり高い位置にあって、掘立柱建物跡も床面がかなり高いレベルにあることから、以後の縄文後期や晩期の遺跡の調査では、相当に上のレベルから慎重に調査しないと、こうした遺構を破壊してしまうことになる訳です。

囲炉裏を持った掘立柱建物跡がかなり高い割合になることが分かってきまして、それらが住居として用い

られた可能性も高くなりました。核家屋と掘立柱建物跡との関係ですが、核家屋を集落の中核として、掘立柱建物跡がいわば一般家屋としてあって、集落が構成されていると考えたのは、先に説明した通りです。ところで、核家屋の住人は集落の長、あるいは祭祀を司るような人物、という私の提唱に対しては、両極端の立場から反論も出されているので、ご紹介しておきたいと思います。まず、山本輝久さんですが、こうした考え方は縄文階層論に則っているのでけしからんとおっしゃっています。掘立柱建物跡は倉庫であるというのです。囲炉裏をもった倉庫がこんなにたくさんある光景というのは、ちょっと理解しづらいのですが、ともかくそういった批判ですね。対して、これとは全く正反対の批判を出されているのが佐々木藤雄さんで、核家屋というのは、すぐれて階層社会の象徴的な存在なのであって、私の考え方ではその存在意義を表現し切れていないと主張されています。山本さんとはまさに正反対の立場からの批判ということになります。後期集落に関しては、こうした議論が出されているような状況です。今後、どのように展開してゆくか、おおいに注目して下さい。

かなり急ぎましたが、神奈川県の発表会以外で、港北ニュータウン地域の事例について発表される機会はあまりありませんでした。今回、この歴史博物館を使うということで、港北ニュータウン地域の特別版みたいな形で、整理作業20年を経て、今、ここまで分かってきているというようなお話しで、縄文時代の研究、20年に代えさせていただきました。

図版引用文献

第１・２図　石井寛2010「縄文時代の遺跡群と地域集団－港北ニュータウン地域の遺跡群調査から－」『横浜市歴史博物館紀要』第14号

第３図　坂本彰ほか2007『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告39（財）横浜市ふるさと歴史財団

第４図　小林康男ほか1986『俎原遺跡』塩尻市教育委員会

第５図　石井寛2001『前高山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告29（財）横浜市ふるさと歴史財団

第６図　戸田哲也・吉田浩明・麻生順司編著1996『南八王子地区遺跡調査報告10（郷田原遺跡）』八王子市南部地区遺跡調査会

第７図　石井寛1999『小丸遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25（財）横浜市ふるさと歴史財団

第８図　戸田哲也1989「藤沢市ナデッ原遺跡の調査」『第13回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

第９図　橋本昌幸・平子順一2002『南原遺跡発掘調査報告書』（財）横浜市ふるさと歴史財団

第10図　坂本彰1995『花見山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅥ（財）横浜市ふるさと歴史財団

第11図　坂上克弘ほか2000『大熊仲町遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告26（財）横浜市ふるさと歴史財団

第12図　横浜市埋蔵文化財センター1990『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅹ（財）横浜市ふるさと歴史財団

第13図　石井寛1989「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』第６冊　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

第14図　鈴木次郎・近野正幸1995『宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ』かながわ考古学㈶調査報告第４冊

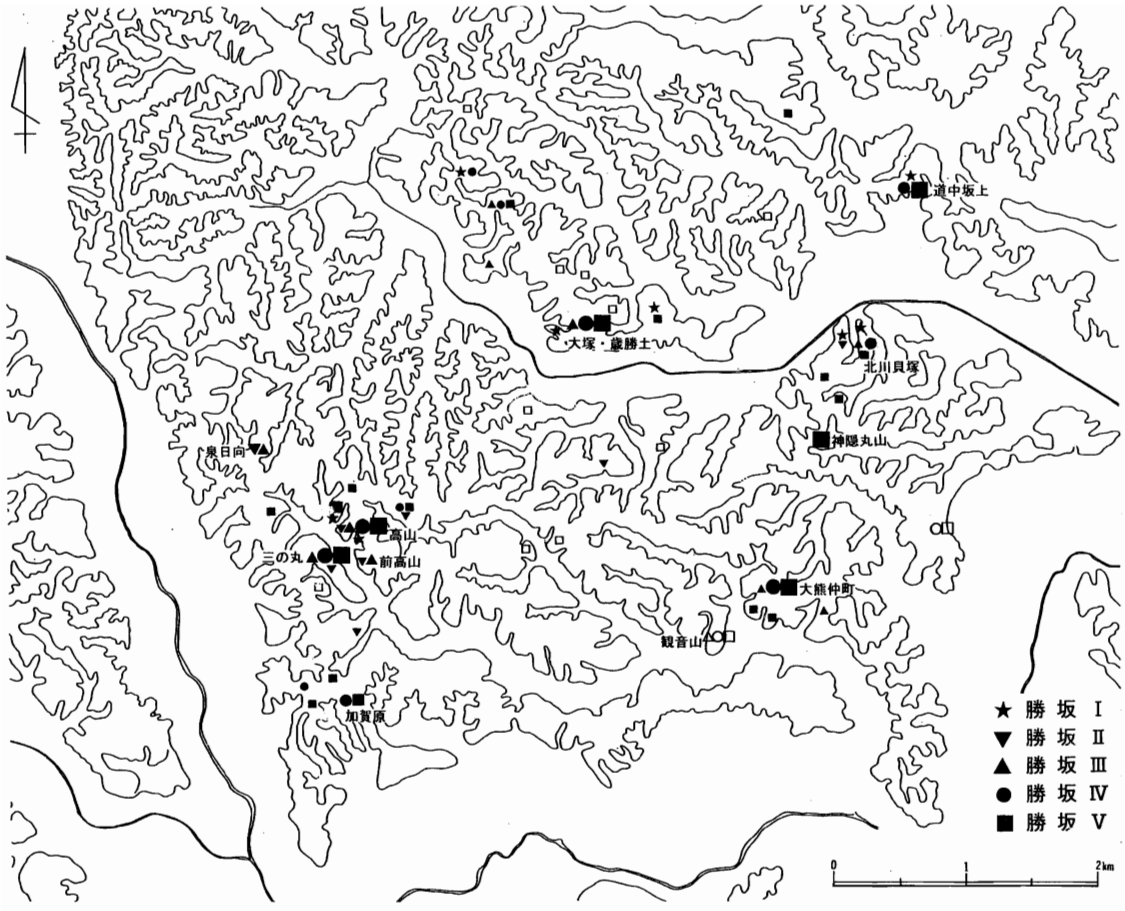


図 1　港北 N.T. 地域中期中葉期集落址分布図

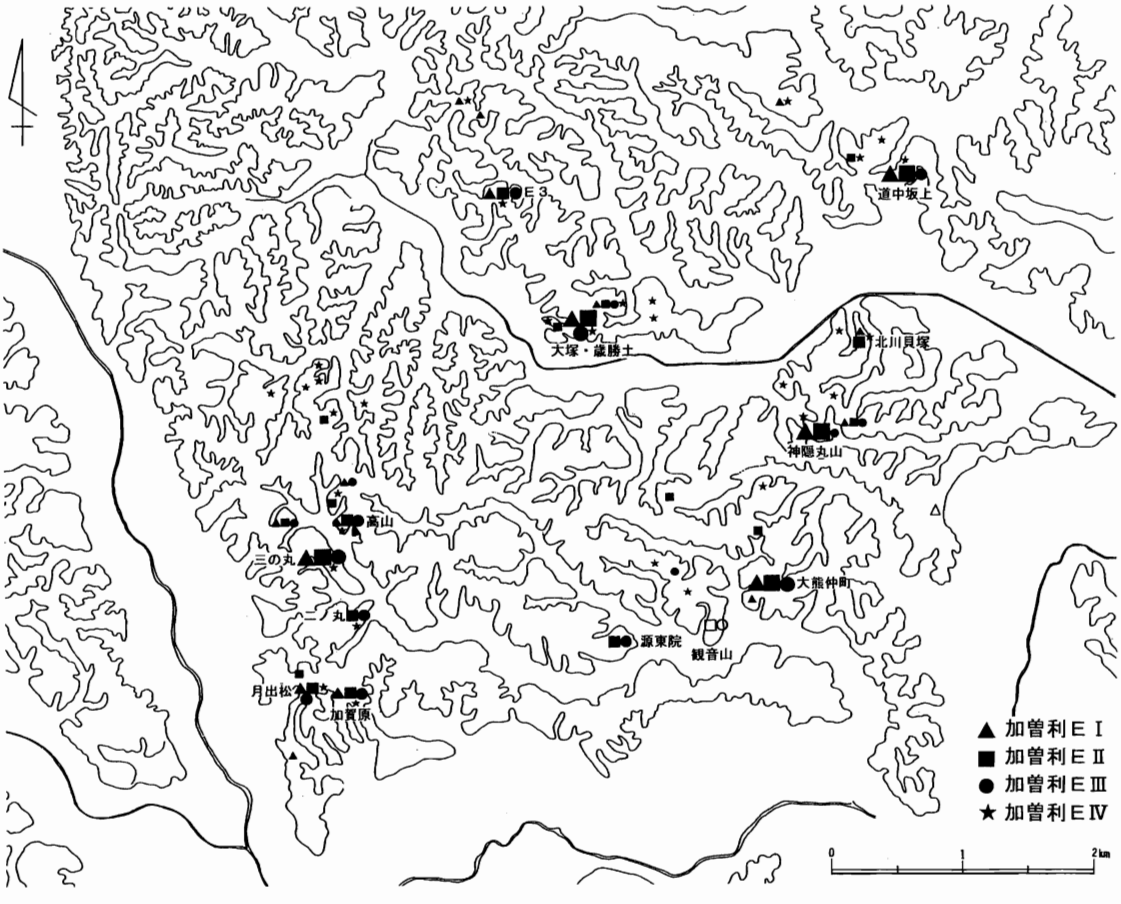
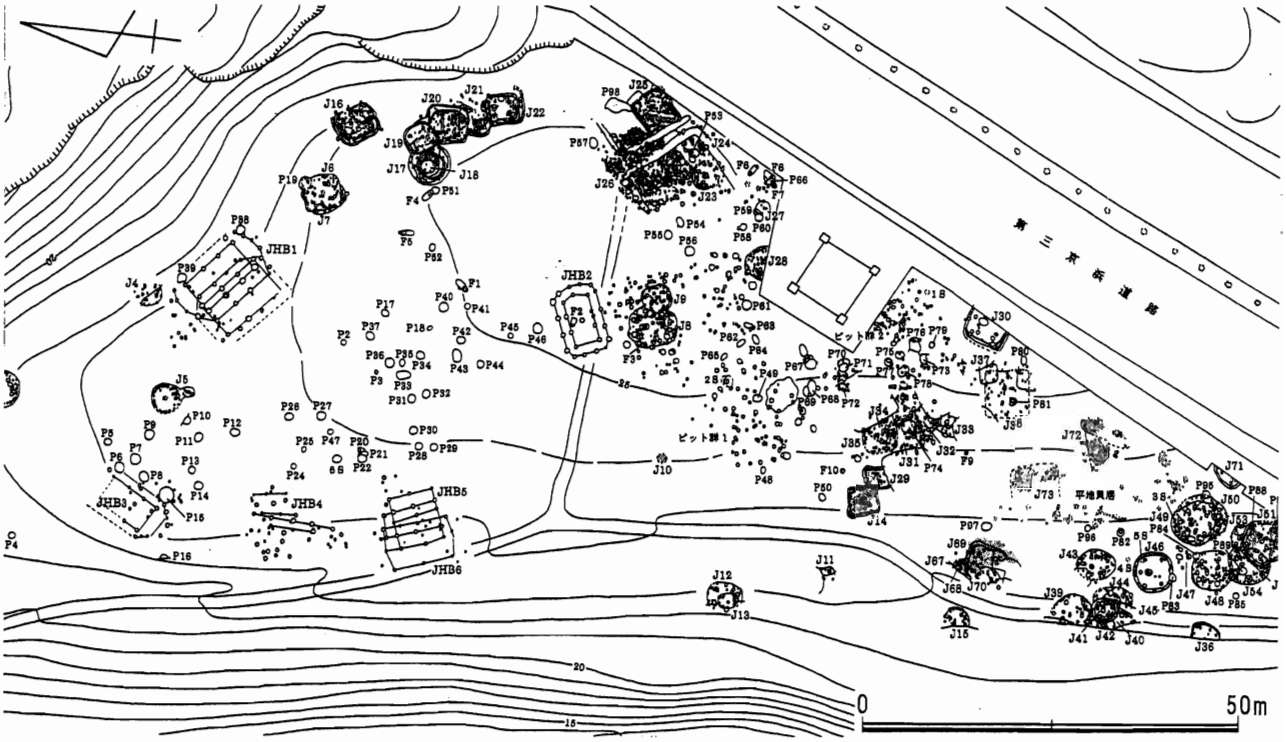
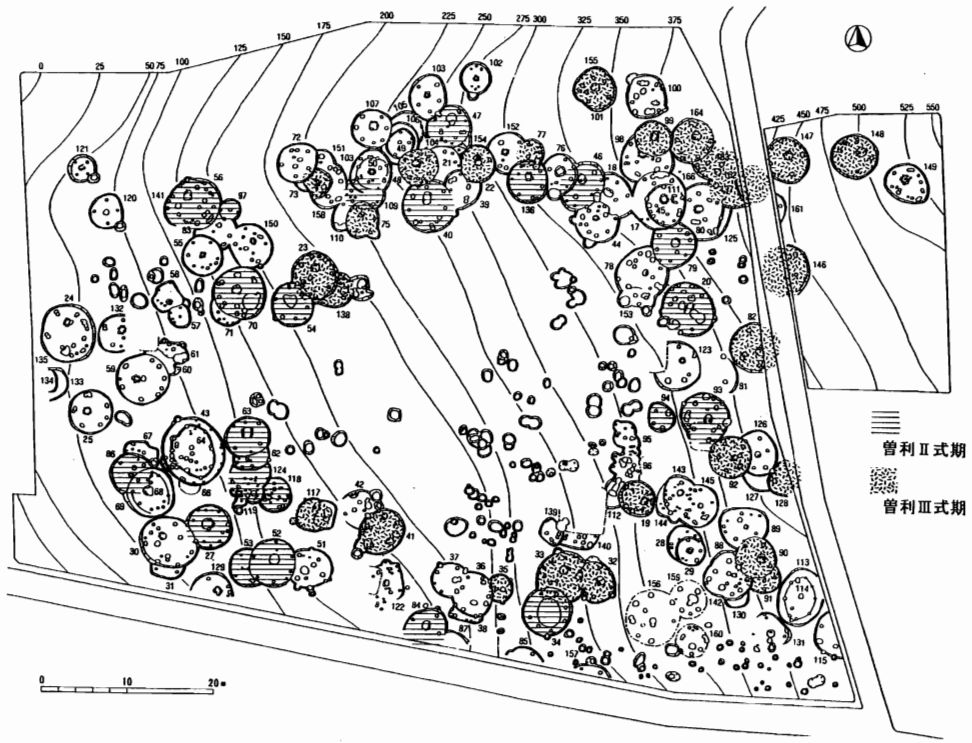


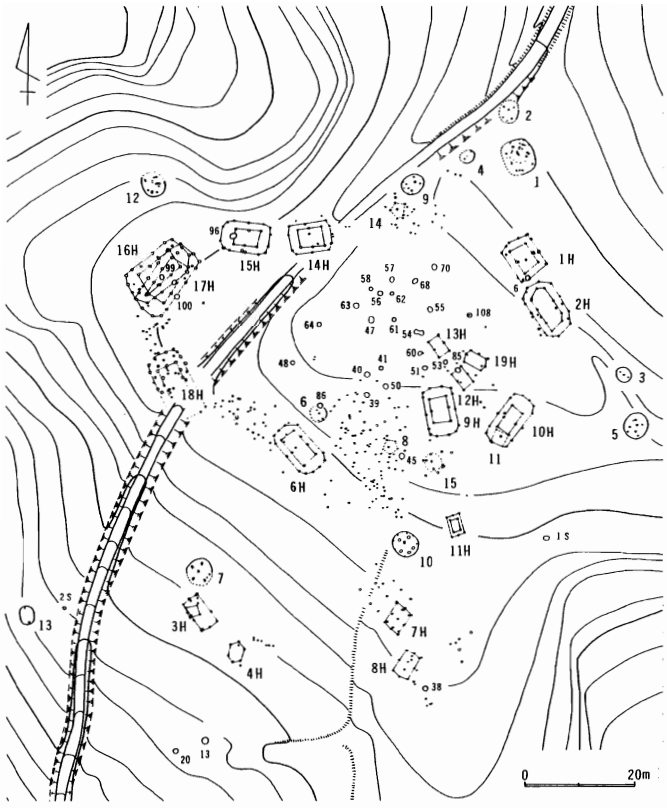
図 2　港北 N.T. 地域中期後葉期集落址分布図



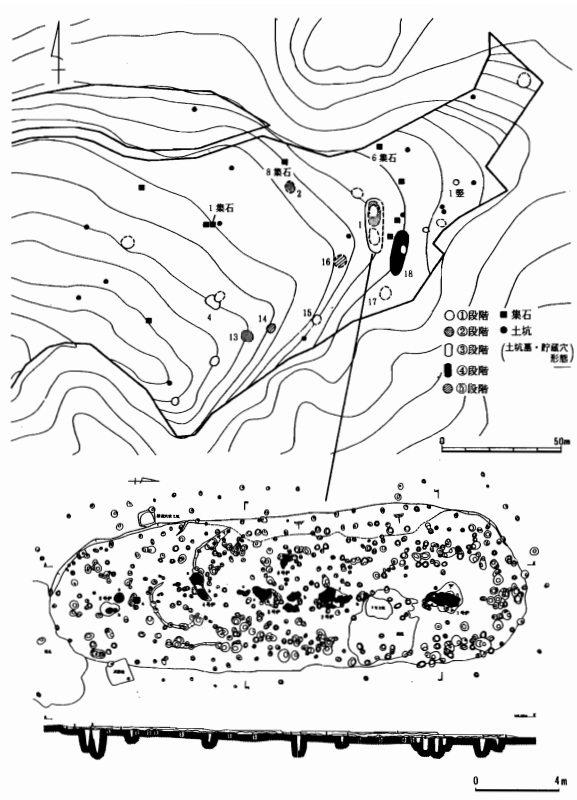
第3図　北川貝塚全体図（部分）



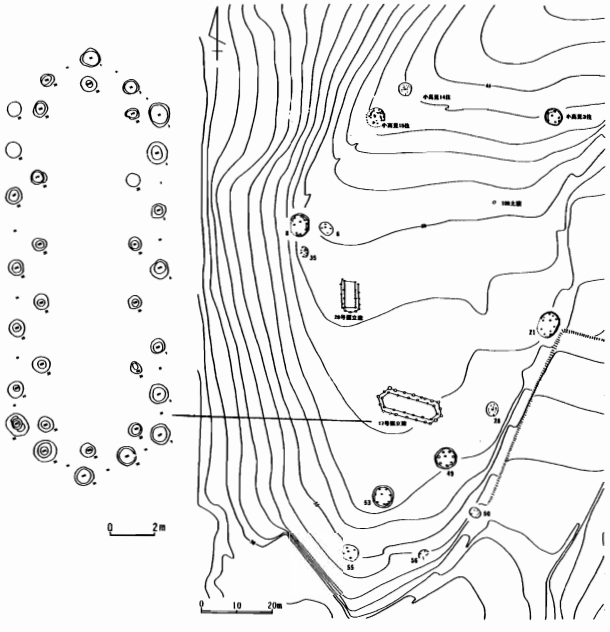
第4図　俎原遺跡曽利Ⅱ・Ⅲ式期住居址指示図



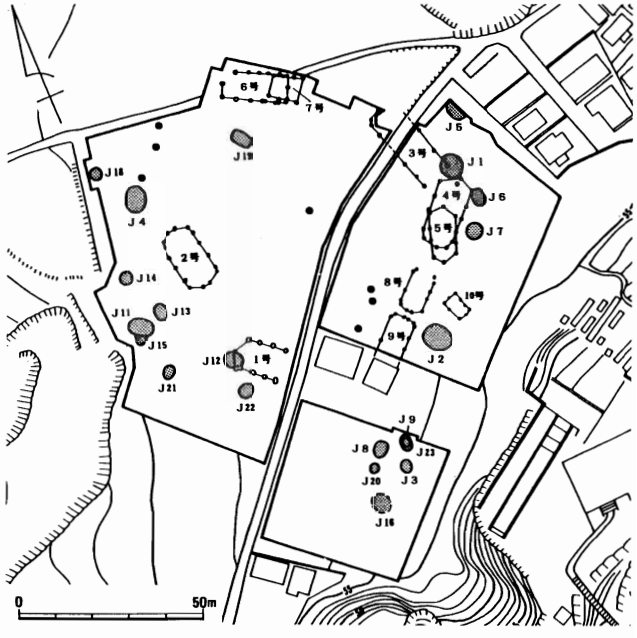
第5図　前高山遺跡全体図



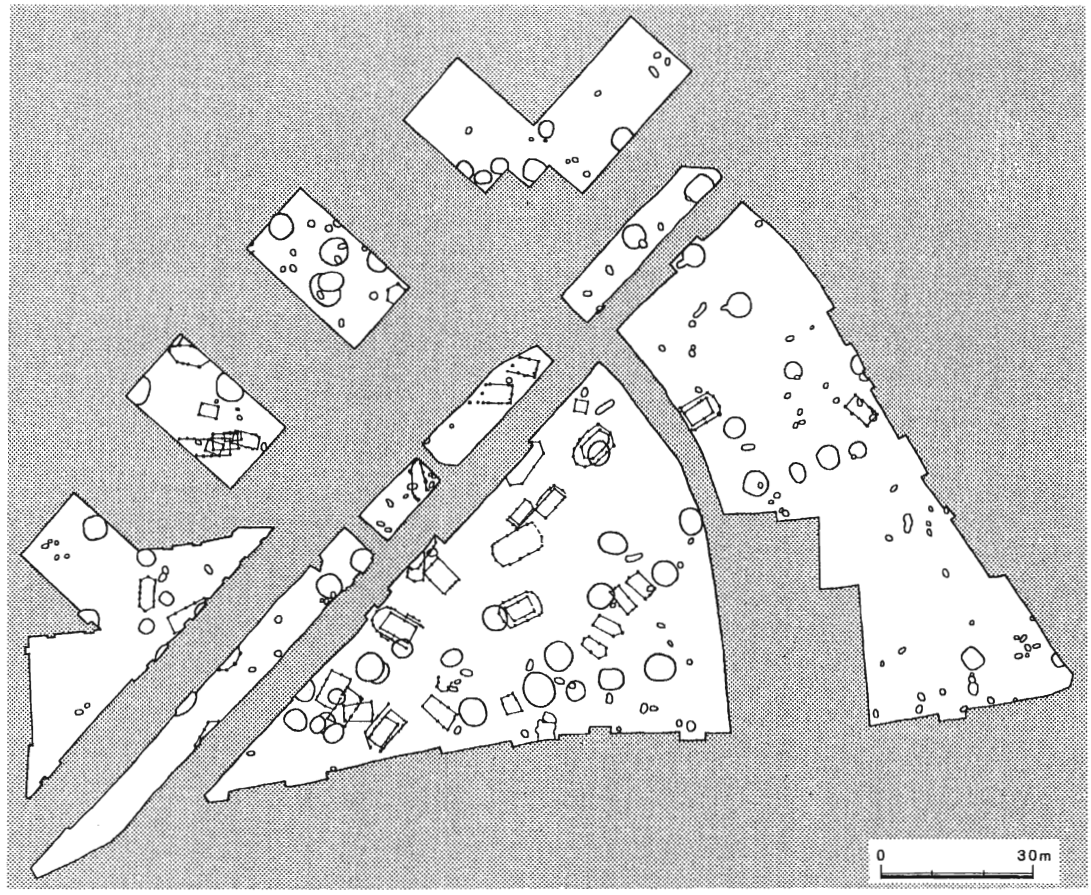
第6図　郷田原遺跡全体図と1号住居址



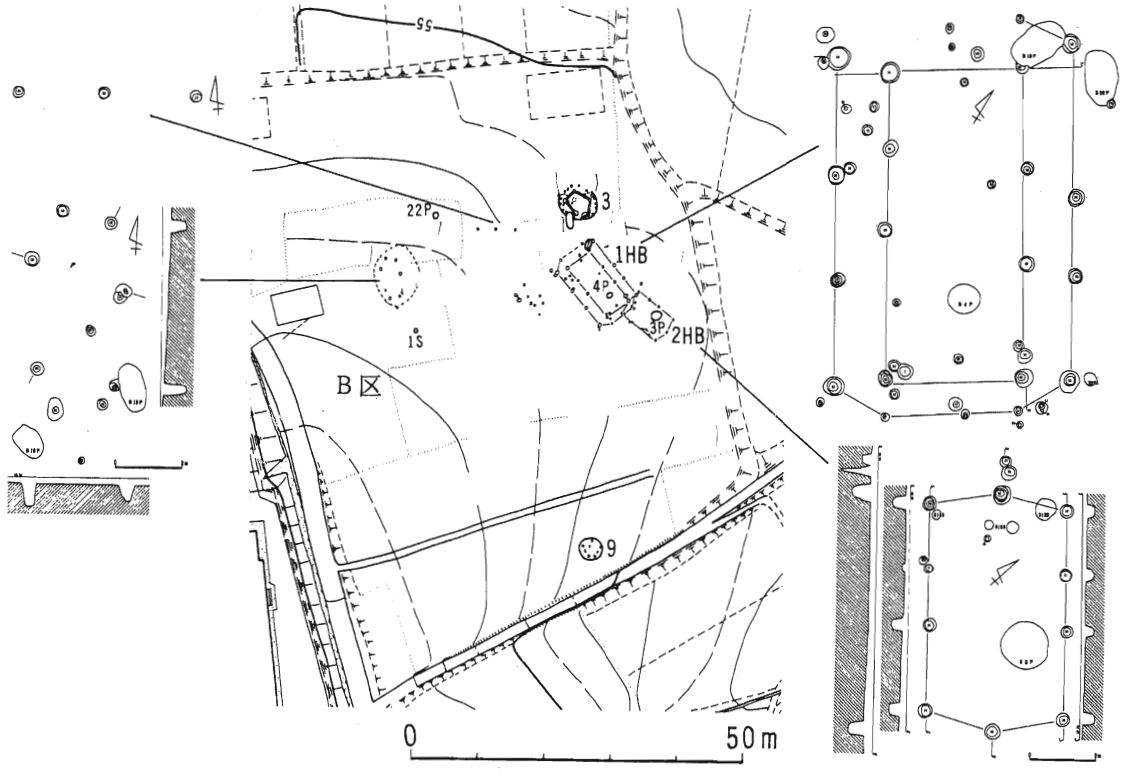
第7図　小丸遺跡中期中葉集落址全体図と
大形掘立柱建物跡



第8図　ナデッ原遺跡全体図



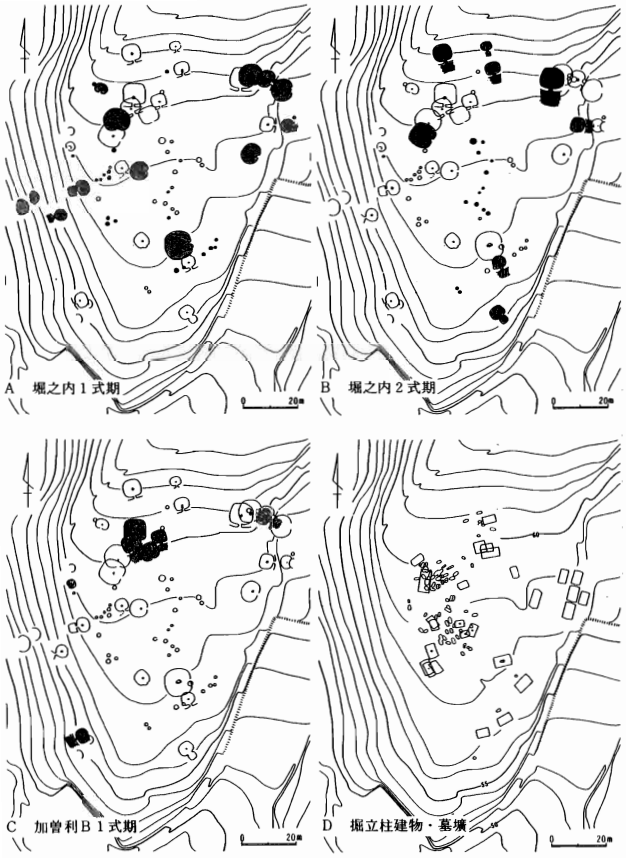
第9図　南原遺跡概略図



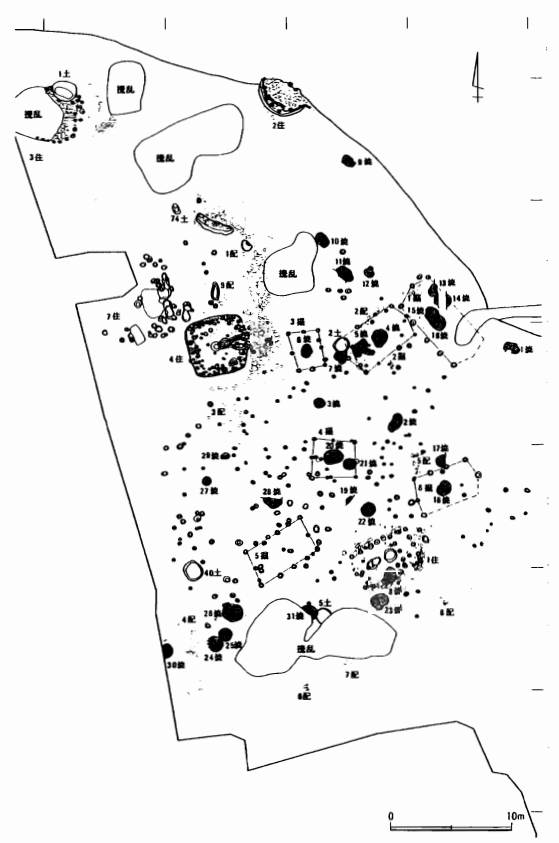
第 10 図　花見山遺跡勝坂式期集落址全体図

第 11 図　大熊仲町遺跡全体図

第 12 図　神隠丸山遺跡全体図



第 13 図　小丸遺跡後期集落址変遷図



第 14 図　馬場№.６遺跡全体図

神奈川県下の弥生時代研究　この20年

西川　修一

はじめに

お早うございます。県立追浜高等学校の西川と申します。ちょうど20数年前の1987年に、高校の日本史の教員から、県立埋蔵文化財センターの方に異動し十数年の間、県内の各遺跡の調査と、県教委では調整とかに携わってきました。今は高校の教頭という、およそ考古学研究とかけ離れた職に就いていて、忙しくかつ、悩み多き日々を送っています。こういった学問的な研究の場に呼ばれるのは、たいへん光栄な事であり、今日はお話しさせて頂けることを楽しみにして来ました。

県考古学会の過去20年を振り返ると、私が大学に入り考古学を専門的に勉強し始めた昭和52（1977）年当時は、まだ「県考古学会」はありませんでした。ちょうど県遺跡発表会が始った年のようです。毎年秋になると、かつては山下公園近くの開港記念会館で開催…というイメージでしたが、その後は県内各地の市町村の会場を巡るようになりました。年に一度の県遺跡発表会には必ず行って…みたいな感じで、最新成果を知ることを楽しみにしていました。今みたいなパワーポイントのスライドではなく、「はい次！お願いします…ガチャ…」というスライド投影機の時代でした。会のあとの懇親会も楽しみで…。

その後、県遺跡発表会の実施主体として、かつ県下の考古学研究の発展や普及啓発を目的として、県考古学会を立ち上げようという機運が高まり、県考古学会の設立が企画されたと聞いています。その設立総会の場所は、当時の職場・阪東橋にある県立埋文センター研修室でした。その中心となり活躍されていたのが、上司である小川裕久さんや白石浩之さんでしたので、会議の準備や受付を手伝ったことを良く覚えています。その後、私は異動で2001年に教育現場へ帰りましたけども、あの設立総会から20年とは…歳月の流れは早いものと痛感します。私が県埋文センターや財団、県教委で関ってきた色々な遺跡を中心に、その後の成果も含め、この20年間の弥生時代像の変化を回顧してみたいと思います。

ニッポンの20年間の激変と「弥生時代像」は関係するか？

今日は全時代が対象で、弥生時代の研究が専門の方には既にご存じのことが多いかもしれませんが、20年間の県内の弥生遺跡の調査成果、これについて中期から後期のものを中心にお話します。この後に古墳時代の発表が予定されています。私は古墳時代への過渡期が専門ですが、柏木さんの発表に出てくると思いますので、その時期は言及しません。

論旨としましては、この20年間に弥生時代像というのは大きく変化しました。その結果、「戦乱」とか「動乱の時代」という点が「強調」される弥生時代像が定着しましたが、その変化とは、「ニッポン社会の変動」と「何か連動・リンク」しているのではないか？…という「仮説」を中心にお話します。この「仮説」が正しいかは、聞いている皆さん判断に委ねるとして、県下の弥生遺跡の調査成果をトレースしつつ、簡単に回顧したいと思います。

インターネットなどにより、この20年間の世の中の変動をざっと調べてみました。1990年代以降とはどんな時代であり、この間に世の中がどのように変動したかを概観してみました。タイトルのスライドに主な写

真を掲げてみました。

子どもの頃、小学校の時とかは、いわゆる「共産主義国家」に対して肯定的な見解…「ソ連や中国は計画経済という新しいシステムの国家だ…」と、大人から教わったような覚えがあります。幼稚な段階でしたから、漠然と子ども心に「そうなんだ…」と思いました。

それだけに冷戦終結後…およそ20年前のベルリンの壁の崩壊（1989年）から、続いてソ連解体（1991年）などの「激変」は、「混乱の時代の到来」との痛烈な印象を持ちました。子どもの頃の価値観も崩壊していくような感慨がありました。そのあとバブル崩壊（1990年代）、湾岸戦争（1990年）…この湾岸戦争はリアルタイムで戦闘映像が世界に配信された初めての戦争と言われました。現実の戦闘＝殺戮が「まるでテレビゲーム」のように映し出されていることに「衝撃」を感じました。

1995年には阪神淡路大震災が起こり、尊い命がたくさん失われました。高速道路が横倒しになった映像などが繰り返し報道され…。この日は月に一度の本部での「センター会議」の日でしたので、家を出た7時前とは違い、職場に着いた8時頃は被害の状況が明確になりつつある最中で、職場のテレビで火災が広がりつつある神戸上空からの映像を、同僚と固唾を呑んで観た記憶は鮮烈です。また地下鉄サリン事件（1995年）…。2000年には旧石器捏造事件。この時、私は県教委生涯学習文化財課に在職していましたので、その土曜日の朝のことも、よく覚えています。コンビニに行って新聞を買いまくり、全部読みました。直後はその対応に追われましたので、今でも忘れられません。まずは県内の旧石器捏造遺跡は無く、県内の旧石器研究者諸賢の見識の高さが再認識され、少しホッとしました。またその直後に同時多発テロ（2001年）があり、これもリアルタイムでテレビを観ていましたので、現実か映画の世界か区別がつきませんでした…。郵政選挙（2005年）や、政権交代（2009年）…と。世間はこの20年間とは、こんな「激変の時代」でした。

このことを踏まえ「ニッポンとは？…弥生時代像とは？」について考えてみます。まずは、もっと前の弥生時代像とはどうだったのか？…弥生時代に限らず、戦前には皇国史観に基づき、考古学的な成果についてほとんど学校教育に用いられませんでしたから、戦後これから解き放たれ、初めて「西日本から始まって、列島に農耕社会が定着した時代」だとして規定されたと思います。戦後すぐに文部省から刊行された『くにのあゆみ』などには、初めて考古学研究の成果も盛り込まれ、「新たな歴史像」が国民に共有されるようになったのだと思います。国民全体も新しい国の枠組みや歴史を必要としていたと思います。

このような過程で「日本民族の枠組み」について、「本当は黄金の稲田稔る豊かな瑞穂（みずほ）のクニ」＝「平和な農民」の作り上げた社会であり、われわれの祖先はそれを希求する「平和志向」の民族だった…という「刷り換え」が進められました。最近リニューアルされた静岡市登呂博物館に行くことを是非お勧めします。戦後すぐの登呂遺跡の調査に異常なほど「国民的関心」が集まっていた…この辺の経緯が良く分かります。横浜市南区三（さん）殿（との）台（だい）遺跡…最近は歌手「ゆず」の「ゆかりの地」としての方が有名だそうですが…の調査なども、この延長線として理解することが可能だと思います。

アジア太平洋への進出を目指し、拡大主義･侵略的な日本像とは「誤った方向への志向」は「騙され」ていた…焦土と化した「敗戦」を契機に「後悔・反省」し、本来的な日本民族の姿を取り戻そう…当時の趨勢を看取ることができます。戦後の弥生時代像を理解するためには、この経緯を正しく理解しないといけないと思います。子どもだった私にとって､最初の「弥生時代像」とはこのような歴史観に基づくもの…でした。

「戦乱の時代 弥生という変化」へ

しかし、ちょうど今から約20年前、佐賀県吉野ヶ里(よしのがり)遺跡の「発見の頃」から、この弥生時代像は大きく変わったように思います。当時、今は亡き佐原 真(まこと)さんは「吉野ヶ里遺跡を守ろう」というスタンスから、マスコミに対して「邪馬台国が見えてきた…」とメッセージを発信し、1988年2月に各新聞・テレビはこれを大きく報道しました。邪馬台国九州説は大いに勇気づけられました。佐原さん自身は九州説「側の人」ではないと思いますし、そう言った訳ではなく､『魏志倭人伝』に出てくるような「クニグニのひとつ…」云々ということを言ったと理解していますが…。吉野ヶ里遺跡が発見された自体は、もっとずっと前ですが、工業団地造成に伴い大規模な調査が始まり、その規模の大きさ・貴重性から、何とか残したい…その結果、今では国営公園として整備され、一大観光地として多くの人が訪れていますが…。この善し悪しは別として､「弥生時代とは激動の時代だった！」というイメージへと…佐原さんという「巨人」とも言うべき大研究者の影響も大きかったのか…この頃を境にずいぶん変わってきたと思います。

学史的には実際は、佐原さんはもっと前から弥生時代は「戦乱の時代」であると数々の言説を発信していました。また「戦争の歴史」を研究テーマのひとつとして掲げ､「戦争はヒトが作り出したモノであるから、ヒトが無くすことができる！」と主張し続けた「偉大な研究者」だと思います。でも私にはこの吉野ヶ里遺跡≒環濠集落≒戦乱…という「イメージ」が「平和な農耕社会」という「枠組み更新」に多大な影響を与えていると思います。

なおわたし自身は、いわゆる『魏志倭人伝』という文献史料の研究と、考古学研究やその資料操作・分析は距離を措くべきというスタンスをとり続けていますので、誤解の無いようにして欲しいと思います。この点は本日の論点ではありませんので、これ以上触れませんが、大切な事だと思います。本当は考古学という「学問の存立に係わる大切な事」ですから、延々と自説を述べたいところですが…。

ところで吉野ヶ里遺跡に限らず、90年代は大規模な発掘調査が続々と行われた時代でもありました。私は1990年代以降の10年間を「本来のバブル崩壊後」にやってきた「公共事業バブル」という理解をしていますが、景気対策としての公共事業増大で発掘調査の件数が非常に多くなった時代です。私も振り返ると、日本史教員だったのに、この時期に合わせて発掘調査に回されたと…今となってはよく理解できます。私たちの考古学研究者の研究活動やその対象は自分の好きこのみで、自由に取捨選択しているように思い込みがちですが、そうではなかった様な気が…この歳になった今、しみじみ感じています。

この後には、青森県三(さん)内丸山(ないまるやま)遺跡も調査され、大きく報道されました（大々的に喧伝されたのは1990年代後半)。これは本日のテーマである弥生時代とは直接は関係ありませんが、それまでにない「東北地方像…」「縄文文明論…」等が出現しました。ここに掲げたようなに画像も世に出回っていますが、どこまでリアリティのある姿なのか？と…思っています。とある研修会後の懇親会にて、先の佐原真さんが､私の隣席に座っていた三内丸山遺跡の担当者の一人であった岡田康博さんに対して､その「評価」について、喧々がくがくと「議論」していたのを思い出します。佐原さんはお酒を飲まない人なので、この

○弥生時代と縄文時代に関する「列島史像」の変化

登呂遺跡の調査（1950 年）

佐賀県吉野ヶ里遺跡（1986 年）

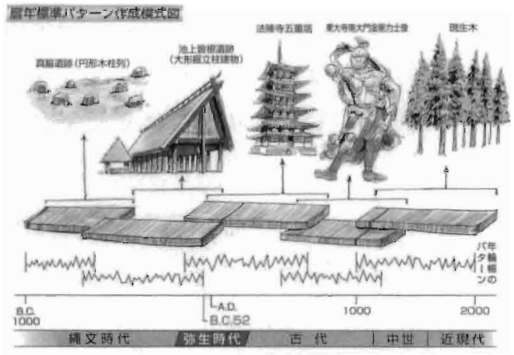
青森県三内丸山遺跡（1992 年）

○弥生時代に関する新しい年代観

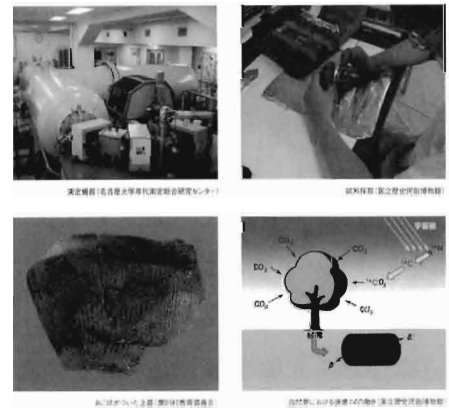
＊大形建物1・大形井戸1遺構（左）とCG復原（右）
周囲の民家や景観とくらべると巨大さがわかる。

＊大形建物1の柱穴12柱からサンプルをとり出す

（秋山 2006 より転載）



＊年輪年代測定の方法
年ごとの年輪個性（幅）をみきわめ、現生木から順にさかのぼっていくと、過去の年輪の実年が判明する。



＊弥生時代の開始は前 10ｃに？

従来説との整合性は？

①弥生文化の東遷はゆっくりだったのか？

②既存の考古資料との整合性…

③検証や発表方法に問題はないか？

④弥生中期＆古墳出現期の社会像の再構築も必要？

早かった？階級社会への転換

話が終わったらそそくさと帰ってしまったので、私もお話ししたかったので、よく覚えています。佐原さんは三内丸山の「巨大性・長期性…」については、その後随分と肯定的な見解へと転換したようですが…このような絵を見ると、「まぁ…よくも見てきたように描けるものだ…」と思います。大林組監修の『図録』から取った画像ですが、果たしてどんな学問的な手続きに基づくのか、「建築の素人」にはよく分かりません。世間には三内丸山遺跡の巨大柱跡の「復原案」のひとつとして流布しているモノです。「類例の少ないモノ」は考古学的には、「解釈のひとつ」として「しか」理解すべきではありません。

このように弥生時代像の変化と共に、縄文時代像も大いに変化しました。常に「僻遠の地であるという自虐的な認識」を持ちがちな、東北地方に「夢と希望・自信を…」と言う点で、三内丸山遺跡をはじめとした数々の縄文遺跡の果たす役割・価値は高く評価されるべきです。縄文から弥生へ…西から東へ…の「発展史観」という点も、再考を要する事柄です。列島東部の「縄文文化の極限まで発展した姿」や、高度な「芸術性？」は本当に世界に誇るべき「文化」であると思います。

同じ頃の1995年には、大阪府和泉市池上曽根遺跡の弥生文化博物館の北側の隣接地で、巨大な井戸跡の枠と、「神殿」とも言われる「大型建物跡」が見つかりました。これも弥生時代像の変化に大きな影響を与えたと共に、この建物跡の掘立柱の年輪年代によって、弥生時代の実年代観が大きく変化したのもこの20年間のことです。

このようにこの20年間で、弥生時代像が「大きく変化」してきたということを再確認したいと思います。どの分野についても、論争が続いており、賛否両論ありますが、今日はあまり言及する時間はありませんから、ひとつひとつ詳しく説明しないことをお許し下さい。スライドの「年輪年代」の考え方につきましては秋山浩三さんの本（2006）から転載させてもらいましたが、年輪分析により1年ごとの年代が出るということで…30年前には考えられなかったような研究の世界です。

また、いまクローズアップされているＡＭＳ法によるＣ14年代研究の進展も注目されます。この点についても、論争が続いており、まだ定説化していません。私は理科系の知識が乏しいので、この分野への賛否を述べるような立場にいませんが、Ｃ14年代と年輪年代論とは、お互いに寄り掛かっている部分があり、このまま信用することが正しい選択なのか、迷っています。ただし欧米では、「常識的な領域」にある事とのことですし、世界的な考古学の地平から眺めた時、避けて通ることは適切では無いと思います。まぁ「黒船」が来たような感覚を持っている気分は禁じ得ませんが…。

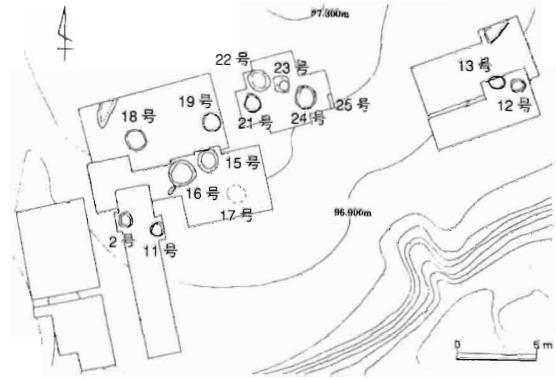
むしろ日本考古学という「業界」が、「旧石器捏造についとは反省したフリをして…あっという間に冷めて…解決スミ」という方向にあり、またまた「実証的な検証法」を跳ばしてセンセーショナルな「発見・新説」へと、「過熱」している現状については、かなり憂いています。このような傾向には、厳しく警鐘を鳴らしていかなくてはいけないと思います。

年代観の大転換については、数々の書籍が出されていますので、いくつか紹介しておきたいと思います。弥生時代全体の年代についても、ずいぶん遡りましたし、縄文時代の土器編年の年代観もずいぶん変化しています。これにより派生する数々の問題が提起されています。弥生時代については、佐倉市の歴史民俗博物館を中心にした方々から、弥生時代の開始期を大きく紀元前10世紀頃まで遡らせて考えるという、今までの私たちが教科書で習ってきた…私のような教員は教える方ですが…今までの弥生時代像とは随分違う姿がこの10年の間に結像していると思います。

この図は国立科学博物館の馬場悠男さんが作った『縄文ＶＳ弥生』（2005）というたいへん良くできた『図録』のから転載した「比較年表」ですが、これまでの弥生時代の開始期を遡らせることとなると、その拡散

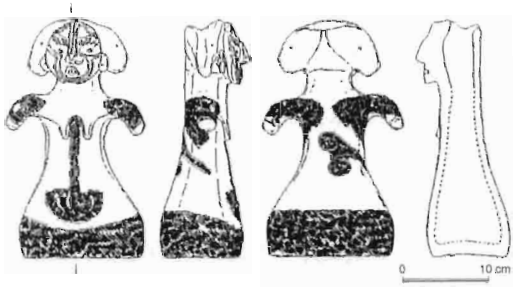
○弥生時代開始期像の変化

中屋敷遺跡遠景（東から）

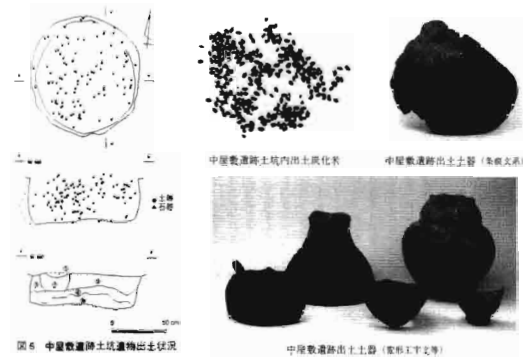


中屋敷遺跡北調査区検出土坑群

（谷口 2007 より転載）



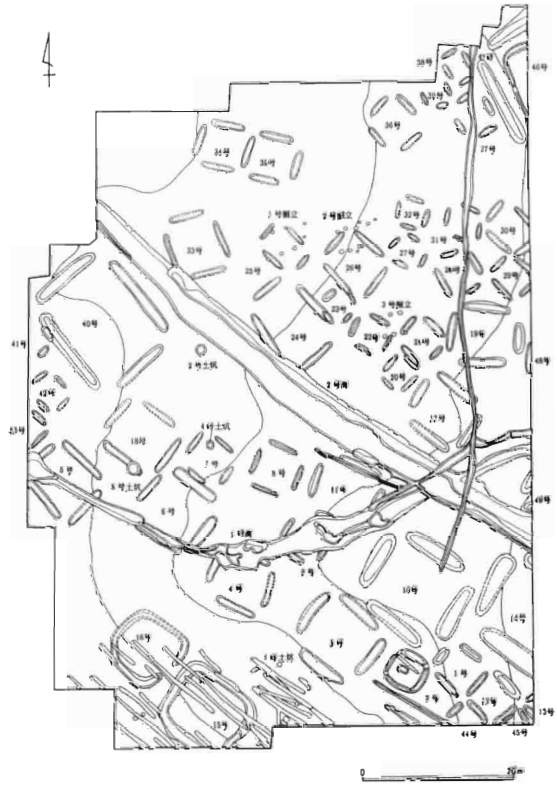
中屋敷遺跡出土土偶形容器



中屋敷遺跡土坑内出土炭化米　中屋敷遺跡出土土器（条痕文系）

図 6　中屋敷遺跡土坑遺物出土状況　中屋敷遺跡出土土器（壺形土器など）

中里遺跡第Ⅰ地点遺構配置図



中里遺跡第Ⅲ地点遺構配置図

（河合 2008 より改図・転載）

には長い時間がかかり、ゆっくりであったということになります。かつては列島の弥階級社会の進展は、たいへん早いスピードで進んだのだと説明されていました。伊勢湾岸でワンクッションおいて、東日本に広まっていった。それでもたいへんスピードが早かったと説明されていましたが、このような「枠組み」も見直しが迫られています。

ゆっくりだったとすると…既存の考古資料との整合性はまだ解決していないものもありますし、先ほど言いましたが私自身、まだ年代論については慎重にならざるを得ません。「はい、そうですか…」と右から左に鵜呑みにすれば良いというものではないと思います。発表方法や検証のしかたに問題が無いのか？と…多くのプロセスを経て、多くの視点かしっかりと検証しなければいけないと思います。疑り深いのではなく、それが新説に対する「真摯な学究の在り方」だと思います。また弥生時代の開始期だけでなく、私の専門分野である古墳出現期～前期でも、年代観の遡及は著しく、その社会構造の変化に関する説明は追いついていないのが実情で、再検討が必要です。

ここに一般の書店で入手したり、図書館で借りることができる概説書（春成・今村編2004、広瀬編2007）などを紹介しておきましたので、是非ともご参照下さい。そのような著作から知見を広めていただければ良いかと…。ただし私のような者がいうのもおこがましい限りですが、皆さま「社会的地位が高い」とか、「権威ある研究者」の言説を「鵜呑み」にしないことが、考古学の「あるべき姿」であると肝に銘じ…お読み下さるようお願いします。

かながわの弥生時代像の変化(1) 農耕社会定着期の遡及

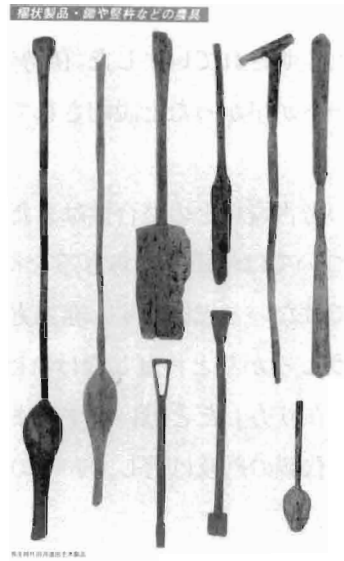
このような弥生時代観の変化を念頭において、弥生時代の神奈川県内の事例について簡単に回顧します。最近の10年弱は、わたしは発掘現場の最前線にいませんし、ひょっとしたら「なぜあの遺跡の成果が出てこないのだ…」という事例もあるかもしれませんが、レジメに主な遺跡を列記しました。時間の関係でその一部について紹介させていただきます。

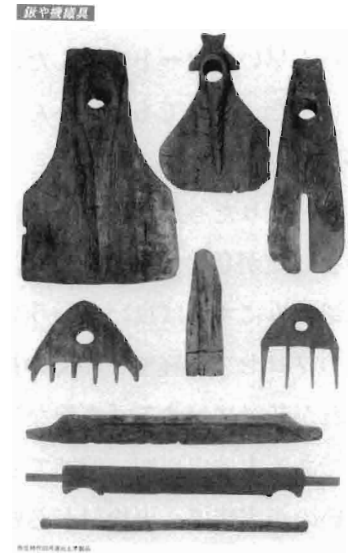
このところ水稲農耕社会の定着期について、県内における中期中葉をさかのぼる姿が急に明らかになって来ました。従来は中期後半の宮ノ台式期になって本格的な大規模な農耕集落が、東海地方東部（特に駿河あたり）との関係のもと爆発的に出現し、本格的な農耕社会が定着したと理解されていました。それまでの農耕文化の波及は、かなり零細・小規模であったと考えられていました。しかし小田原市の酒匂川左岸低地で発見された中里（なかざと）遺跡の調査成果で一変しました。また最近では、その北郊の山寄りの大井町中（なか）屋敷（やしき）遺跡の調査成果も注目されています。私はこの中屋敷遺跡のすぐ北側で、東名高速拡幅の調査に当時携わっていましたので、故・桜井清彦さんに頼まれて、この遺跡で過去に出土した「重要文化財の土偶」の大判写真を撮りに行ったり…なじみ深い場所です。先年、昭和女子大による学術調査が実施され、農耕社会の波及期に関する資料が充実してきています。ここでは谷口 肇さんの論文（2007）等に拠って、まず中屋敷遺跡の紹介をしたいと思います。

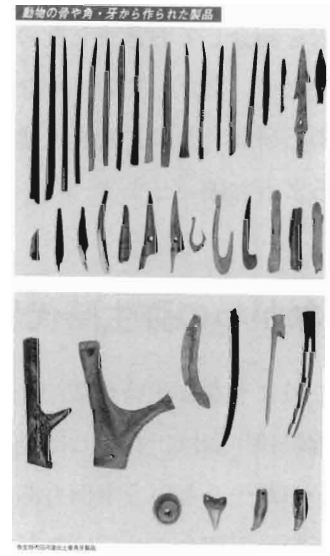
弥生時代中期前半期について、土坑（どこう）から土器や炭化（たんか）米（まい）などが発見されていますが、大規模に「定住」かつ「集住」している様子は窺えません。やはり縄文晩期から続く段階というのは、土地利用の仕方が違うと思います。ひとところに長期間定着せず、比較的「遊動（ゆうどう）性の高い生活」をしていた可能性が高いようです。ただし前段階とは随分違う社会への胎動が始まっていた姿が明らかになりつつあります。今後の調査の進展により、中屋敷遺跡頃の竪穴建物が十数棟とか、まとまって出てこないとも

限りません。そうなったら、この理解を大幅に修正する必要が出てくるでしょう。この20年の変化を考えると、あり得そうな予感もします。

しかし衝撃的だったのは、玉川文化財研究所による小田原市中里遺跡の調査成果(戸田1999・河合2008など)です。本格的な定着的な農耕社会が定着したのは中期後半の宮ノ台期であるというこれまでの理解に対して、大きな修正が必要となりました。ショッピングモール建設で、遺跡の大半は失われてしまいましたが、敷地の一部に説明施設がありますので、ぜひ訪れてみて下さい。





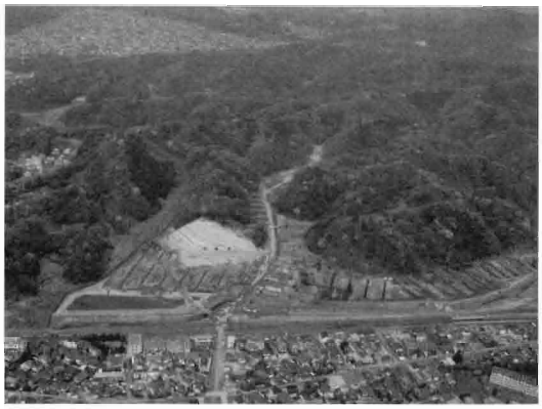


房総や埼玉でも同時期の大規模な事例が見つかりつつありましたが、「大規模な本格的定住農耕集落の全貌」が明らかにされ、全国的にも大きな注目を浴びました。たいへんなボリュームの内容で、まだ報告書が刊行されておりませんが、詳しい報告書が刊行されれば、より研究が進展すると思います。特に中里遺跡で注目されたのは、瀬戸内海周辺など西日本の土器が一定量搬入されており、本格的な農耕集落の定着段階には、既に他地域との太いネットワークがあったことで、これは海上交通であった可能性が高いと思われます。

この段階の在地土器は須(す)和田(わだ)式という型式の土器です。この中里遺跡の調査以前には、小規模な集団の生活跡しか確認されていませんでしたが、中里遺跡の成果により、その定住性・集住性の開始期が遡り、最初から列島西部と同じように、低地部に大規模な農耕集落が展開していたことが明らかになりました。水稲農耕をもたらした集団とは「最初期から本格的な集住、一定規模の人数」を抱えたものであったことが明らかになりました。

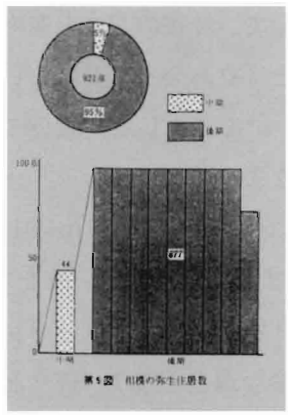
中里遺跡ではムラを囲むような溝は、河川跡と言われていて、環濠ではありませんが集落域を取り込む大きな溝があって、集落内には掘立柱建物が数多く建てられています。この図を転載するにあたり、分かりやすくするために、アミをかけてみましたが、こんなに掘立柱建物があるのだと改めてびっくりしました。どうも中心部と思われるエリアに…中心にあたるか分かりませんが…比較的大きな建物があります。これらの掘立柱建物の性格・評価についても、がぜん注目されるところです。また多数の方形周溝墓も隣接して築かれています。このように中里遺跡の調査成果では、次代の宮ノ台式期に確立するとされていた「農耕集落の要件」がより遡った段階に既に出揃っていたこと鮮明になったことが特筆されます。また列島西部との強い関係がうかがわれるなど…注目されます。

○池子遺跡の調査～低地遺跡への関心の高まり



（山本他 1999 より転載）

○相模の後期弥生社会をめぐって～そして古墳出現期へ～



（西川 1991、西川編 1998 より転載）

（小滝・村上 1992 より転載）

中里遺跡の成果は、今まで「零細だろう…？」と思われていた宮ノ台式期以前の県下の弥生時代像を一変させるようなショックを与えました。このような事例が普遍的に県下に存在するのか？またどの程度の規模だったのかは未だ明確ではありません。しかし、かながわ考古学財団のさがみ縦貫に関する調査では、相模川左岸の低地部の調査が進められ、この後の弥生後期も含め、次々と新しい知見が得られています。

海老名市の南端に位置する中野(なかの)桜(さくら)野(の)遺跡は、最近報告書が刊行(2009年)されましたが、ここでも中里遺跡と同様の土器がかなりまとまって発見されています。中野桜野遺跡でも、西日本の瀬戸内東部と係わりのある他地域の土器が在地の須和田式土器に共伴していますから、このような様相が普遍的な姿であり、低地部の調査が進展した成果として現れてきた可能性が高いことが指摘できます。ということは、これからも同様の事例が増える可能性が高いと思われます。これまでの平塚市王子(おうじ)ノ(の)台(だい)遺跡とか、厚木市子(ね)ノ神(かみ)遺跡などの比較的零細な台地上の集落遺跡が普遍的で「あるべき姿」として理解されてきた、宮ノ台式期以前の弥生集落像が大きく転換したと結論することができます。

しかし、やはり爆発的に集落規模が拡大し、農耕社会が県下の各地で普遍的に定着するのは、次の段階の宮ノ台式期であることを過小評価することはできません。相模川水系、鶴見川水系、三浦半島…南関東全体に斉一的な姿をもった水稲農耕社会が爆発的に拡散し、定着したというエポックは重要な事象です。宮ノ台式期の中期後葉の農耕集団の姿が非常によく分かる事例として、私も調査に係わった逗子市池子(いけご)遺跡の調査成果…特に№１－A遺跡の成果を紹介したいと思います。

この写真は河道の一部です。私がこの調査に参加していた時期なのですが、アンペラ＝ゴザや多量の木製品など有機質の遺物が大量に出土しました。とても2000年前のものとは思えない状態で発見され、ビックリしました。実はこの時は､弥生時代の遺構･遺物の存在など全く予想しておらず…それだけ完全に地中にパックされていたということですが…私たちは、ジメジメした調査区について、今後の調査を進めやすくするため排水用のトレンチを掘ろうということで、私は重機の横でボンヤリと「立ち会って」いました。重機掘削が進み、あるところで掘り上げたバケットの中から､「木」がいっぱい出てきました。確かにその木は非常にきれいでした…。重機の運転手さんが「廃材がいっぱい出てきましたよ…ゴミですね…」って…。でもよく見ると何か違う？…土器のようなモノが混ざっている？慌てて止めてもらい、深さ1m以上もある掘り下げた「その地表」に飛び降りたら、土器と木製品が大量に散乱していました。2000年の時を経て､「往時の生活そのものの姿」が、現代に再び出現した瞬間でした。2000年前の「空気を吸った気分…」を感じ、動揺と感動が入り交じった感情でした。それから写真に紹介したような精密な調査となり、続々と貴重な資料が出土しました。だから実は私の不注意で、最初に重機で壊してしまった個所が１個所あります…。

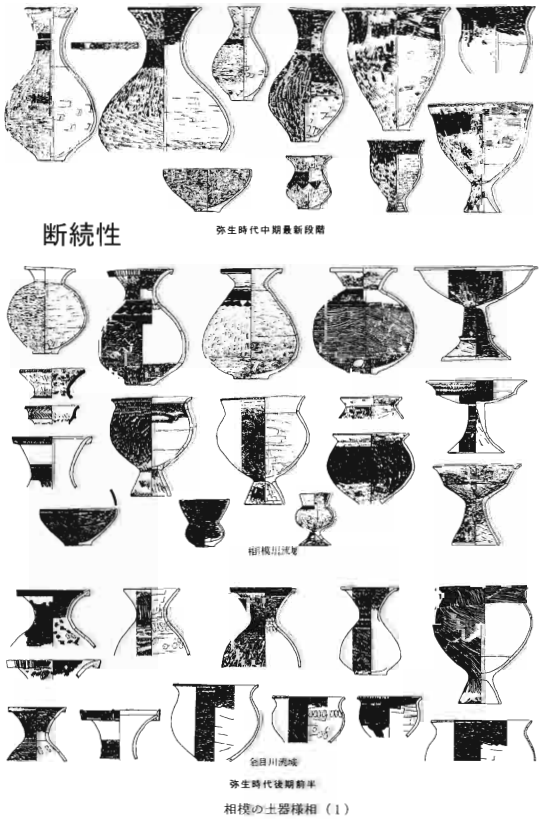
これらの木製品・骨角製品などの、出土した時の色の鮮やかさは、現代のモノと見間違える程とてもキレイです。出土すると現代の空気に触れることでどんどん「酸化」が進み、写真を撮る段階だと、ずいぶん色がくすんでしまうことは避けられません。出土した時はもっと鮮明な色調です。本当に約2000年前に完全にパックされたままであり、ホントに大昔のモノ？って…疑うほどです。このようなモノを掘り出す「ゾクゾク感」だけは、発掘をやっている人だけができる「特権」だと、つくづく思います…とは言っても実は私は｢記録保存の発掘はやはり破壊であり…｣、未だにあまり好きにはなれませんが…。保存処理をし終わった展示品も色合い・質感ともに全然違います。出土時は本当に「往時そのまま」と言って良いような状態です。旧河道と呼んでいますが､「貯木場」みたいな「未製品の木器を浸けておく所」があったのではないかという想定もされています。

南関東に斉一的に出現する宮ノ台式期の農耕文化が全て出揃って定着した姿を、池子では「目の当たり」

にすることができました。台地上の大半の遺跡では、有機質の資料は遺存しませんから、土器と石器が出土品の大半ですが、池子遺跡では他の遺跡では遺存していないモノが大量に、かつ非常に良好な状態で出土したことにより、往時の姿がよく分かりました。県下で大々的に低地遺跡の姿が出現した始まりであり、沖積地への注目度は格段に高くなりました。現在の相模川水系や足柄平野などで展開されている低地遺跡の多大な調査成果の嚆矢になったと評価できると思います。まだまだ県下の各所低地には、たくさんの遺跡や遺物が地下深く眠っていると思います。

山本暉久さんや、谷口肇さん・枡渕規彰さん・植山英史さんらの労作『池子遺跡　図録』から幾つか代表的な資料を紹介したいと思います。木製の器、機織り具、鍬やスキのような農具、またはその未製品…製作工程が解明されたりします…また骨角器の数々…ヘアピンとか釣り針、鉄剣の鹿角(ろっかく)製の把(つか)など多種多様な遺物が出土しています。先に紹介した馬場さんの『縄文ＶＳ弥生』という図録に載っている西日本の弥生時代中期の生活用品と見比べと、「ほぼ同じ」であることが良く分かりますので、両図録を比較してご覧になることをお勧めします。

一番左側のモノは「舟のオール」と報告されていますが、私は農具ではないか？って、いつも報告者の谷口さんにケチをつけていますが…（笑）。この「取っ手」のような木製品は当時現場では、ラーメン屋さんが使う「オカモチ」に似ているということで「オカモチ形」木製品と「冗談」で呼んでいたモノです。このように報告書では「用途不明」とならざるを得ない様な、何に使用したのか分からないものもたくさん出土します。実は去年、鳥取県青(あお)谷上(やかみ)寺地(じち)遺跡（殺傷痕のある遺体や、ヒトの脳の一部が見つかったことで著名…）という、やはり大量の有機質製品が出土した遺跡の資料を見て来ましたが、似たような形をした取っ手が付いている「木製楯」がありました。似ているなあ…ひょっとしたら…楯の持ち手なのかな…？とも想像しました。「扉の取っ手」なのかもしれません。それともやはり「何かの手提げ」なのかもしれません…。低湿地では、全くもってワクワクするようなモノが大量に出ます。



相模の土器様相（1）

このように弥生中期後半には、県下全域の沖積地に面した台地上に、西日本のムラと遜色のない本格的な農耕集落が大々的に出現していたことがよりリアルになりました。同時期は鶴見川の中流部にあたる港北ニュータウン周辺エリアでは、宮ノ台式期の集落群が大規模に展開しています。横浜市折本(おりもと)西原(にしはら)遺跡や大塚・歳(さい)勝土(かちど)遺跡という著名な環壕（私は「空堀(からぼり)」は「壕」の用字を、「濠(みずぼり)」と区別しています）集落を中核とするような、宮ノ台社会が展開しています。これらの遺跡は、池子遺跡と同じような有機質の文物が出土していませんが、同じような文物が揃っていたと考えられます。特にこのエリアは南関東の中でも「一大中心地のひとつ」のような評価をすることもできます。ある意味で「宮ノ台クニの中心のようなエリア」と言えるかも知れません。中里遺跡の衝撃は大きいと言えますが、やはり宮ノ台式期の「画期性」は色褪せたわけではないと思います。

かながわの弥生時代像の変化(2) 後期社会形成の具体像と古墳時代へ

弥生後期の話に移ります。後期については「結論的」に言うと、中期から直接的につながらない、後期になると「新しい集団が外部」から相模湾内を嚆矢に入ってきて、そしてこれから古墳出現期へ変動・展開が始まると考えています。このような様相が明らかになってきたのもこの20年間の研究成果です。最大の成果は綾瀬市神崎(かんざき)遺跡の発見、調査成果でしょう。つい先日、国の史跡指定となりましたけども、私が属している西相模考古研究会の人たちは、ずいぶん深く係わってきましたので、市民の方と共に大いに喜んでいます。

相模湾岸の各遺跡の弥生後期土器が、中期末の宮ノ台式土器からスムーズに繋がらないというのは20年以上前から多くの人が気付いていたことです。西相模考古学研究会の前身となった「ソネ会」という、もと大和市教委の曽根博明さんを初代会長とする会は、この問題を解決するという機運から、土器を持ち寄って見比べることから始まった研究会です。

まず図示したグラフですが…わたしは頭の構造が単純ですので、それなら報告書を頼りに竪穴数を数えてみようと思い、毎晩職場に残って…埋文センター図書室で報告書の竪穴数を数えました。ずいぶん昔のカウントした数値ですから、今はもっと数が多いはずですが…。どう見ても、単純に人口が増えていった結果とは思えない…という結論に至りました（西川1991）。実際は思考としては逆で、この推論を具体的なグラフ化するために、コツコツ数えたのが現実ですが…。ちょうど20年前に、これを拙考として発表しました。まだ資料的に確証がなく「ハッタリのよう結論」だったと我ながら思いますが…それを裏付けるような新知見がこの20年間で続々と出てきました。別に私でなくても、誰でもマジメに数を数えれば、同じ結論に至ったと思いますし…皆が予見していたことと思っています。考古学研究には「ヒラメキ」が大切ですが、その検証には、稚拙ながら…数をかぞえたり、重さや厚さを計ったり…地道な手法が「肝要」であると思っています。

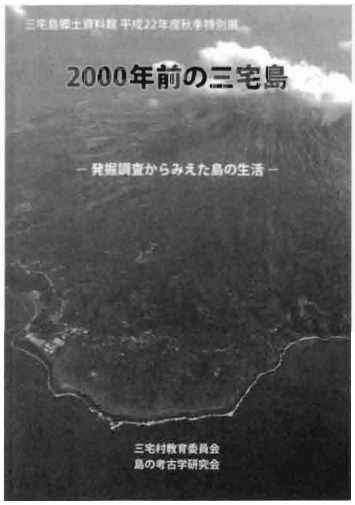
この間、先に触れた綾瀬神崎遺跡の発見が最大の研究史上のエポックだったと思います。当時、故・岡本勇さんは、綾瀬市史の関係で市南端にあります目(め)久(く)尻(じり)川(がわ)に面した丘陵尖端部に弥生土器らしい破片が拾えるということで、学術調査を実施しました。調査の結果、東海地方西部の土器が大量に出土し、地元の土器が皆無に近い状態が明らかになりました。中心となり出土品整理に努力し、分析した故・村上正吉さんの高い見識が評価されます。現地には、環壕集落が完全な形で残されているということが分かりました。出土土器の集合写真ですが、神崎遺跡のものと東三河の豊橋市高井遺跡の土器がそっくりと分かります。東三河の寄道(よりみち)式土器が、そのまま持ち込まれたと推定されました。または彼地から、ヒトそのものが来てこちらで焼いた土器であるか…(小滝・村上1992)。

最初は神崎例が「普遍的な存在」ではなく「特殊例では？」と疑問視する向きもありました。しかし次々と類例が発見され、相模川水系に普遍的であること明確になってきました。当時ちょうど、私が係わった東名拡幅に係る調査、厚木市御屋敷添(おやしきぞえ)遺跡でも「V字溝(こう)」＝環壕が発見され、やはり東三河と寸分違わない土器群が発見されました(西川編1998)。私の発掘現場に東海地方の研究者が見学に来て、見る前は疑心暗鬼だったけど…現物を目の当たりにして、向こうの土器に混ぜたら全く区別が付かないと感想を述べて帰りました。またクルマに載せて豊橋まで持って行き比較しましたが、全く同じであると共通理解に達しました。

東名高速で東京方面から下り線を走り、海老名サービスエリアを過ぎ、相模川を渡った直後に最初にさしかかる台地縁部が御屋敷添遺跡の場所です。今度クルマを運転する時、意識してみて下さい。高速道路の「40

○海蝕洞穴遺跡と三宅島ココマ遺跡～多様性に富んだ弥生像と三浦市赤坂遺跡の可能性

三浦市毘沙門洞穴遺跡



ココマ遺跡とその遺物→

（杉山他 2010 より転載）

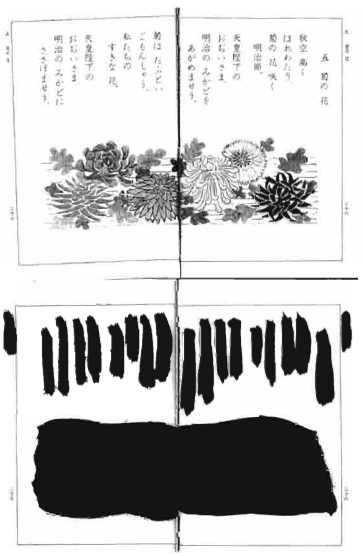
○新しい弥生時代像への展望～考古学の描く「社会の枠組み」とは？

（佐古・早川 1998 より転載）

大阪書籍：身分の高い人と道をよけている人（想像図）

帝国書院：邪馬台国の人々（想像図）

1991年の検定意見によって申請本（左）の図が差しかえられ見本本（右）のようになった



（勅使河原 2005 より転載）

（朝日新聞社 2010『マンガ日本史』01）

㎞ポスト」付近…この場所は東三河集団の故地・豊橋あたりから、高速道路では約200㎞の距離です。西へ向かいノンストップでクルマを飛ばして２時間強です。その「距離」を考えると感慨深いモノがあります。でも三河湾や浜名湖あたりから、当時の最新機術＆高速交通手段「海路・順風…」なら、われわれの現代人の「距離」感覚とは異なったかもしれません。あるヨット関係者から「１日あれば来れる…」聞いたことがあります。

その後数が増え、今日では相模川の河口から、茅ヶ崎・海老名あたり～厚木市付近に東海西部系の、東三河（愛知県東部）から浜名湖付近から天竜川以西の西遠江（静岡県西部）のあたりの人が多く集団で移住して来た様子がよりいっそう鮮明になってきています。また東三河からの移住は継続しませんが、西遠江からの移動＝伊場(いば)式土器はボリューム的にも、時間的にも継続性があるという違いも「明確化」しています。今のところ、伊場系の土器は、定着しつつ在地化してゆく過程が辿れるし、墓もたくさん見つかっていますが、寄道式土器を伴った墓が見つかっていません…不可思議な現象です。

本日は画像を示しませんが、平塚市真田(さなだ)・北金目(きたかなめ)遺跡群や、原口(はらぐち)遺跡の調査で明らかになったように、相模西部エリアでは、隣接する東海東部系の土器の移動や影響が顕著であることも明瞭になってきました。このように相模川を中心とする領域と、その西側では截然と様相の違いがはっきりとしてきました。単純に宮ノ台式期から人口が右肩上がりで増えていったのではなく、他地域集団が介在することによって相模の後期社会が形成されてきたことが明らかになってきました。ちなみに20年前に、ある勉強会でこんな質問をされました。「じゃあ西川さん、定着しムラを経営していた宮ノ台のヒトが、揃って居なくなったと思っているのですか…？」と。しかし、私はそうは思っていません。考古資料として認められるのはこういう現象であって、宮ノ台式期の人たちが「まるで蒸発」したかのように姿形もなく消えてしまったとかは考えていません。ただし「農民というのは定住し、移動しない」という「固定観念」が誤っており、再点検すべき事であると思います。むしろ移住や移動を繰り返していると考えた方がリアリティあると思います。もっと多様で、複雑な変化が巻き起こっていたと視座を換えるべきです。固定観念・既成概念が歴史観に影響し、形作られるプロセス…いろいろ考えさせられる問題です。

本日は取り上げませんが、東京湾の東西湾岸部では、宮ノ台式期から継続する集団が、東京湾岸の久ヶ原式土器集団の母胎となっているということも確実になってきました。しかし、明らかに中期の宮ノ台式土器のエリアは、後期には領域を狭めています。それが領域の「収縮・後退」なのか「集住化」の結果なのか、評価が難しいところです。いずれにしても「挑み甲斐のある問題」であり、まだまだ未解明な部分が多くあり、それを明らかにしつつ、弥生後期終末から古墳時代の幕開けを考えなくてはいけないと考えています。まだまだ解釈や理解を深め分析しなくてはいけません。本会会長の岡本孝之さんが30数年前から問いかけている「久ヶ原・弥生町式期」の評価(岡本1974)について、まだまだ議論を深めていく必要性を痛感します。

宣伝になりますが、再来週に明治大学で考古学研究会東京例会のシンポジウムがありますが、私はそこではその話を中心にお話したいと思っています。もしご興味がありましたらその研究会にお越しいただければと思います。

この船で移動する画像は、絵心のある吉野まゆみさんという方に頼んで描いてもらった外来集団の移動を描いた「想像図」です。笑い話ですけども…とある人から「オールが付いていないのに溯るっているのか？…川下りだ！」とマジメに批判されました（笑）。この絵の構想段階で、吉野さんと話し合いをしていた時、きっと準構造船であろう…と想像しましたが、オールを取り付けるピボットのカタチが学術的に私には不案内で、いくらか調べましたが、時間もなく確証も無く…船の「舳先の部分」だけを描いたということになり

芦屋の郷土資料室で会下山遺跡出土の打製石鏃の重さを測っている大学院生時代の佐原真氏（現 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）〈1960年頃〉

ましたという「言い訳」が実際のところです。ただし「描いてある内容」が示しているのは、洋上の相模湾岸から、江ノ島や大山などを目指して集団が入ってきた…。この集団はオトコばかりの「侵略的」とか、殺伐とした「征服的」…そういう性格を帯びた集団ではなかった…。老若男女・生活用品なども携えていた様子を描いたところ、乗っている人数や積載品が多くなってしまい…舳先だけには見えないことは確かです。侵略的動機に基づく、軍事的な行動ではなかったというのが、現段階の資料を「総合評価」した私の「解釈」です。相模中央部平野は、人口希薄な状態であったことは確か…と理解しています。

私のこういった見解に対して、岡本孝之さんからは「西方からきた進入してきた者は、向こうでどうであっても、こちらには侵略者だ…」と酷評されています。そのとおりだという気もします…。しかしこれは、表裏一体の「ひとつの真実」だとは思います。このような考古学事象に対する「解釈や価値観」は大切な視点です。ここでは当否は措くとして、この外来集団は新天地への展開や、新たな交流を求めた「フロンティア精神」に基づく集団行動であり、男ばかりの「戦士」が入ってきたとは思えないことは確かだと思います。土器は女性が主に作るモノ…という前提もこの考えを補強します。むしろ新たな物資交易や、物流ルートの開拓を重視すべきと思います。そして現在進行中ですが、低地遺跡の新知見の可能性がますます拡がっています。これからますますいろんな姿が明らかになってくると思います。

最後にいま三浦半島の海蝕洞穴について触れたいと思います。三浦半島、房総半島…列島各地の洞穴遺跡、ひいては遠く北の果て、北海道積丹半島の付け根、石狩湾の余市町フゴッペ洞窟など、列島各地の事例も繋がりがあるのでは？と注目しています。

関連して三浦市赤坂遺跡…古くから知られた三浦半島の大遺跡です…これから国指定地が追加され、整備され活用されることを期待していますが…。赤坂遺跡・海蝕洞穴などは、貴重な遺跡であるという認識はあるとしても、長年あまり注目されないままでしたが、これから新たな切り口での調査・研究の可能性が出てきたと思っています。

契機となったのは、三宅島ココマ遺跡の調査成果（杉山他2010）です。東大の杉山浩平さん…この方は県内遺跡の調査研究でご高名な小田原の杉山博久さんのご子息ですが…をはじめとした何人かの若手研究者が進めているのが、三宅島南端のココマ遺跡の調査です。わずか１m3程度の発掘調査ですが…貝輪の素材となるオオツタノハの未製品などが大量に発見されました。もっと広く掘ったらいったいどれほどの遺物が包蔵されているのか…と思うと驚きです。まず伊豆諸島南半部で原材料が入手できること、そしてそれを加工した遺跡が確認されたことが注目されます。また、小破片ですが、弥生土器片が伴出していて、池谷信之さんらの分析により、三浦半島の土器ではないか？と推定されていることが重要です。三浦半島の南端から、三宅島へ荒波を超えて果敢に人が渡航し、そしてオオツタノハを採集・加工していた…それが各地に流通しているというプロセスが明確になります。

こういったオオツタノハといった「腕輪に用いる貴重な貝」の採集・加工・生産・流通に三浦半島の人々が係わっていた可能性が高く、海蝕洞穴の機能も再考しなくてはいけません。三浦半島のいくつかの海蝕洞穴では多くのオオツタノハ製貝輪が出土していましたが、今まではあまり注目されていませんでしたが、海蝕洞窟を利用していた人々は、単に「海人（あま）」と…特殊な風俗を持っていたとか…というレベルの話し

ではないということです。この間、彼岸の安房では古墳中期の有力墳と遜色のない稀少な甲冑を「舟葬(ふなそう)」に用いている事例が明らかになりつつありました。私も三浦半島の海蝕洞窟もこういう視点で再考する必要から分析を進めていましたが、安房とは異なった利用のされ方であることがより一層鮮明になってきました。海蝕洞窟じたいは、縄文～古代と長年にわたり利用されていますが、オオツタノハの加工・集積はどうも弥生時代後半期になって、急に活性化するようです。ココマ遺跡出土の弥生土器は小破片でかつ点数も多くはないので、まだ時期など不

【図版4頁　差込】確定な領域が残っていますが、私は後期後半ではないか？…と推定しています。これからの研究進展が期待されますし、たいへん大きな可能性を持っていると思います。

これは現在進行形の話しで、未解明な領域が多く残されていますが…本日は何を強調したいかと言うと、私たちは水稲農耕の波及とか古墳の成立とか、相模湾岸から「西ばかり見ていました」けれども、そういう文脈での思考を至急改める必要を痛感しています。とうぜん西からのモノの流れや情報の「代償」として、東から発信されているモノや情報もあるわけで…わたし自身、サイードの主張する『オリエタリズム』(邦訳1986)の影響もあり、西日本中心史観への批判を繰り返してきましたが、まだまだ不十分であったと猛省しています。今日は時間も参りましたので、鉄や玉･ガラスなどの流通など十分に言及できませんでしたが…日本海から中部高地を経て色々なものが「行き来している…」という視点も注目しています。関西ばかり見ていては、「豊かな列島史を再現」できない…と思います。

まとめ

このように「弥生時代像」は20年間に大きく変化しました。また多くの新知見も得られました。今後は複眼的な視点から、列島の多様性を解明しなくてはならないでしょう。

この画像は佐古和恵さん・早川和子さんが、1998年にお出しになった概説的な『戦争がはじまった』という「絵本」の表紙です。私は『日本史』を授業で教える側の立場ですから､こういう画像から醸し出される「イメージ」と、多くのヒトの抱く歴史観との関係に大いに興味を持っています。どう見ても「弥生時代って…受難の時代」っていうイメージが伝わって来ます。しかし、本日の前半の説明で、弥生時代とは「殺伐とした時代」だったという時代観とは、ずっと前からそうであったのではなく、むしろ「定着」したのはこの20数年のことであり、それは戦後すぐの弥生時代観とは、ずいぶんと違うモノに変わってきたものと理解できたと思います。

戦前は、それはそれでまた興味深い「民族形成論」があったわけですが…。各々の時代の時代像は、新資料によって次々と塗り替えられるのは当然として、それは別次元にその「時代のもつ特有の世情」に影響されて変動している可能性を意識しないで、無意識のうちに「画一的、かつ一面的な歴史観」でニッポン列島全体像を規定する危険性を強調したいと思います。

特に東日本＝列島東部については、かつては「後進性」ばかり強調され、西からの文明の波及という「枠組み」で語られていましたが、新資料の増加により、まったく異なったストーリーが描けるようになりつつあると思います。また西日本についても「戦争の時代」という「ある側面」のみを強調することは、危険だと思っています。有名な吉野ヶ里遺跡の「首なし人骨」につきましても､本当に「戦争で頸狩りされた犠牲者」なのか？このような視点ばかりが強調され、教育現場で無批判に教えるということに疑問を感じています。

確かに佐原さんの研究から始まった学史を振り返れば、戦死者、殺戮によって死んだと思われる人は、列

島西部でかなり多く実在します。これは佐原さんが若い頃、芦屋市会下山遺跡の石鏃の重さを量っている写真です。こんな地道な努力の結果が『紫雲(しゅう)出(で)』という研究報告に結実し、それに導かれた言説＝弥生時代になると「人殺しの道具＝武器」が出現する。狩猟具ではなく「凶器」が出てくるのだと…。しかしこのような言説が強調されるようなになったのは、どうも20年くらい前ぐらいの様な気がしています。既に見たように、この20年は「激動・弱肉強食・自己責任・クローバル社会…」という数々の価値観が世の中に主流となった時代です。妙にマッチしていると思いませんか？

最初の話に戻ります。この画像は「玉音放送」により皇居前でうちひしがれる「皇民」の写真です。しかし私たちの父祖は、このドン底の焼け野原から、稔り豊かな「瑞穂の国」のイメージのもと、高度成長という奇跡的な復興を達成しました。まさに「平和を希求」する「瑞穂の国の民族性」という「自画像」と絶妙にマッチしています。この中には焼け野原から立ち直る、平和な国・ニッポンだというメッセージが込められていたと…私は思っています。佐原さんはある時、このような「日本像」が常識的に定着している真っ最中、「戦争の考古学」を提示するのに非常に手を焼いたと言っていました。本日の私の話も、この時の佐原さんの「啓示」ともいうべきヒントに基づいています。しかし20年ぐらい前からの不安定な社会情勢や、将来への不安感…今度は弥生時代像をこういった「戦乱･殺伐…」という側面ばっかりを強調していないか気かがりです。

確かに「戦争の時代」としての「弥生時代像」とは重要な視点です。大量殺戮（ジェノサイド）、排他的な土地占領（コロニアリズム）、競争社会…など「ヒューマニズムに反する非人道的思考」ものの多くは、弥生時代…というか、「弥生ビト」が大陸・半島から持ち込んだ「犯人」である可能性が高いと思います。では縄文人や擦文人、アイヌが「平和な良いヒトばかり」だったとも思えませんが…。そのような視点で見がちですが…。

しかし20世紀末になって…末世観というか…現代の不安な世情が「弥生時代像の一側面ばかり」に光を当てているのではないのだろうか…。それが現代の不安感と相乗効果を発揮していないだろうか…？と、自己点検する必要を感じます。

それは考古学や古代史がもつ「恐ろしさや危険性」を想念しているからですが古代史や考古学というのは、大むかしの「未知の世界」と「ロマンに満ちあふれた世界」…って考えている方が多いと思います。むしろ私は考古学や古代史こそ、現代社会と限りなく「直結した研究領域」であると考えています。土地開発と埋蔵文化財保護の対峙という「現世の経済＝金銭」に係わる事柄も無視できませんが、それ以上に「よく分からない大むかし」だからこそ、「都合のよい価値観」が横行・暴走する危険性も孕んでいます。しかも、それがいかにも「学術的な装い」をまとって、流布されるところに危険なところだと思います。

例えば「僅か60年前の日本」は、教育を含め「間違った方向に進んでいた…？」とされ、教科書をこのように徹底的にスミ塗りをして「自己否定」した「屈辱的な過去」は、歴然たる事実です。今のわれわれが見るとなぜ「菊の花」というだけでダメなんだ…って思いますが、「皇国史観」を連想させるということのようです…。しかし、威圧的に「強要された」という言説にも賛同できません。私たちはこの60年前に形成された新たな「日本人観」≒弥生時代観と、この20年間に変化してきた弥生時代像…そしてこれからの弥生時代観を創造していくうえで、このような変遷を冷徹に見る「まなざし」を忘れてはいけないと思います。

最後に歴史教育史について詳しく研究されている勅使河原さんの著作(2005)から転載した画像をお見せします。ちょっと前の教科書検定ですが、文部省（当時）の検定というのはずいぶんと子細な事柄まで注意を払っていることがよく分かります。皆さんは、左と右の絵のどこが違うのか、分かりますか？よ～く見ない

と違いは分かりません…これは『魏志倭人伝』に「下戸、大人と道路に逢へば、逡巡して草に入り…」という「階層社会が存在していた」という記述をイメージしているのでしょうから、「ある意味では学術的」であり、法外な「夢想ごと」ではありませんが…。こんな微細な部分まで「検定」というのはチェックしていると考えると…私たち考古学をやっている者は、ある一面的な見方に基づき、軽はずみな歴史観を牽引したり、自説に都合よく資料解釈を符合させたり…することが無いように慎重になるべきと思います。特に初源的な民族国家の形成期と関わりの深い弥生～古墳時代像を考える時には、その危険性を考えなければいけません。この自説に都合の良いように特定の資料を「解釈する」という傾向が、西日本の当該期研究者に顕著…と思うのは僻み根性でしょうか？

今の歴史教育というのは、指導要領に拠れば、『人物を中心』として教える傾向にシフトしつつあり、偉人が社会を動かす原動力であり、歴史を動かしていたという志向性を持っています。このことに対する是非はともかく、このような「事実」にほとんどの考古学研究者が無関心ですし、無自覚です。「ゆとり」の名を借りた以前の改訂で、義務教育の歴史教科書に「縄文時代」の記述が無くなったことを、本県の教員・鈒持(けんもつ)輝久さんが日本考古学協会総会で「問題視」するまで、多くの考古学研究者が知らなかったのが現実です。不肖、高校教員のひとりである私すら「知らなかった一人」であった「恥」を告白します。

これは私が自分の子どものために買った、朝日新聞社刊の歴史教育マンガの『ヤマトタケル』です。あくまで『神話』として取り上げていますが…神話学習そのものは、自らの民族性アイデンティティを自覚するうえで、たいへん大切だと思っていますが…こういった「東伐ヒーロー」のイメージが「白紙状態」の生徒・児童に対して、繰り返し「刷り込み」されたら、どうなるか？深く考えるべき事柄です。本日、お話した新たな列島史＝多様で豊穣な弥生時代像が見えてきた…という地平からの眺めとは、ずいぶん違う姿が結像されているような気がしてなりません。現代社会像が、大むかしの歴史像を勝手に作り変えている可能性、逆に古代の史料の偏った一方的な価値観に基づく歴史像が現代社会を規定している可能性も否定できません。ちょっと厳しい言い方ですけども、「捏造」されているのは「石器だけではない！…」と思っています。

最後に、今日は一般の市民の方も多くいらっしゃいますが、文化財は一般市民である「自分たちのもの」であり、そういう意味で大切なモノと「強く自覚して欲しい」と思っています。また文化財保護に係る者はこの点をもっと「意識的に発信」していかないとダメだと思います。文化財保護の味方は、遺跡や歴史が好きな人だけではなく、それ以外の市民の国民・市民の方がひとりでも多く「強い味方」になって欲しいと思います。これは何度も出てきた、今は亡き佐原さんも、繰り返し力説していた点です。

ちなみに世界各国の博物館・美術館では、「フラッシュ禁止、個人使用の範囲で撮影ＯＫ…」で「何でもかんでも不可」というのは少ないそうです。わが国の大半のこのような学習施設はどうでしょうか？膨大な「血税」を投入したハコモノであるのに、「お上(かみ)が見せてあげているという意識」からか？…それとも「図録の売れ行きが落ちる」からか？…きっと何も考えていないから…だと思いますが、「撮影不可！」なんて当たり前、堂々とまかり通っています。わたしはフラッシュを焚くと史料(彩色資料・木簡など)が劣化するとか、他の参観者に迷惑をかけないマナーを心得るとか…個人所蔵で所有者の許諾が必要とかの場合を除き…原則「撮影可…」として、「マナーや留意事項を明示・指導」したうえで、むしろ「学習の一助として推奨すべき」とすら思っています。

デジタルカメラや「ケータイ」がこれだけ普及した現在、博物館を自ら訪れる親子連れや生徒に「考古学や文化財保護の味方」になってもらうためには、「どんどん撮影して、自由研究など…がんばって学習して下さい！」と勧めるべきです。いま文科省が声を大きくし、これからの人材に求められている「自ら考え、

生きるチカラを培う教育」を推進するためにも…。また国や地方自治体は「埋蔵文化財は国民共有の財産」だって公言しているのだし、そのために記録保存の「調査」には膨大な税金が投入されているのですから…。黙っていないで、是非とも「文化財は私たちのモノだ！」って…どんとん発言をした方が良いと思います。私は各所の「遺跡展」とかを見に行くと、毎度まいど「何で出土品の写真を撮ってはいけないのですか…！？説明できますか…？」と「見張りのお嬢さん」に質問する「イヤミなオヤジ」を実践しています。アンケート用紙にも書きますが、いっこうに改善される向きはありません。憂慮すべき、ゆゆしき事態です…。

文化課財保護に対する「風当たり」が強くなる昨今、これからも、ひとりでも多くの「考古学と現代の関係」を論じ、「遺跡の大切さ」を説き、「考古学の味方」を増やす地道な努力を続けたいと思います。これが本日の話しの一番大切な「結論」です。

【補遺】本文は当日の口頭発表した内容に加筆して、論旨の変更のない範囲で書き直したものである。

また文中に考古学研究会東京例会シンポジウムの件を取り上げているが、県考古学会発表会が行われた3月6日(日)の翌週3月11日（金）に東日本大震災が起こり、予定されていた3月19日(土)のシンポジウムは中止となり、実際は2011年10月8日（土）に『シンポジウム 東日本からみた時代移行期の考古学』として開催された。西川2011参照)。

なお冒頭で、考古学が「現代社会と連動・リンクしているのではないか？」という指摘を私見による「仮説」としているが、考古学研究やその学説が、常に現代社会の変化と無縁では存在し得ないという指摘は、既に文中の佐原 真や田中 琢(1986)・都出比呂志(1991)らにより繰り返し指摘され、警鐘が鳴らされているところである。筆者の指摘はこれらの先学の高説に導かれ「激動の弥生時代像」への変化とは、現代社会の「悲観的や末世観や不安」にも似た「時代像」とリンクしている可能性を「仮説」として指摘したに過ぎない。その点に留意して、今後の列島史像を展望・創造してゆく必要性を強調したい。

【引用・参考文献】

秋山浩三2006「弥生実年代と都市論のゆくえ・池上曽根遺跡」シリーズ「遺跡を学ぶ」023 新泉社

伊丹 徹・大島慎一・立花 実 編2002『弥生後期のヒトの移動～相模湾から考える～』考古学リーダー１ 六一書房

岡本孝之1974「東日本先史時代末期の評価 ①～⑤」『月刊 考古学ジャーナル』№97 ～ 102 ニューサイエンス社

河合英夫2008「中里遺跡の衝撃－南関東農耕形成期の集落－」『考古学講座 新神奈川・新弥生論』神奈川県考古学会

小滝 勉・村上吉正1992「神崎遺跡発掘調査報告書」『綾瀬市埋蔵文化財調査報告』２ 綾瀬市教育委員会

佐古和枝・早川和子(画) 1998『戦争がはじまった』考古学はたのしい３ 小学館

佐原 眞1987『日本人の誕生』大系 日本の歴史１ 小学館

佐原 真 編 1996『倭国乱る』朝日新聞社

杉山浩平 他2010『2000年前の三宅島－発掘調査からみえた島の生活－』三宅村教育委員会・島の考古学研究会

立花 実2002「土器から見る古墳時代の始まり－秋葉山古墳群をめぐる土器と墓－」『シンボジウム 墳丘墓から古墳へ～秋葉山古墳群の築造～発表要旨』海老名市教育委員会

立花 実2010「神奈川県西部地域における弥生時代後期の土器様相と中部高地型櫛描文土器」『中部高地南

部における櫛描文土器の拡散』資料集 山梨県考古学協会
田中　琢1986「総論－現代社会のなかの日本考古学－」『岩波講座 日本考古学』7 現代と考古学 岩波書店
谷口　肇2007「関東南西部における縄文・弥生期の一様相－神奈川県大井町中屋敷遺跡の調査成果－」『月刊文化財』№527　第一法規
勅使河原 彰2005『歴史教科書は古代をどう描いてきたか』新日本出版社
都出比呂志1991「現代社会と弥生文化」『弥生文化－日本文化の源流をさぐる－』大阪府立弥生文化博物館
戸田哲也1999「小田原市中里遺跡第Ⅰ地点－関東最古の弥生農耕集落－」『第23回 神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会
西川修一1991「相模後期弥生社会の研究」『古代探叢』Ⅲ 早稲田大学出版部
西川修一 編1998「御屋敷添遺跡 第３地点(№１)」『かながわ考古学財団調査報告』33
西川修一2011「弥生時代から古墳時代へ 南関東からみた列島史－フロンティア拡大の視点から－」『シンポジウム 東日本からみた時代移行期の考古学 予稿集』考古学研究会東京例会
馬場悠男 編2005『特別展 縄文ＶＳ弥生』国立科学博物館
春成秀爾2003『考古学者はどう生きたか－考古学と社会－』学生社
春成秀爾2006『考古学はどう検証したか－考古学・人類学と社会－』学生社
春成秀爾・今村峯雄 編2004『弥生時代の実年代―炭素14年代をめぐって―』学生社
広瀬和雄2003『日本考古学の通説を疑う』新書Ｙ099 洋泉社
広瀬和雄 他 1996『弥生の環濠都市と巨大神殿』池上曽根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会
広瀬和雄 編 2007『弥生時代はどう変わるか　炭素14年代と新しい古代像を求めて 歴博フォーラム』学生社
森岡秀人1992「高地性集落と芦屋」『なりひら 芦屋市立美術博物館だより』vol.８ 芦屋市立美術博物館
山本暉久 他 1999『池子遺跡群』総集編　(財)かながわ考古学財団
和月伸宏(画)・氷川まりね(シナリオ)・河合敦＆山口正(監修) 2010『ヤマトタケル 天翔る英雄伝説』新週刊マンガ日本史01　50人の人物で時代を読み解く（朝日ジュニアシリーズ）朝日新聞出版
エドワード・Ｗ・サイード1986『オリエンタリズム』(板垣雄三・杉田英明 監修、今沢紀子　訳) 平凡社
大林組プロジェクトチーム 編2002『巨大建物を復元する－よみがえる古代大建設時代－』東京書籍
西相模考古学研究会 編 2001『シンポジウム 弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～資料集』西相模考古学研究会

古墳時代の動向

柏木　善治

ご紹介に預かりました柏木です。若手というには段々齢を取ってきたのですけれども、最近のですね、古墳時代の状況について、少しお話をさせていただければと思います。古墳時代という時代なのですけれども、皆さんどうでしょうか？この20年、まずひとつ思い浮かぶことがあるとしたらどのようなことがありますかね？この資料の方のですね、表紙にも長柄桜山古墳の1号墳が掲載されておりますけれども、これもひとつ、この10年前後の中で、重要な発見のひとつであったかと思います。これを編集されたのは、多分井出さんだと思うのですけれども、井出さんの頭の中で、古墳時代では多分長柄桜山古墳が一番だったのかな、という風に思うところであります。古墳時代の方、資料は17頁からになっております。平成22年度活字で5 ～ 6頁書いておりますけれども、そこは後程ご確認いただければと思います。今回発表するに当たりまして、資料の抽出という観点ではですね、23頁に表が掲載してありますけれども、こちら日本考古学協会の年報の方に神奈川県の動向としてですね、クローズアップされた遺跡を羅列しております（本書83頁）。こんなところが中心になって古墳時代の研究が進んできたのかな、というところでありますので、まずはその辺り、挙げられているものを中心として、お話していければと思います。

この、現在、画面に映っておりますのは、上が秦野市の桜土手古墳群１号墳。移築・復元されているものです。現在もですね、このような形で古墳の全体像が把握できるもの、神奈川県内ではなかなかなくてですね、いつも県外の方にご紹介するには桜土手をまずご紹介して、「神奈川県の横穴式石室というのはこのような構造をしております」というようなお話をさせていただくものです。1989年に報告書が刊行されてからですね、公園として整備されてから20年以上が経過しているかと思うのですけれども、発掘の当時の状況、新聞でもかなり報道されていたようでありますが、当時、私などまだ子供でしたので、その状況を見ることはできなかったのですけれども、こういう形でですね、残されていく、というのが、ひとつ県内でも大きな成果であるということが言えるかと思います。もうひとつ、右下にですね、南足柄市の黄金塚古墳というところから出土しております、環頭大刀ですね、単龍のもの、写真を挙げております。こちらは埋もれた資料としてですね、発見されてから随分時間が経過してから私達衆人の目に触れることになった訳でありますけれども、平塚市博物館の方のですね、『相武国の古墳』という、明石さんがやられたシンポジウム等で初めて資料化されて、今では貴重なですね、神奈川県の後期古墳を考える上では重要な飾り大刀のひとつ、という扱いになっております。こういう、現在残っているというのが重要なポイントとしてですね、挙げられるかと思います。これら遺跡の保存・活用が図られ、シンポジウム等で議論されていく中で、今日現在から10年ほど前ですね、21世紀になる頃に長柄桜山古墳群というのが発見されました。発見当初は「長柄桜山1号墳」・「長柄桜山第2号墳」という風に、個別呼称しておりましたけれども、国史跡になるに当たっての検討から、「長柄桜山古墳群」という名称へ変わっております。2002年に国指定史跡になりまして、県下最大級の前方後円墳であるということが、範囲確認調査等から分かっておりまして、現在は史跡整備に向けた発掘調査が、市町村、葉山町とですね、逗子市を中心に進められているところであります。その、大きな成果が挙げられた町と市の調査でありますけれども、葉山町の山口さんの方で作成された絵をちょっとお借りしまして、この古墳がどういうものであったのか、というのをちょっとお話したいと思いますけれども、ひとつには特徴として、後円部の方が三段に築造されている、というのが分かりました。一段目のテラスが二つあります。で、

墳頂部がありますので、三段という形。それから、前方部が二段築成である。二段の造り方をしているというところであります。もうひとつは、埴輪がですね、墳頂部に円筒などの埴輪の一部がですね、まだ現地に遺存している形で、発掘調査によって判明した例、これも非常に貴重な発見例でありますけれども、これを繋ぎ合わせて行くと、墳頂の後円部、一周ですね、円筒等の埴輪列により囲繞していたという状況が、発掘調査から分かっています。あと、1号墳は存在しておりませんけれども、2号墳の方では、葺き石を葺いていたということが分かっておりまして、1号墳の方ではですね、画面の左側、こちらの方が非常に丸みを持っておりまして、右側の方はですね、その相対・相似形にならないというですね、ちょっと直線的な後円部になっている、というような結果も出ております。これは、画面の左側、西側の方に逗子の平野が広がっておりますので、そちらからの眺望を重視した造りとなっているということが言えようかと思います。それは、少し離れた森将軍塚古墳とかですね、長野県にありますけれども、そのような古墳とも同義的な意味合いが出てくるのかなというところであります。このような古墳が、100mを測るような古墳がですね、相模の地に突如出現したというような印象を受けるようなものでありまして、築造の背景にはですね、在地の勢力の活性化により生じたという内在的な要因よりはですね、外からの要因としての外在的要因というのが、ひとつ考えられるのかな、というところであります。

もうひとつ、国の史跡に21世紀になってからなったものとして、秋葉山古墳群が挙げられます。こちらも、12次ですね、12回以上の発掘調査が確か行われていたかと思います。で、徐々に全体像が判明して来たところでありまして、第3号墳に関しましては、51mという規模のですね、帆立貝のような形をした、前方後円墳のようなものであるという風に解釈されております。この全体がですね、出てきた土器などから考えますと弥生時代後期後半とでもいうような時代になっておりまして、神奈川の古墳の出現を考えていく上で、今でもキーポイントとなっている古墳であるということが言えます。この秋葉山古墳群に関しましては、史跡整備に当たりまして、海老名市さんなどを中心として、一応シンポジウムなど多数開かれておりますので、その結果が今でも神奈川県の古墳の出現を考えて行く上での理解として生きているところであります。2号墳はですね、前方後円形が三つ並んでおりますけれども、2号墳の方からは火を焚いたような痕跡も発見されておりまして、その炭化物の年代測定、自然科学的な年代測定を行いましたところ、250年～325年というような年代が出ております。報告書では確か、3号墳に続いて2号墳が築かれるというようなことが考えられておりまして、化学的な年代がどこまで通用するかは、先ほどの西川さんのお話のように不透明な部分もございますけれども、この2号墳の位置付けをどう考えるかというのが、現在のところ、研究者の間では頭を悩ませているところだと思っております。この2号墳からは円筒形をした土製品が出ておりまして、これを古墳出現期の特殊器台という風に位置付けるか、それとも、長胴形の壺形埴輪と同義的なものとして捉えるか、その両者、これから追究して行かなければいけないところだという風に考えております。

この秋葉山古墳と、位置的には非常に近いところで、相模川の河川沿いで、社家宇治山遺跡というのが発掘調査されました。こちら現場を掘っている間はですね、毎年のように現地見学会をやった遺跡でありますので、皆さんも足を運ばれた方、いらっしゃるかと思いますけれども、こちらではですね、非常に大規模な所謂方形周溝墓が複数発見されております。通算では50基以上という風に言われておりまして、県内でも一番の規模を誇るような数が確認されている、という遺跡になります。そのうちのひとつからはですね、主体部と思しき中央からガラス玉が出ておりますので、その主体部からガラス玉が出る例としても非常に希少な例でありますことから、この方形周溝墓群を考えて行く上でも非常に興味深いところであります。あと、秋葉山と近い場所での発見ということで、この方形周溝墓とともに発見されている同時代の竪穴住居ですね、

集落域の様相もありますので、台地上の秋葉山古墳群と、低地における大集落となる社家宇治山遺跡、これら両者の関係を考えて行く必要もある、というところであります。

この3月にですね、社家宇治山遺跡に関しまして報告書が刊行される予定となっておりますので、その辺の状況をこれから、その資料を活用してですね、考えて行けたら、という風に思っています。

あと古墳前期、引き続いてですね、塚越古墳というのが平塚市で発掘調査されております。これは新聞報道等でも行われましたけれども、前方後方墳という墳形が確定したということで、それまで前方後円墳という風に考えられていたものが、「四角い世界」の墳墓であるというのが分かった、というものであります。非常に、大きさもですね、周溝を含めて58mということで、この時期、相模では最大規模ということが、前方後方墳ではですね、最大規模ということが言えるものであります。この塚越古墳が存在する台地上には真田北金目遺跡というのが展開しております。こちらも、前方後方形の周溝墓を備えるような台地上の大集落でありますので、この台地上での検討に終始しないでですね、東の方に近在している、三角縁神獣鏡を出土した真土大塚山古墳なども同じ領域の集落・墳墓域ということで考えて行くことによって、この当時の相模の歴史が見えてくるという風に考えているものであります。

小田原城八幡山遺構群ということで、こちら小田原市、足柄平野でありますけれども、この小田原城の八幡山古郭の調査によってですね、その堀の覆土から壺形の埴輪と思しき破片が発見されています。こちらは小田原市さんの方でシンポジウム等も行ってですね、足柄平野の出現期古墳に関しての検討がだいぶ進んできたところではありますけれども、壺形埴輪とそれを伴う墳丘構造など、まだ解明しなくてはいけないところが多々ある、というものであります。現在の小田原高校はこちら、藤原平の方に建て替えが済んでおりまして、この元プールがあった敷地なのですけれども、この南東側にですね、小高い丘のような地形が残っておりまして、物見櫓としての機能が考えられていたのでありますけれども、この高まりが古墳である可能性を帯びてきたということになります。それは、この緑の部分、堀の中からですね、堀の上層の方からこの壺形埴輪が出てきたということでありまして、墳頂で使用されていたものが転げ落ちたのではないかという解釈ができることから、そういう風に考えられております。壺形埴輪が出土した古墳に関してはですね、長柄桜山の報告書に集成が一応載っておりますけれども、この壺形埴輪、相模国では前方後円墳から出てくることが、現在のところは通例であります。関東に目を広げれば、円墳から出ている例などもありますので、壺形＝前方後円とはなりませんけれども、周辺の近在している出土事例などを考えると、前方後円墳というものも検討の一俎上に上がってくるのかな、というところであります。足柄平野は、今までですね、前期古墳・前方後方形周溝墓は複数発見されておりましたけれども、このような高まりも、前方後円墳というものが存在していたとするとですね、神奈川県の西半分の世界観をちょっと考え直す必要もあるのかな、というところであります。

古墳時代中期になります。中期はですね、中野桜野遺跡というのが、大々的に発掘調査した事例として取り上げることができます。先ほど、西川さんの方のお話でも図が出て、位置関係ですね、一部示されましたけれども、相模川沿いの自然堤防上から発見された遺跡であります。竪穴住居は48軒ですね、一応発見されておりまして、このうちの幾つかは、この袖が非常に長い、古墳時代中期のカマド導入期の特徴を示すようなカマド構造として確認されております。この竪穴住居から出てきました須恵器の焼き物が、このようなものになります。遺跡全体、報告書ではかなり緻密に土器等の編年等も行われておりまして、昨今の報告書の中では中期の土器編年を取り扱ったものとしては、こちら活用していくには充分足り得る報告書になっておりまして、その須恵器ですね、出現当初の須恵器の消費地である神奈川のですね、導入を考えるに当たりま

しても甕からハソウ、それから坏へ、というような導入の流れも見えてくるところであります。あとこの写真の方の集積した状態ですけれども、こちら河川沿いの祭祀痕跡として捉えられるものでありまして、土坑の中から夥しい数の須恵器・土師器が出ている、というものであります。これまでもですね、小田原市久野の下馬下遺跡や平塚の沢狭遺跡などで河川沿いの祭祀痕跡というのは発見されておりまして、資料上の蓄積がこの例も含めて徐々に増えてきているところでありますので、器種構成・数量対比などを行うことにからですね、中央主導で地方で運用されていたという祭祀の具体像が今後解明されることが期待されるものであります。

中期の事例は少ないのですけれども、次に後期に行きまして、横須賀市の、こちら大津古墳群というものであります。前方後円墳が1基と円墳が2基ということ、都合3基の古墳が発掘調査されて、内容が分かったものであります。こちらは1号墳が前方後円墳ということで、発掘の結果判明いたしまして、その主体部がですね、横穴式石室である、ということまで分かりました。三浦半島の東京湾側というのは今まで横穴式石室は発見されていなかったのですけれども、こちらの前方後円墳で採用されているというですね、興味深い結果となっております。墳丘にはですね、馬や家、円筒などの埴輪が使用されていたということが出土資料から分かっておりまして、鉤状の把手が付くですね、提瓶なども儀礼の供膳具として使われていたということがあります。この前方後円墳ですけれども、古墳時代後期の中でも6世紀後半から7世紀初頭までの間に、非常に数が多く発見されているものでありまして、7世紀初頭以降、短期間で築造、また終了してですね、造られなくなっていくという世界が広がる訳でありますけれども、その状況を解明していく上ではですね、関東全体でそういう状況が見えて参りますので、列島的なですね、視点での見解が必要になってくるのではないかというところであります。

二子塚古墳、こちらは秦野市の古墳でありますけれども、県の史跡として秦野市さんの方で史跡整備を目標としてですね、発掘調査が行われました。中世の段階でかなり改変されている状況も併せて結果として挙げられておりますけれども、調査の結果からはですね、横穴式石室を後円部に内包する6世紀後半代の前方後円墳であろうということが考えられます。その石室の中からですね、この間の県の遺跡発表会でも報告があったかとも思いますけれども、銀装の圭頭大刀が出ておりまして、こちら、圭頭部分はちょっと映っておりませんけれども、鞘の口のところに飾り金具なども付いております。打出しにはですね、装飾が、写真からはちょっと分かりませんけれども、されておりまして、銀装の圭頭大刀で鞘口・鞘尻などにこのような飾りが付けられるものは全国でも例がないものであります。秦野の二子塚での出土が、初の事例ということになります。銀装圭頭大刀はですね、本数的にはそれほど多くないのですけれども、関東地方では、6世紀後半の首長墓となりうるような前方後円墳から多くはっけんされておりますので、位置付けとしては二子塚古墳もですね、そのようなランクの高いものに、副葬品から見たところではなってくるのかな、というところです。

あと、前方後円墳はですね、昨今非常に多く発見されているという状況もありまして、こちら、寒川町の宮山中里遺跡であります。河川沿い、川が映っておりませんけれども写真の下の方が川になっておりまして、その自然堤防上から南北2㎞以上にも亘ってですね、円墳と前方後円墳で構成された古墳群が発見されています。この古墳群は、現況地形では高まりが全く分からないというものでありましたので、掘ってみて初めて、ここに古墳が存在していることが判明しています。その前方後円墳が中に含まれた古墳群として、また新たな事例が追加されることとなった訳ですが、破片としてですね、周溝から装飾器台なども出ておりますので、そのような発見例も神奈川県ではここしかないというものになろうかと思いますので、発掘がまだ、周辺継

続しておりますので、全体像が判明した時に、また相模川流域のですね、前方後円墳の展開等も考え直していく必要があろうかと思います。

あと、北門古墳群です。こちらは小規模な群構成からなる古墳群でありますけれども、泥岩の切石を用いた横穴式石室が使われておりまして、この盟主となる墳丘からですね、時代を追って石室が小さくなる、という状況が分かっております。6世紀の後半から終末にかけて　埴輪が使われますけれども、それ以降の墳丘では、7世紀以降、もう　埴輪が使われないという状況が、改めてここで分かって参りまして、石室もですね、一番小さなものは長軸2m程度しかありませんので、最終的には横穴式石室も単葬墓へと代わって行くという流れが、この古墳からも見えてくるところであります。

横穴墓も数多く調査されておりますが、こちら中依知遺跡ではですね、厚木市の例ですけれども、遺体が伸展葬で並列された状態が非常に良く残った古墳であります。この埋葬の痕跡とですね、土器を用いた儀礼、こういうものを併行して考えて行くことによって、これまで古墳の有り、無し等でしか判断してこなかった古墳時代像というものを、その人の、遺物が伝えるようなですね、埋葬というところからも紐解いて行く、非常に貴重な事例の追加、ということが言えようかと思います。

あと、寒川町の岡田西河内遺跡ですけれども、こちら、切石の横穴式石室が発見されています。それまで赤星先生の研究ノート等で、茅ヶ崎駅の構内にある石神古墳というのが硬質な切石を用いた古墳ということで評価されておりましたけれども、それに次ぐ例として、その在地では出現それまでしていなかった切石製による、やや大振りな横穴式石室が発見されたということになります。南武蔵となる横浜・川崎ではですね、切石の石室、非常に多く築造されておりますけれども、相模への展開というか、共通的な要素が相模でも発見できた例として、非常に特徴的であります。この後の釜口古墳ですね、そういうものへの連続性という系譜がどのようになって行くかというところを考えて行くのが、ひとつ課題になるかな、というところであります。

横須賀市のかろうと山古墳ですけれども、こちら古くから知られていたものでありますが、市史の編纂などのためにですね、学術調査がされております。新たな資料は、副葬品等はございませんけれども、ひとつ特徴的なのは、鉄地に金が貼り付けられたですね、所謂鏡、サルコというようなですね、ものが出ておりまして、遠くは岡山から関東では栃木というような、非常に全国的にも数が少ない製品であります。他の事例を見ると金が貼り付けられているものはございませんので、この7世紀中葉以降ですね、この鏡自体も象徴的な儀具へと変化して行ったのではないかということが分かる資料となっています。

三ノ宮・下谷戸遺跡、こちらですね、小石室というものが発見された好例として挙げております。小石室は、これが一番でっかい規模なのですけれども、1m75㎝くらいしかなくてですね、人が一人寝そべられるかどうか、そういうようなサイズのもので、小さなものでは長さ40㎝というようなものもあります。この、一番大きなものからは、生身の歯が発見されておりますので、火葬により埋葬されたものではない、ということが言えます。ですので、改葬のためにですね、造られた構造ということが考えられまして、県内ではですね、最近発見例が増えておりまして、河川、相模川沿いの河原口坊中遺跡などでも発見されています。小石室が群集するものと、古墳群の中に混在するものと、そういう二色が見えてきたという状況になっておりますので、高塚の古墳と横穴墓と、それからこのような小石室とですね、多彩な古墳時代後期の埋葬構造が段々分かってきました。今後の検討必要になってくるかと思います。

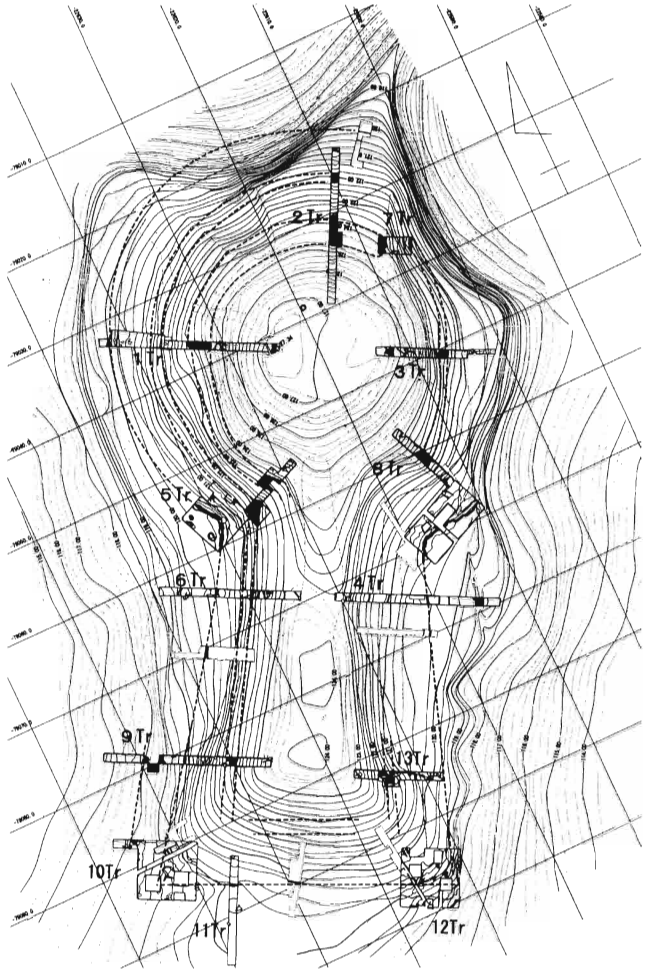
このような、羅列しただけの昨今の状況になっておりますけれども、この十年、90年以降ですね、西川さんおっしゃるように開発による発掘事例、非常に増えています。そういう中で資料が増えたことによってで

すね、21世紀になってからもですね、遺跡を残して行く、それから、その資料を活用して行く、そういうところが非常に重要になってくるかと思います。神奈川県考古学会がですね、そういう、このような昨今の状況を受けて、主導して研究を進めて行って頂ければ、という風に考えておりますので、今後ともよろしくお願いしたいと思います。古墳時代、以上です。

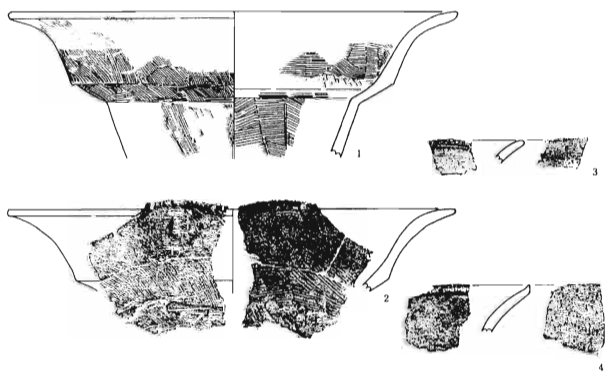
表　日本考古学年報に記載された遺跡

2001	◇・伊勢原　埒免古墳 ◇・厚木　中依知遺跡群 （桜樹古墳群・中林横穴墓群） ◇・寒川　宮山・中里遺跡 ◇・中井　比奈窪中屋敷横穴墓群 ◇・藤沢　新林右横穴墓群 ◇・鎌倉　亀井砦跡（横穴墓）	年報54
	◇・横浜　白幡浦島丘遺跡 ◇・藤沢　用田鳥居前遺跡 ◇・小田原　小田原城三の丸弁財天跡第Ⅴ地点 ◇・茅ヶ崎／寒川　小出川河川改修関連遺跡	
2002	◇・厚木　飯山久保古墳群（上久保1～3号墳） ○・海老名　秋葉山古墳群 ◇・茅ヶ崎　大久保Ｃ遺跡（横穴墓） ◇・横須賀　田戸台横穴墓群 ◇・横須賀　腰越東横穴墓 ◇・横浜　大北横穴墓	年報55
2003	○・海老名　社家宇治山遺跡 ◇・横須賀　佐島大楠中学校内横穴 ◇・横須賀　かろうと山古墳	年報56
2004	○・平塚　湘南新道関連遺跡（坪ノ内遺跡） ○・小田原　三ツ俣遺跡ＸＸＩ地点 ／千代南原遺跡ⅩⅨ地点 △・伊勢原　三ノ宮・上木津根遺跡 ◇・横浜　北門古墳群 ◇・寒川　宮山中里遺跡 ◇・横浜　横浜市No.36遺跡（横穴墓） ◇・横須賀　高尾横穴墓群	年報57
	○・川崎　小台遺跡 ○・小田原　千代南原遺跡ⅩⅥ地点 △・海老名　中野桜野遺跡 ◇・伊勢原　石田峯遺跡	
2005	◇・寒川　岡田西河内遺跡第3次調査（古墳） ○・小田原　高田南原遺跡・No.273	年報58
2006	◇・横須賀　大津古墳群 ◇・厚木　小野公所遺跡第3地点（古墳） ◇・寒川　岡田西河内遺跡第4次調査（古墳） ◇・座間　梵天山横穴墓 ○・逗子／葉山　長柄桜山古墳群	年報59
2007	○・海老名　社家宇治山遺跡 ○・平塚　塚越古墳 ◇・横須賀　乗越遺跡／掘ノ内横穴墓群 ◇・海老名　上今泉横穴墓群 ○◇・海老名　河原口坊中遺跡（小石室含）	年報60
	△◇・三浦　白須遺跡／白須西遺跡 ◇・伊勢原　西富岡・向畑遺跡 ○・藤沢　御幣山遺跡 ◇・横浜　山下居留地遺跡	
2008	◇・秦野　二子塚古墳 ○・平塚　塚越遺跡	年報61
	○・伊勢原　三ノ宮・下木津根遺跡	

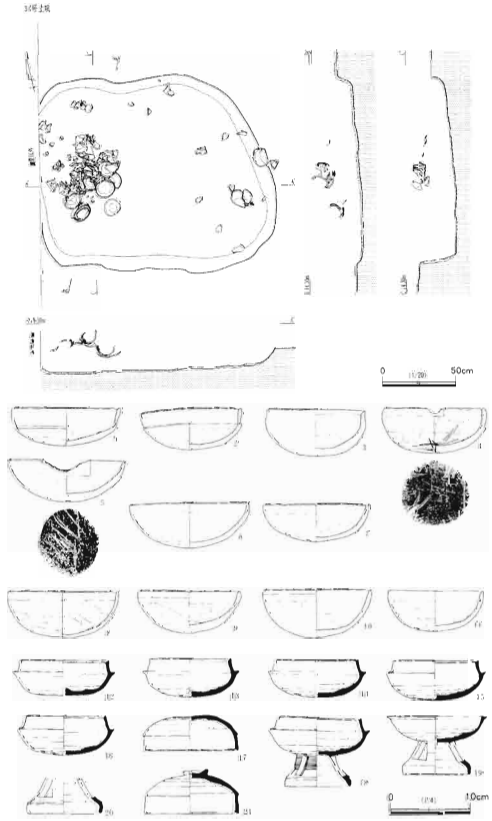
○＝前期、△＝中期、◇＝後期・終末期



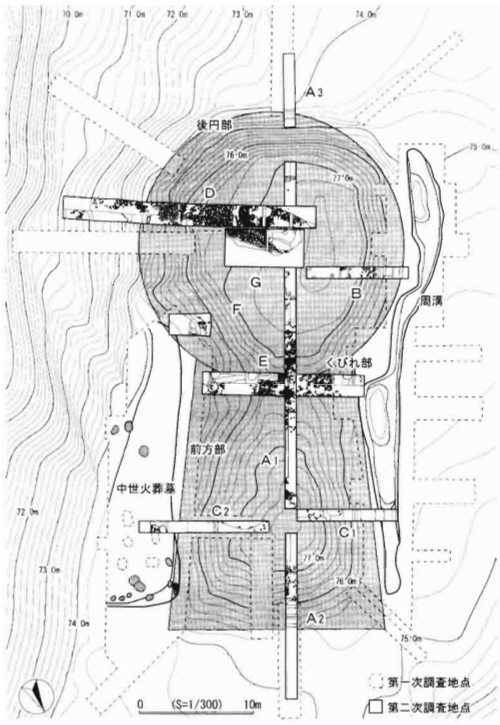
第１図　長柄桜山古墳群１号墳



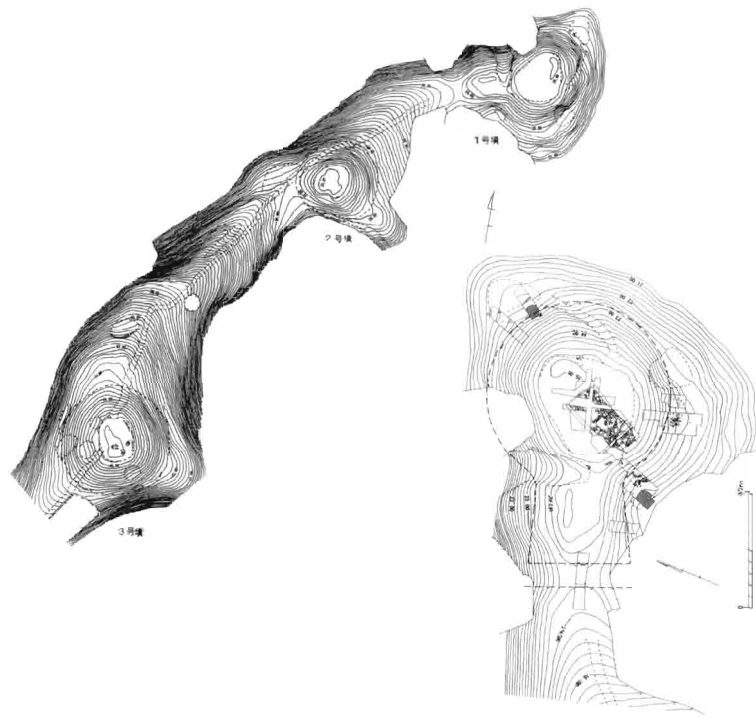
第２図　小田原城八幡山遺跡群出土壺形



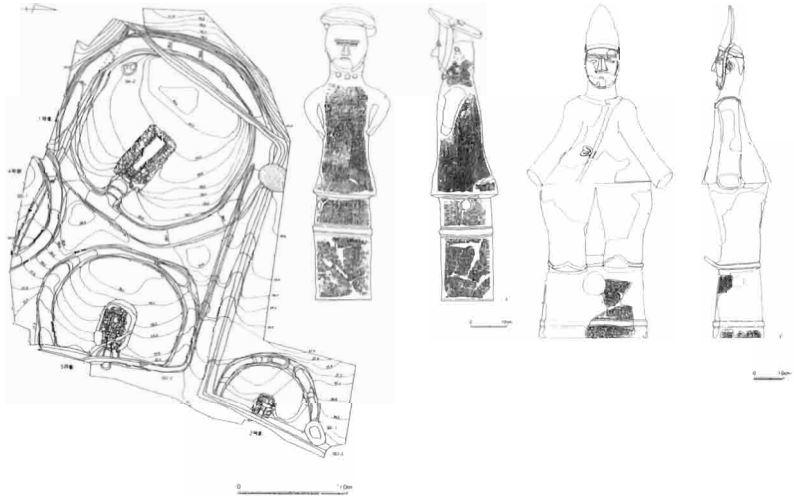
第３図　中野桜野遺跡 31 号土坑



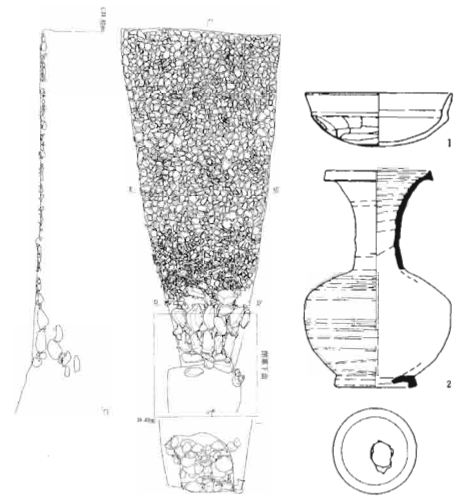
第 4 図　二子塚古墳



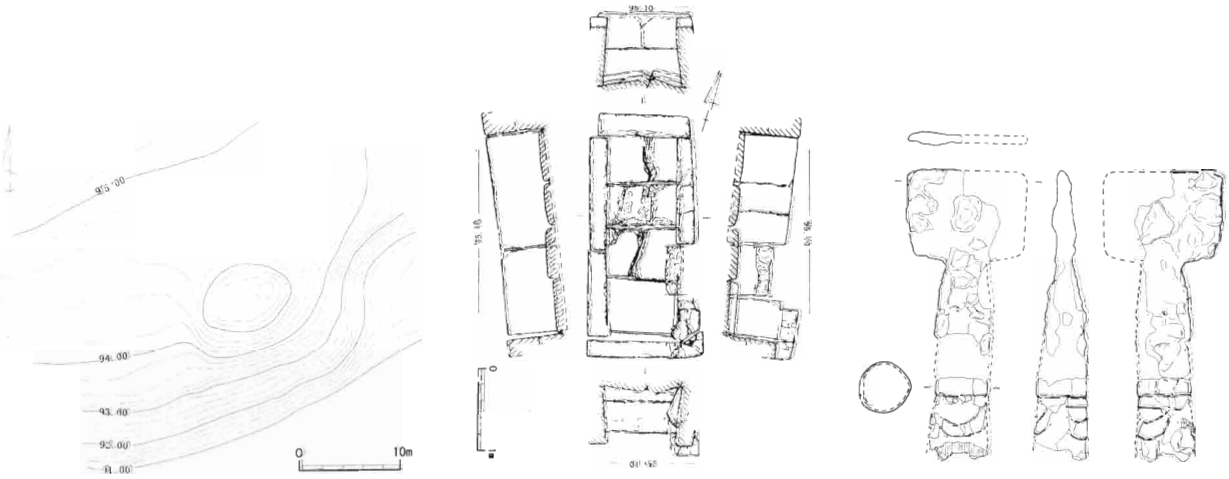
第 5 図　大津古墳群



第 6 図　北門古墳群



第 7 図　中依知遺跡群（中林 3 号墓）



第 8 図　かろうと山古墳

奈良・平安時代の動向

服部　みはる

ご紹介いただきました服部です。よろしくお願いいたします。

今回、奈良・平安時代の動向ということで、私は今、文化財関係の部署にはおりませんで、最前線の立場にはいないのですけれども、今回岡本会長からお話があり、お引き受けした次第です。

動向というほどの話ができるかどうかわかりませんけれども､20年というのはかなり長い期間ですので、ここ10年位の私の印象に残っていることを皆さんと一緒に振り返りながらお話をさせていただければと思います。

奈良・平安時代の研究ですけれども、私が学生の頃でしょうか、主には集落の研究と土器の編年というのがやはり大きな柱だったと思います。そうしたところから、ここ10年ちょっと位ですか、特に寺院や官衙といった部分について目が向けられまして、調査の結果というのも新しい知見が非常に増えてきたというふうに思います。そういった方面の研究が進展したということで、今日、この動向ということでは、3つの点に絞ってお話をしてみたいと思います。

一つは、相模国府の周辺のこと、二つ目として郡衙とお寺の関係、そして三つ目として、相模国分寺跡と乗越遺跡のことについて、取り上げてみたいと思います。各テーマ、ボリュームがありますので、トピック的に見ていきたいと思います。

まず、話に入る前に遺跡の場所を確認しておきたいと思います。相模の国府域というのは平塚市、大住郡にあたります。高座郡衙は茅ヶ崎市にあります。それから、相模国分寺が海老名市です。乗越遺跡が横須賀市、橘樹郡衙が川崎市の高津区にあります。

まず、相模国府の周辺について見ていきたいと思います。一つ目のトピックというのは､「海老名国府説に終止符」という見出しにしましたが、私は海老名に勤めているので、どうしても海老名中心になってしまうんですけれども、国府の関係で大きなニュースとして、推定国庁脇殿の発見ということがありました。相模国府は、現在の平塚市、大住郡にありますけれども、平塚市に国府があったということは､「国厨」ですとか､「曹師」等と書かれた墨書土器が出たり、色々な遺構が出たりして、以前から間違いないところだったわけです。しかしながら海老名市に国分寺がある関係で、国分寺と国府というのはそばに置かれることが多いわけですから、初期の段階では海老名市に国府があったんじゃないかという説が根強くずっとあったわけです。明石新さんは、竪穴住居跡の数等を分析なさって、国府は最初から、8世紀から大住郡にあったんだとずっとおっしゃっていたんですけれども、なかなか証拠になる遺構というのが見つかってこなかったわけです。けれども、とうとう、かながわ考古学財団の湘南新道関連遺跡の発掘調査によって決定的な遺構が見つかったのです。

大型の掘立柱建物跡が2棟見つかりまして、ただ建物全容が明らかになっていないということなのですけれども、規模が非常に大きく、形状が特異であって、東西に2棟建てられているということで、国庁脇殿で間違いないだろうと認識されています。出土した遺物から、8世紀の初めには建築されて、3回ほど建て替えがあり、9世紀の初めくらいまで存続したんじゃないか、という調査報告がされているかと思います。

相模国府の周辺では、この国庁の脇殿が明らかとなってきたほか、道路跡や鍛冶工房等の発見が相次ぎまして、国府の景観が徐々に分かってきたということも大きな成果として挙げられると思います。

国府周辺の図面を見ますと、道路遺構がいくつかの遺跡でみつかりまして、それを繋ぎ合せると、道路が国府域を東西に貫いているということがだいたい分かってきました。推定東海道とありますが、向きがこのままいくと秦野方向に行ってしまうということで、一部異論があるんでしょうかね。それでも官道に間違いないのではないかと思います。道がはっきりしてきたということで、道が骨格になっていて、南北に公的な施設がブロック状にあるような状況がだんだん分かってきたのではないかと思います。特に鍛冶関係の工房の跡が非常に目立つような気がします。また、最近は推定の国府域から外れたところにも公的な施設のような遺構が発見されることもあります。推定されている国府域というのは特に溝で区切られているというわけではないので、推定東海道に沿って公的な施設というのが点在していたような状況ではないかと思います。国府については、以前は方八町とか、碁盤の目のようになっていたとか、そんな認識がありましたけれども、どうもそういうような状況ではない、ということが分かってきたかと思います。

鍛冶炉については、連房式の鍛冶工房という形で見つかっていまして、炉が2列で大きい建物の中に並んでいるような状況です。こういった遺構というのは国府域でしか見つかっていなくて、官営の工房だろうと考えられています。

茨城県石岡市の鹿の子C遺跡という遺跡がありますが、そちらで見つかった常陸国府の工房跡が復元をされています。連房式の鍛冶工房で、平塚で出ているのと同じようなものだったと思います。鹿の子C遺跡では周りに壁があるような形に復元されています。相模国府の工房に壁があったかどうかはわからないのですが、こういった景観が相模国府でも想定できるのかなと思います。

国庁の脇殿跡の付近が今どうなっているかというと、道路拡幅に伴う調査で見つかったので既に道路が整備されています。脇殿跡があった場所の歩道の部分だけ舗装の色を変えているようです。案内板もできています。

相模国府のトピックとしてもう一つ、非常に印象に残ったことがあります。「緑釉陶器と国司」とタイトルをつけましたけれども、国府域の周辺では緑釉陶器が非常にたくさん出てきます。これは関東でも有数で、神奈川県内でも７割くらいが平塚市域で出てくるということです。分析により、9世紀の第２四半期に京都産の緑釉陶器があって、そのあと9世紀の第３、４四半期に東海産のものが増えていくという状況が分かったということです。かながわ考古学財団の交流職員で京都の職員の方がしばらくいられた関係で、京都の嵯峨院、嵯峨天皇の関連する窯の緑釉陶器が出土していることがわかり、なぜそういったものが神奈川で出土するのか疑問に思われて調べたところ、この時期、相模の国司に嵯峨天皇の系列の源氏が11人連続して国司として任命されているということが判明したそうです。緑釉陶器の出土にはそういった事情が深く関わっているのではないかということか明らかになったわけです。

次に、郡衙と郡寺ということについてみていきたいと思います。神奈川県は、相模国と武蔵国に分かれています。相模国では、今まで鎌倉郡衙と、高座郡衙、武蔵国では都筑郡衙と橘樹郡衙が明らかになっています。今回取り上げる遺跡以外にも、鎌倉郡衙では周辺の部分の追加調査が行われていますし、御屋敷添遺跡では郡衙の前の評家段階の建物跡ではないかという遺構が出たりもしています。寺院跡では千代寺院跡で建物跡の地業が見つかったりもしています。色々あったんですけれども、今回は高座郡と橘樹郡を取り上げてみます。

1997年になりますけれども、この県考古学会のトピックスの中で、東海大学の田尾誠敏さんが「相模国の国分寺以前の寺院と官衙と津の分布」というモデル図を示したことがあります。これは官衙と寺院と津というのが必ずセットになるんじゃないかということで、提唱をされたわけです。そういった提唱があった後に、

高座郡衙が発見され、今まさに田尾さんの寺院と郡衙と津のモデルをトレースするような形で高座郡衙と下寺尾寺院跡のことが分かってきました。

2002年に県立茅ヶ崎北陵高校のグランドから高座郡衙が発見されました。正倉と郡庁の建物、それから館かと思われる建物から成っています。さらにすぐ下に小出川と駒寄川が流れていて、この周辺を河川改修に伴って、かながわ考古学財団が調査したところ、人為的に手を加えたのではないかという旧河道が発見され、祭祀の跡も見つかっています。まさに旧河道は津として使われたものではないかということで、郡衙とお寺と津というセットになる事例です。

下寺尾寺院跡は昔から礎石や瓦が出土することから、お寺がこの辺にあったと言われていました。茅ヶ崎市の非常に熱心な調査で、ようやくだいたいの中心伽藍の区域が分かってきました。

2008年に建物の跡である地業の跡、つまり地面を地盤改良した痕が見つかりました。それから、さらに他にも地業の跡が見つかり、最近では大きな掘立柱建物跡や礎石建ちの建物跡があることが分かってきました。ただ、寺院の配置としては建物が2つはあるのではないかということは言えるのですが、まだ南側が不明瞭で、一般的に何式といえるような配置でなさそうだいうことは分かってきています。

これが、下寺尾寺院跡の創建期の段階ではないかと思われる掘り込み地業の跡です。礎石建ちの建物というのは瓦の重みで普通の地盤だと沈んでしまうので、地盤改良をします。一回元々あった土を掘り下げて、そこに層状に固く土を突き固めていきます。そういった跡が一部発見されました。区域西側でも、大型の掘立柱の建物跡、それから礎石の建物跡が見つかっています。現地見学会の時の様子ですが、ピンポールが立っていて紐が引っ張ってあるところが、創建時の段階の大型の掘立柱建物跡ではないかということです。石がちょっと見えるところがあります。これが礎石の下に敷いた礎石を安定させるための根石ではないかと思います。ですから、最初は掘立柱の建物跡が建てられ、時期がどれくらい違うかまだ分かりませんけれども、その後に礎石建ちの建物が建てられたのだろうと思われます。

下寺尾遺跡群は、お寺と郡衙と津、祭祀がセットになって、非常に良好に残っている遺跡です。景観図ということで、霜出彩野さんがイメージ図を描かれていらっしゃいます。同時存在的にこうだったかということは、わかりませんが、こんな状況だったのではないかということです。

郡衙の状況としてもう一つ、武蔵国の橘樹郡衙の状況についてみてみます。こちらは、川崎市高津区の千年伊勢山台という遺跡から発見された、正倉群、倉庫です。総柱の建物跡が21棟、掘立柱建物跡が38棟、見つかっています。郡庁というのが、まだはっきりしていないんですけど、こちらの区域よりもちょっと西側の方にあるのではないかと想定されています。さらにもう少し西側に、影向寺というお寺がやはりセットであるような状況です。橘樹郡衙は、市の重要史跡ということで一部保存されています。

先程の高座郡衙につきましても、郡の中心施設が非常に良好に残っているところですので、保存について前進されることを期待しています。

ここに武蔵国と相模国の事例を出したのですが、橘樹郡衙は正倉、倉が多く見つかっています。相模国では、郡衙がまだ多く発見されているわけではないからわからないのですが、どうも倉の数があまり多くないように思います。武蔵国と相模国の差というのが、もしかしたら何かあるのかもしれないなと思っているところです。

3つ目のテーマは、「相模国分寺跡と乗越遺跡」です。相模国分寺跡につきましては、史跡指定は非常に古いです。主要伽藍というのも、だいたいどこに何があるのかというは分かっておりました。そういった中で近年史跡整備の調査ということで、ここ20年位、断続的に調査が進められています。比較的最近調査を行っ

たのは、金堂と講堂です。そして北方建物の２とした建物跡が、近年調査で分かってきたものです。

まず国分寺の金堂の様子ですが、基壇の外装は河原石を貼り付けたような状況が確認されています。塔は檀上積基壇といって、切石で積み重ねて直角に立ち上がるような基壇なのですが、金堂だけでなく講堂もこういった貼石上の基壇になっていて、非常に特異なものとなっています。河原石が積み重なる場合は、乱石積基壇外装といい、事例はしばしばあるんですけど、どうも乱石積ではないのではないかということです。これが金堂の礎石の据え付けの状況です。下に根石があります。先ほどの下寺尾寺院跡での根石は、この部分だけが残っているという状況です。

こちらは国分寺跡の北方建物跡２と書いてある遺構ですが､非常に大きな堀込を持つものです。一個一個、掘立柱建物の跡の柱穴のようにもみえますけど非常に大きくて、これが何かというのが今もよく分からないのですが、一応調査をした段階では掘り込み地業をこの部分だけ行った坪地業ではないかということで考えているようです。坪地業の上に礎石があり、上に柱が建つというように考えられている訳ですが、それにしても柱の間が広くて、本当にそういった建物だったかどうか、ちょっとまだ分からない状況かと思います。

こちらは国分寺の創建期の瓦になります。国分寺の創建期の瓦については、ずっと三浦半島の公郷瓦窯の古い段階の窯のものではないかということで、言われていましたが、今回、乗越遺跡の瓦窯の発見によって、どうも様子が変わってきたということであります。

乗越遺跡は、横須賀市の秋谷の海辺にあります。周辺に瓦が散布しているということは以前から知られていて、瓦は国分寺跡から出土する瓦でしたので、乗越系の瓦と言われ、この辺に瓦窯があるだろうとずっと言われてはいました。2007年に宅地造成がありまして、その時に瓦窯が見つかっています。登り窯が５基と平窯が３基見つかっています。登り窯も平窯も岩盤を刳りぬいたような形で、非常に良い状況で残っています。

瓦の外面は木で平行の叩き目をつけたものと、あと縄目のものがあります。乗越瓦窯の瓦の特徴は、表面は灰色ですが、割れ目を見ると鮮やかなオレンジ色をしています。特徴的なので、国分寺跡でも乗越の瓦ということで認識はできておりました。決定的だったのが、５、６号窯の出土品の洗浄をしている時と聞いておりますけれども、国分寺の軒丸瓦の破片が出土しました。

先程も申し上げましたが、相模国分寺に使用された瓦は三浦半島でも公郷瓦窯のものではないかと考えられていたわけですが、ここで出たことによって乗越瓦窯で焼かれていた可能性が高くなりまして、国分寺の創建期の瓦の大半が恐らくこの乗越瓦窯から持ってこられたのではないかということが分かってきました。乗越瓦窯では瓦のほかに須恵器が焼かれています。須恵器もまた特徴的で、瓦と同じように外は灰色なのですけれども、割れ目はオレンジ色になっています。赤焼きになっているものもたくさんあります。これらの須恵器は何か儀礼用の器だと思われますので、相模国分寺に供給されていた器だとしたら良いなと思って海老名の収蔵庫を探したのですけれども、見つかりませんでした。まだこれと同じものは残念ながら出土していません。

乗越瓦窯は、相模湾に面していて、すぐ下に小さな入り江があります。ここから焼いた瓦を積み出して、相模湾を通って、相模川に入って、目久尻川という支流がありますが、そちらを遡り、国分寺跡のすぐそばに逆川という運河跡があるのですけれども、そこに入って、国分寺の直近で瓦を降ろしていたんじゃないかということが想定されます。こうした景観とともに、瓦窯が一部でも残れば良いなというふうに思っています。

レジュメには､「新たな課題」としましたが、最後に少しだけ、なぜ相模国府と相模国分寺が離れていた

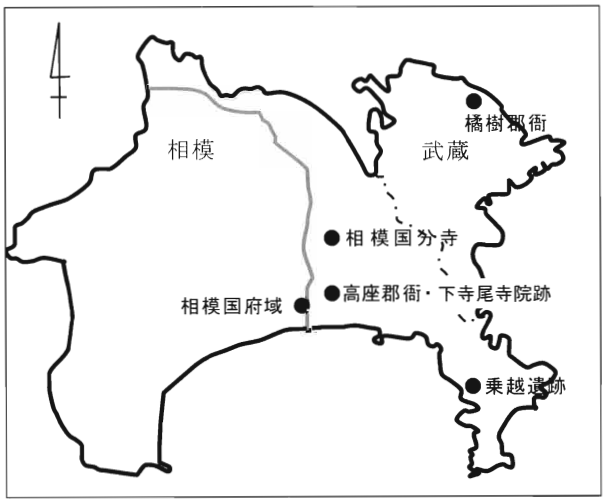
かということについて少し触れておきたいと思います。国府と国分寺が離れていた理由はどこかに書かれているわけではないし、これから明らかになることもないと思うので、総合的に判断するしかないと思っています。私としては、端的に言うと、大住郡では、作れなかったからではないかと思っています。国分寺の場所については、天平19年に国司が使者とともに良い場所を選んで努力して造営するようにということ、また、郡司で力があってできる者は寺造りにあてよという、命が出ています。こういったことから、郡司に頼るところが非常に大きかったのではないかと思います。各郡の役割分担のような形で国分寺の造営体制をとったと思われるのです。

国分寺の建立にあたっては礎石や木材、瓦ですとか釘といった建築資材が必要になってきます。例えば礎石は、金堂の礎石の分析で、中津川水系から持ってきた可能性が高く、愛甲郡の担当、瓦は先ほどの創建期のものを御浦郡、乗越瓦窯以外にからさわ瓦窯という足下郡の瓦窯の瓦も出土しています。そのほかにも、量は少しですが、他にも産地不明の瓦がありますので、そういった瓦も各郡の協力によってもたらされたものではないかと思っています。ちなみに下寺尾寺院の瓦は創建期のものは国分寺跡からは出土しません。釘等は、もしかしたら大住郡の官営工房で作っていたのかな、と考えています。

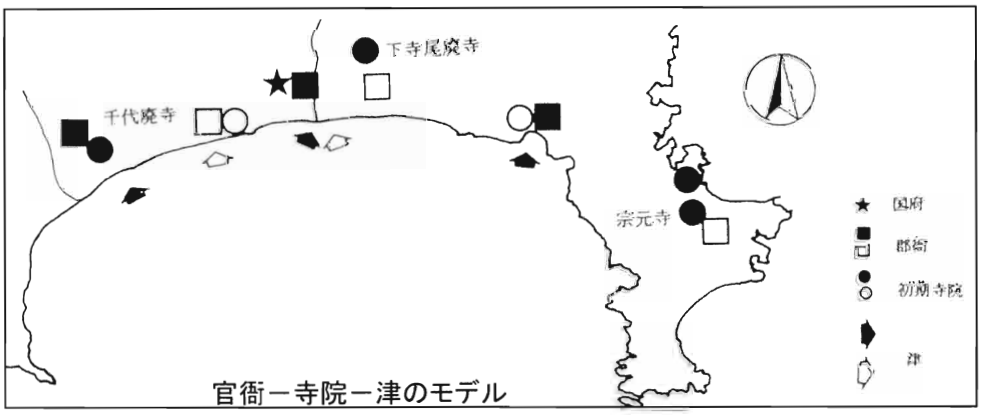
そういったことから、国内各所の資材を調達し、作るのに一番良いということで海老名が国分寺建立の地になったんじゃないかと考えています。高座郡としては、建設にあたる人の手配や受け入れ、コーディネート的な部分を担っていたのではないかと思っています。

ところで先程見ていただいたとおり、相模国分寺跡の金堂などの基壇の外装は、河原石になっており、金堂、講堂では瓦もあまり出土していないという事実があります。これらの建物が瓦葺きの建物であったかどうかも課題です。瓦葺でなかったとしたら、なぜそうなったのでしょうか。こうしてみると、相模の国庁や郡衙も、9世紀の初めくらいまでに場所を移すなどしており、何らかの画期があるように思います。国分寺の金堂や講堂の基壇等の状況も社会情勢的なことが関係がしているのではないかと思っています。

相模の国が中心になってしまいましたけれども、私からは以上です。

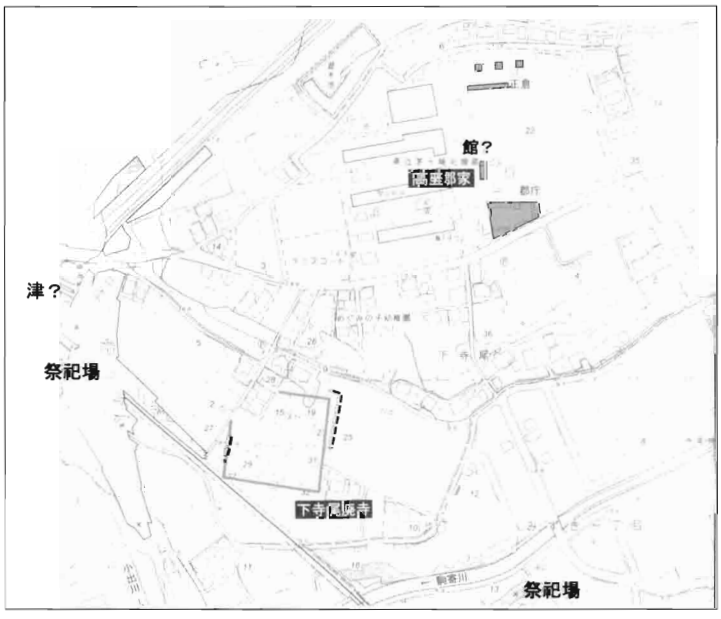


第1図　神奈川県内の国府・郡衙・寺院位置図



第2図　相模国と国分寺以前の寺院と官衙と津の分布

（田尾誠敏1997「古代相模国の官衙と寺院をめぐって」より）



第3図　高座郡周辺図

（(財)かながわ考古学財団2010『小出川河川改修事業関連遺跡群Ⅲ』より）

写真1　下寺尾寺院跡の礎石建物・大型掘立柱建物

第4図　下寺尾遺跡群の景観復元(田尾誠敏氏提供、絵：霜出彩野氏)

写真2　国分寺金堂跡の基礎外装

写真3　国分寺金堂跡の礎石据え付け状況

写真4　相模国分寺北方大型掘立柱建物跡　坪地業？

中世の動向

玉林　美男

ただいまご紹介にあずかりました鎌倉市教育委員会文化財課玉林でございます。私に与えられたテーマは中世の動向ということなのですが、このところ私は世界遺産のことばかりしていて、神奈川県全体の動向を語れる状況にありません。そこで鎌倉を中心としてお話をさせていただきたいと思います。

中世の遺跡が発掘調査の対象として認められるようになったのは、今から思い起こしますと、30年くらい前、私が役所に入ったのがちょうど34年前になりますけども、その時には各市に埋蔵文化財の包蔵地図というものがありますけども、その中に中世の遺跡として周知化されていたのは大倉の幕府跡と「やぐら」ぐらい。ところがその頃にですね、鎌倉中で下水道工事が始まりまして、下水道工事が鎌倉の街中の道路を掘り上げていくものですから、そういうところから鎌倉には中世の都市の遺跡があるのだと、いうふうなことが分かってまいりました。

それで、中世の遺跡を周知化してきたというところです。都市と遺跡というところでは、中世都市研究会というものが発足いたしまして、研究してきました。その後、将来世界遺産として登録をする予定の物件、暫定リストと呼んでいますけれども、その中に「古都鎌倉の寺院・神社ほか」ということで鎌倉をリストアップいたしました。私どもはその時から世界遺産に関わっているのですけれども、その中で鎌倉という場所を世界遺産としてというより都市としてどういうふうにして評価をするのかというような命題が出てきまして、これについて色々検討を進めてきました。また、個々の部分でもそういうふうな視点の中から発掘調査がおこなわれてきたというところがございます。

鎌倉は皆さんご存じのように、山と谷戸をとりこんだ政権の所在地です。三方を山、一方を海に囲まれた独自の都市の構造を持っているということですが、都市の形がアジア的方形区画の構造から逸脱して発展しているというところに特徴があるわけです。先程来国府の話が出ておりましたけれども、相模の国府は方形区画ではなかったかもしれないというようなお話もございましたけれども、アジア的な世界の中では都市というのは基本的には方形区画を持つものだ、逆に言うと方形区画を作ることによって都市であることを表しているということになるのですが、鎌倉はそういうところから逸脱をしてくる、日本が逸脱をしてくるというふうなことなのだと思います。

その中で鎌倉というところは、武家の政権の本拠地としていろいろな遺跡ができてまいります。特にいろんなものがついてきたということです。政権の中枢部とされるのが、この初期の政権の中枢部とされるのがこのエリアですね。鶴岡八幡宮があり、ここに荏柄天神社があり、ここに法華堂があって、この間。これは清泉女学院ですけど、この辺に大倉の御所があったとされています。そしてこの南側に南の御所・勝長寿院があり、そしてこのグリーンのエリア、ここに永福寺がありました。

永福寺は武家政権の象徴のような寺院です。特に源氏の政権ではそうで、1189年（文治五年）に奥州平泉を攻めた源頼朝が源義経、それから藤原泰衡等の奥州合戦で亡くなった人々の怨霊を慰撫するために寺院の建立を企画したというものです。永福寺は、中尊寺の二階大堂・大長寿院や毛越寺等を参考にして建立をいたしました。本堂は1192年、94年には脇堂である薬師堂･阿弥陀堂が完成いたしまして、伽藍が完成します。完成後は怨霊慰撫というふうなところから離れまして、源氏・将軍家の別荘みたいな関わり方をする場所でございます。

中心である三堂、これは復元図になっていますけれども、この三つで三堂と呼んでいます。真ん中が二階堂で本尊は釈迦で右側が薬師、左側が阿弥陀堂というふうに考えられています。これはどうしてそういうふうに考えたというかとですね、仏様、阿弥陀様がそういうふうな並び方をするということで、特に天台の仏様の並び方がそういうふうなことであるということです。

中心堂である二階堂は東西19.4m、南北17.6mで5間四方の裳階付の建物になります。両脇堂が12.7m×16.7mの五間×四間ということで造り方を変えています。この調査で一つ面白かったのはですね、これが薬師堂の外側なのですけども、この薬師堂の外側にずっと柱穴が並んでいます。実際にここには柱が残っていました。これは6世紀代という、そう書いてあるもので、本来ですと先程国分寺の建物で本堂ではちょっと盛り上がった基壇が段的になり石積みの基壇がございましたけども、そのいわゆる基礎構造がいわゆる礎石を乗せる所が少し高くなってですね、その縁のところを何で化粧するかというところで、石で化粧すれば石積みの基壇、それから切り石積みで造られれば切石の壇上積みの基壇というようなことになるのですが、ここでは木製の基壇が造られています。

木製の基壇は毛越寺の講堂などで使われているのが鎌倉に輸入されたというふうになっておりますが、ここでは、ここにずっと材が残っておりましたので、その材の芯心をこう測っていって、当時の尺度を復元することができました。で、阿弥陀堂では1尺が305mm、二階堂では304mmということで、ほぼ現在の1尺303mm(30.3cm)というところよりもちょっと長いぐらいでほぼ同じというところが分かってきました。こうした尺度がぴったり分かってきたというのが他の遺構を見る上でも非常に大切なことなのではないかなと思います。

二階堂ではこれも復元図になりますけれども、中心の堂と脇堂を複廊といわれますけれども二棟を二間間の建物で繋いでいます。これを今まで私たちは複廊というふうに呼んできたのですけれども、建築のほうでは二棟廊だと言うそうです。「吾妻鏡」の中では永福寺のことではないのですけれども、将軍家の御所の中で二棟廊というものが出てきておりまして、建築史のほうの指摘でいわゆる複廊であるというふうに伝えております。

さらにそこからL字形に廊が伸びている。これを、翼廊と言っておりますけれど、これは北側の翼廊です。この北側の翼廊があって、さらにこれは写真ではありませんけれども、中門があって、池に面する釣殿があるというような構造をしております。

二階堂自体は建物に関する絵画資料等はないのですけれども、比較的称名寺の結界図にあります称名寺の絵が非常に参考になるのではないかなというふうに思います。先端のところも釣殿部分というのもあったのであろうと。L字形の翼廊があるということがわかります。

一方でこちら側のところは、左側に出ています部分はこう見ていただくとお分かりになるようにここに扉があって、ここ、ここととここの間に柱がありまして、二間だと思いますね。ということで、こういうところにもこちらはいくつだか分からないのですけれども、複廊のようないわゆる二棟廊のようなものが付いているというものです。こういうものが永福寺の参考になるのではないかなということです。

ここにちょうど一段低い段がついておりますけれども、上がり降りは、宗教的儀式の時の上がり降りはこちらから上がりますけれども、通常の上り口はこちらから入っていくということで、二棟廊から入っていくというふうな記事が「吾妻鏡」の中では散見されるところです。一方、永福寺には非常に良い池が造られているわけですけれども、もう一つ池だけではなくて永福寺の場合、鎌倉時代に入ってから経塚が造られているというところがございます。これは二階堂の正面の山の上から出た渥美の大甕です。その中に横倒しになっ

ていましてけれども、経筒が入っていました。経筒を取り上げますと、こういうふうな状態になっておりまして、青白磁の小壺が割れたような状態で入っておりました。その中にはこちらにございますように、櫛が10枚入っていました。そのほかにここに出てきておりますのは扇です。これは蒔絵のある、ここには黒漆で金の蒔絵が残っております。扇です。それからここに出てきているのが念珠で、念珠でもここにこういうふうに木のものと水晶のものが組み合わさった、いわゆる半装束念珠というふうに言われている念珠が出てきます。それと、櫛がたくさん出ています。10本出ているところから造立には女性が関わっていたのではないかと想像されるわけですが、銅製経筒の径が非常にここを見ていただくと分かるように太いのです。何本かをいっしょにして入れたのだと思いますけれど、非常に太い形になります。このような太いものが出てくるのは13世紀に入ってからだというふうなことなので、13世紀に入って以降の経塚の造立ということなのですが、残念ながら今のところこの年代に合うようなところでの経塚の投影というのが「吾妻鏡」には出てきておりません

次に鎌倉の、永福寺は初期の将軍権力の象徴だというふうなことなのですけれど、もう一つ鎌倉の象徴となるのは大仏様です。都市の西部に鎌倉が仏法の栄える地だと示すために、また武家政権の守護としての大仏が鋳造されます。日本では1252年（建長四年）に末法に入ってから201年目を迎えるということになりますが、この末法に入ってからの100年・100年というのは当時の人たちは大分意識をしていたようで、特別な行事をしたり、あるいは革命の年だというふうに考える方もいらっしゃるということです。

日本が末法に入って最初の年に造られたお寺さんは皆さんがよくご存じのように宇治の平等院ですね。それで、201年目に造られたのがこの鎌倉の大仏さんということになります。鎌倉ではこの時期に多少1 ～ 2年前後することがありますけれども、この年を意識してか浄光明寺、それから建長寺の造立が同時に行われるということです。銅像の大仏さんも「吾妻鏡」の中ではこの年に鋳造が始められたことがわかります。「吾妻鏡」には釈迦如来というふうに書いてあります。この大仏さんを当初どうだったのかというのは実はきちっとした研究がなされていません。この大仏さんを見ていただくと横に筋がたくさんありますけれども、これは後ほどにもお話をさせていただきますけれども、鋳型を組んでいった鋳型の継ぎ目の筋であるというふうに考えられているわけですけれども、確かにそうなのですがこの大仏さんは今厚さが10㎝ほどあるそうなのですが、どうも何度も何度も鋳込みがおこなわれて壊れては修理し、壊れては修理したことの最終形が今なのです。なので皆さんが大仏さんにいかれた時にはぜひ見ていただきたいのですが、中入れますから、大仏さんの脇に破断した痕がたくさん出ています。そうしたところも継ぎ目をみていきますと2㎝ないです、厚みが。で、鋳カラクリといわれる特殊な技術を使っているというふうなことを言っていますけれども、全部あれ修理の痕だと私は認識しています。それはちょっとおいておきまして。

大仏さんについても、大仏さん自体は実は国宝に指定されていますけれども、その土地については何ら指定がされておりません。いわゆる周知の埋蔵文化財包蔵地だというふうな扱いでしたので、それはまずいであろうということで、大仏さんの調査をいたしました。そうしましたら、大仏さんの周囲ではこのように斜めの堆積が出てきています。大仏さんのほうにむかって高くなる堆積です。これは背後ですけども、様はこういうふうな形になっていたのではないかと。鋳型を固定するために段々段々こう一つの鋳型を固定するために、例えば最初はここまでしました。次の時にはここまでというようなかたちで段々段々土をためて、鋳込み終わったら上を整地してその上に礎石を置くというふうなことをやってのではないかと。そのためにこういうふうな斜めの堆積が出てきたのだろうというふうに考えられています。これは大仏さんの脇のところで出てきた下のほうは土地の地業なのですけれども、この部分は礎石のいわゆる下の根固めで、直径が3m、

深くなると2㎜くらい。河原石の2ｃｍくらいの砂利と、それと土丹と言われます鎌倉の泥岩塊、それを交互に叩き締めています。

先程国分寺の礎石の下の写真が出てまいりましたが、それは拳大よりもっと大きな石を使っていました。永福寺でも同じなのですけれども、あれでやりますと、ああいうものはどちらかというといいますと、河原石の大きな礎石を乗せるには適しているのだろうと思います。下がこう窪んで当然河原石を置きますから下が窪みます。それに合わせて造っているのですが、ここはこれを見ていただくとお分かりのように大仏殿の礎石はまっ平らです。今日は写真をいれてないのですが、皆さんも大仏さんに行ったらぜひ見ていただきたいのですけれども、周りに礎石があります。2㎜くらいの礎石があります。それは箱根の安山岩を切りだしたものでまっ平らです。岩盤ではないのですけれども、いびつな変形をしていますけれども、ただまっ平らです。上面も下面もまっ平らです。そういうまっ平らのものを乗せているというふうなことで、新しい技術が入ってきているということが分かるわけです。

調査をしたところ、一応大仏さんの、いわゆる大仏殿、大仏さんの上の覆屋ですね。大仏殿の大きさを復元することが出来ました。大きな丸で囲ってあるところがテストピットをあけて礎石基盤の根固めを確認したところです。一応大きさそのものにぴたっと合ったというふうなことになります。間口が146尺、奥行きが140尺です。ちょうど見ていただくとお分かりになるように、大仏さまがいらっしゃるというところを綺麗に囲うかたちでの復元になりました。ここではですね、中世の瓦はまったく出土しておりません。大仏さんに行きますと大仏殿を復元した資料が売っているのですけれども、あの時あれをやる時にですね、「絶対瓦拭きではないから」と言ってきました。それから「大仏様、天竺様ではないです」というふうにお話をしたのですけれども、どこかの建築史のお偉い先生が大仏様で復元をしてしまいました。それには瓦もきちっと載っていますけれども、なぜこんなことにこだわっているかというとですね、後ほど建長寺のお話になりますけれども、建長寺ではほとんど瓦が出ていません。出ている瓦はきっと客殿の瓦だろうというふうに思います。復元図でもやはり瓦葺ではなくて桧皮葺または柿葺で復元をされています。もう瓦は出ない。全面瓦を葺くような状態ではない。何度も焼けていますけれども瓦は出てきていません。

禅宗様は皆さんよくご存じのように円覚寺舎利殿、柿葺ですよね。基本的に鎌倉の禅宗様は瓦を葺かないという伝統があるのですね。同じようなかたちで大仏殿も出てまいりましたけれども、同じような様相が窺われると。で、先程お話したような平坦な切り石の礎石を根固めの上に載せるというふうな技法も、これも従来の和風の建築には見られないものです。永福寺では先程見ていただいたように大きな穴があって、そこに礎石が残っていたというものがありますけれども、あれはどうも礎石の下にあるグリ石をみんな抜いてしまったのですね、そういうふうな大きなグリ石を入れて根固めをするという技法ではなくて、その直下の所を平らに根固めをするという技法がまた新たに入ってくるということで、このような技法は禅宗の寺院ですとか､あるいは新和様というふうにいわれる称名寺だとか極楽寺などで用いられているので､伽藍自体がちょうどこの時期に先程お話したように建長寺の造営、それから浄光明寺の造営をやっているということで、いわゆる禅宗様の建築が幕府あるいは北条氏によっておこなわれているわけです。それと礎石のあり方が非常に類似するということから禅宗様の可能性というのが考えられるのではないでしょうかということです。

ちょっと蛇足になりますけれども、あとはこの周辺、この前のところを掘ったのです。前の方を掘りましたら、ちょうど皆さんが大仏さんに行きますと拝観券売り場から手水屋のところから曲がって大仏さんの正面いきます。大仏さんの正面いったあたりのところは13世紀の末くらいに埋めたてられます。それまでは低湿地です。ですから、かなり狭いエリアのところにこの銅像の大仏さまが造られているということで、それ

こそ大仏殿そのものしか他の建物というのは、大きな建物ではなかったのではないかというふうに考えられるくらい狭いエリアに建てられています。まさに大仏殿そのものだと。

寺名なのですけれども、先程永福寺の話をしましたが、永福寺は中心の堂が永福寺です。二階堂ともいいます。それがまた寺全体の名前にもなっているということです。この大仏さんも大仏殿が堂の名前であるとともに寺の名前というふうに考えたほうがいいのではないかというふうに考えております。室町時代に一時大仏寺というふうなかたちで文書に出てくることがありますが、鎌倉時代の中では極楽寺の忍性さんの伝記の中では大仏殿別当になるというふうなことが出てきますので、これはお寺さんの名前というふうに考えたほうがいいのではないかというふうに考えています。

もう一つ近年考古学でも庭園それから建築史の中でも、あるいは彫刻もそうですね、注目を浴びているのが建長寺です。建長寺は我が国最初の禅宗専門道場で中国のお坊さんである蘭渓道隆が入ってきて中国式の伽藍を造営します。禅宗様という建築様式を導入ということです。さらに谷戸を開拓して造成をします。それが鎌倉の一つの特徴になるということです。そして方丈奥にも庭園が作られました。この建長初年には今でいう大規模な地形造成を伴う宅地造成が始まっていたというふうなことが分かりますから、1250年前後というところが鎌倉での谷戸造成あるいは大規模な土木工事の開始の時期というふうに考えていいのではないかというふうに考えています。

建築では建長寺が禅宗様の典型になりますが、今私たちは禅宗様というものを見てもそんなに奇異な感じはしないですね。禅宗様の特徴というのはここにありますように、貫を使うということです。建物はみな貫がありますけれども、貫を使うようになるのが、禅宗様の一つの特徴です。貫を使っていきます。ですからそれで足固めをして強固にしていくということになります。貫を使わないような建物ですと、逆にいうと足固めをしなければいけないので、かなり大きな穴を掘って掘立柱を固定をするとかいうふうなことがあるわけですけれども、そういうのが必要なくなります。和様ではこういう貫ではなくて、この外側に長押をうってこの間に板を入れていって半壁構造で建物を持たせてやるということですが、禅宗様が入ってきて貫の技法が入ってくるとこういうふうにこう間を使っていくことができるようなかたちになっていきます。そして禅宗寺院の一つの特徴である直線的な伽藍配置というのがこう出てきます。山門・仏殿・法堂が一直線に並んでくるというふうなことです。このかたちが京都にも波及し、いわゆる五山という建物が山門・仏殿・法堂という主要な建物が一直線に並ぶというふうなかたちになってきます。

これが中国の五山の一つの天童寺の伽藍の写真ですが、鎌倉と決定的に違うところは尾根の上を造成しているということです。ここにこう山のかたちが出ています。ここら辺が方丈になっています。ところが鎌倉は尾根が非常に細い。で谷戸が非常に発達しているというものですから、もとめられたのは山岳寺院であっていわゆる静かな場所ということなのでしょうけれども、それを山の上にもとめることができなくて谷戸の中に求めたというところが一つの特徴になります。これも天童寺です。これは「大宋諸山図」というものが京都の東福寺にありまして重要文化財になっておりますけれども､中国の伽藍の配置を写してきたものです。ここにありますように、ここが山門ですよね。仏殿、法堂、ここらへんに色々な堂がありますけれども方丈があって後ろが山になっている。こういう状態。直線的な伽藍配置があるのですけれども、どちらかというと横広がりになっているというところが一つ特徴なのだと思います。ところが鎌倉になりますと、これは建長寺の指図なのですけれど1331年に東福寺が焼けてそれを復興するためにですね、建長寺の伽藍を写した図面です。これ見ておわかりになるように、直線的な伽藍配置、ただ横にも伽藍伸びていますけれども先程の天童寺の配置と比べると縦長であるというのがお分かりになると思います。さらに奥にここにこう池が出て

きております。こういうふうなかたちで復元をされています。この池のところを掘ったのがこういう状態で、ここに注目していただきたいのですけれども、それまで日本の庭園は自然のかたちをしているのですが、ここでは直線です。ここは約2mの切り石積みです。これは当然当初からあったと考えられますので、鎌倉に残る最も古い切り石積みの遺構というふうなことになろうかと思います。この部分。今はこんなかたちに復元されています。これは今のところ伽藍のところですが、この地点、ここにこう線がひかれますけれど、これは岩盤の線です。こちら側が岩盤でこちら側が谷になります。こういった大規模な造営をして伽藍が造られているということです。これ見ていただいても礎石がありますけれど、礎石の下にグリ石をたくさん入れて設置しているのではなくて、平らなものをポンと置いているような状態です。これは下が岩盤なのであまり地業はしていませんでした。これは真っ赤に焼けた切り石の四半敷きですけれども、室町時代の火災の痕等も出てきています。さらにちょっと蛇足ですけれども今建長寺行きますと山門と仏殿の間にビャクシンがありますけれども、あれは今残っているのはこれかな。ここのところは真ん中は中庭庭園になっておりまして、このように下が低くなっております。両側を回廊で囲まれているというところで中庭庭園、今までの日本にはない庭園のかたちが取り入れられるということです。

この先端のこの奥の建物は方丈になりますけれども、その方丈の建物のところは二階というふうに書いてあります。あるいは観音閣それから得月楼というふうな注記がありまして、一階・二階というふうに書いてあります。二階の部分、つまり池に面して二階建ての建物を建てるというのは建長寺で始まりまして、中国ではいわゆる蘇州庭園などでよくあるのですけれども、日本では金閣・銀閣というふうなところに繋がってきます。日本の庭園として新しい展開をしていくということになります。

その他浄光明寺の発掘がありますけれども、浄光明寺にはこういう敷地絵図がありまして、ここのところに慈光院、それからこの上に経塚があります。元々こうしたものが調査されておりますが、絵図に描かれたものが現在もきちと残されているということです。

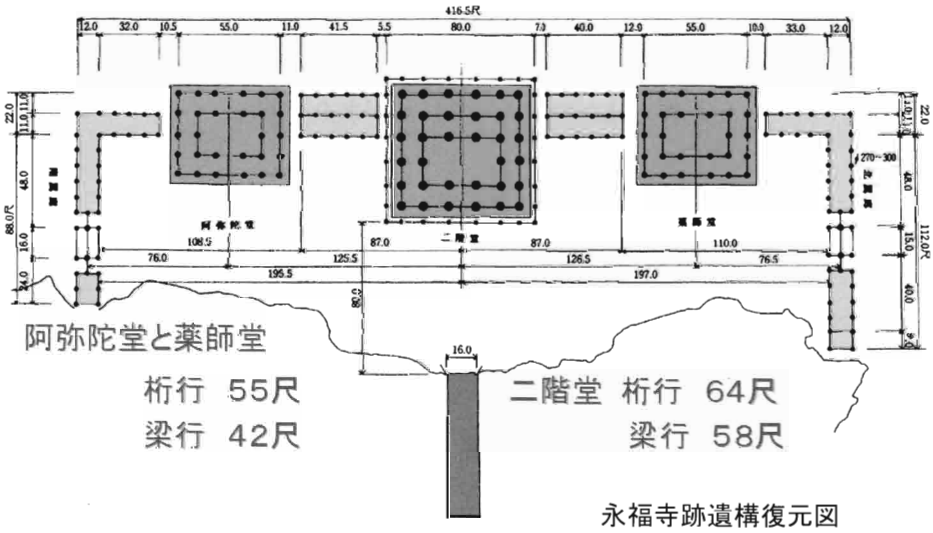
さらに切通しなどの調査も行ってきましたが、切通しの中では朝比奈切通しの中でこのようなお堂が出ております。ここが築地、ここにお堂があってここに納骨のための施設があって、こちら側が掘立柱の庫裡のような建物がありますが、こういうものがありまして今まで切通は道路的な施設というふうに考えられていたのですが、それだけではなくて宗教的な部分もあるのだというふうなことが分かってきました。

さらに交通の関係では若宮大路が調査されております。浜の鳥居が確認されておりまして、直径160cmという大きな柱痕が残っております。昨日鎌倉で遺跡の見学会がありましたが、あそこ行かれた方は遺跡の少し手前のところに小さな交差点がございまして、歩道橋があってと思いますが、その脇のところに浜の大鳥居の址があります。

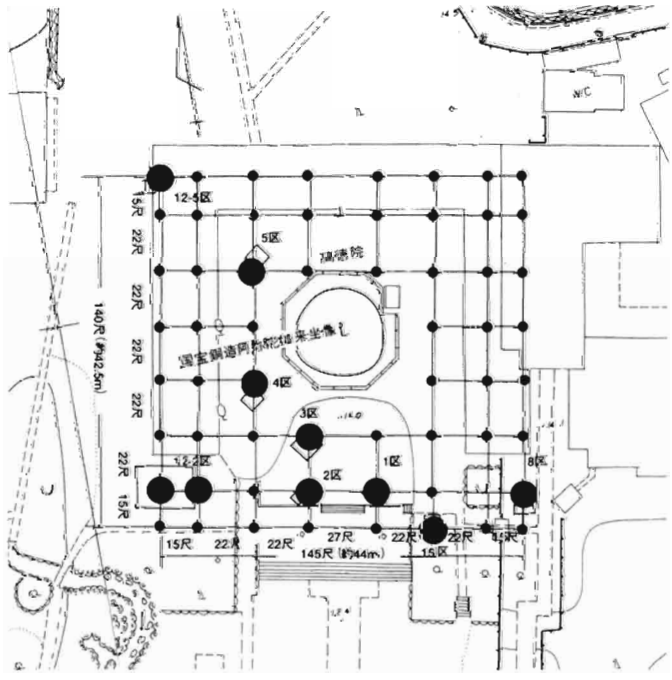
若宮大路は側溝がこのようにあります。幅は今3mというふうなことで確認されていまして、東西両側にあるということです。その中にはここに御座いますように北条氏の三つ鱗の模様が入ったようなものもありまして、また木の継ぎ目のところでは御家人の名前を書き、また長さを書いたような木簡が出ているということで御家人役等によってこういうふうなものが造られたということが分かってきております。丈尺を打つというふうなことがあるのですが、13世紀の第二四半期に将軍御所が若宮大路側に移転されますと、京の制度をある程度入れまして丈尺に則った、つまりきちと丈尺で換算できるような施設が造られるようになるということで、首都の整備がおこなわれたというふうなことになります。

鎌倉というのは武家が独自のシステムによる政権を立ち上げて最初に創った政権都市の遺産です。そして世界史的にいうとですね、戦士が階層として知識人となるということは非常に珍しいことだというふうにい

われております。日本では文武両道というふうにいわれますが、武力を意思で制御することが尊ばれます。こうした文化的傾向は現在に引き継がれているというふうに思いますし、世界でも洗練された特異な文化をつくっているということです。武家の政権が成立し、発展させた文化は鎌倉につくられました。その多くは埋蔵文化財というふうなかたちとなって地形や地下の遺構として埋まっていますが、継承された文化は現在も特に鎌倉の谷戸などの中に良好に遺存しているというふうに考えています。鎌倉の世界遺産としての顕著な普遍的な価値、いわゆるOUVは都市を囲む自然地形を利用し、政権都市の中枢部をつくったということになるだろうということです。この中枢部は鎌倉では御谷騒動という市民運動を契機として議員立法による古都保存法の成立、そしてそれによる緑地環境と遺跡等の保全ということがおこなわれてきました。世界遺産の登録というのは遺跡の保存と活用の上に存在しますが、鎌倉には残してきた遺産というのはとても大きいのですが、まだまだ格付けあるいは保護を必要とする遺跡はございます。世界遺産の登録と併せ遺跡に新しい価値を与えて保存を図ってまいりたいと思っております。以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。



永福寺跡遺構復元図



大仏殿柱間復元図

近世の動向

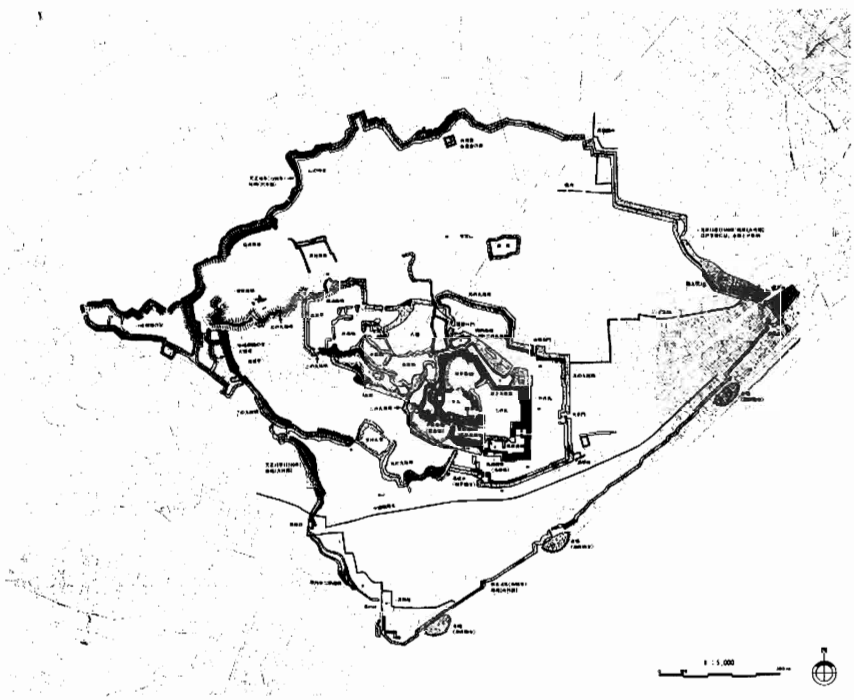
山口　剛志

1．はじめに

小田原市教育委員会の山口です。よろしくお願いいたします。私は、仕事として小田原城などの調査を担当していますが、小田原城はご承知の通り16世紀から19世紀の城郭です。その16世紀から19世紀の小田原城の話をさせていただく機会が多くありますが、今回は『神奈川における近世の動向』というテーマをいただいておりますので、近世を中心とした小田原城と、県内の近世遺跡という内容で、大きく二つにわけて話を進めていきたいと思います。

まず、近世、近世考古学とはどういうものかということですが、中川・加藤両先生が昭和44年（1969）に提唱をし、初めて考古学界に近世考古学が位置付けられたもので、比較的新しい分野といえます。つまり、40年程前に認識された分野ということになります。

また、近世の位置付けですが、通常は歴史的にいいますと、室町幕府滅亡の天正元年（1573）をもって近世とするのが一般的ですが、神奈川を含めた東国の関東は、この時期でも戦国大名の小田原北条氏が治めていました。ですので、この天正元年（1573）をもって近世という形にするのは、実際に神奈川では歴史的、考古学的に考えても少し無理があるのかなと思います。関東を含めた東国では、天正18年（1590）小田原北条氏が滅亡したことで一つの画期といえると思いますので、今日は、天正18年（1590）以降を近世ということで話を進めていきたいと思います。



第1図　小田原城城域図（渡辺 1990 より）

2．小田原城

まずは、小田原城の動向を色々お話しする中で、トピック的な事例を写真等でご紹介したいと思います。

小田原城で最初に調査が行われたのは昭和46年（1971）で、本丸・二の丸の発掘調査が行われています。県内でも最も早い時期から、近世の考古学的調査が行われたということになり、現在200例以上の調査が行われています。

この図が小田原城の範囲を示した地図になりますが、この辺りが本丸です。現在の二の丸堀に囲まれた部分と、西側の丘陵部までが二の丸になります。それから三の丸は、丘陵部まで登っていくこの堀に囲まれた中が三の丸です。この三の丸までが、いわゆる城内と呼ばれている場所になります。そして、一番外側には、総構と呼ばれる堀と土塁で囲まれた周囲約9㎞の遺構があります。この総構の存在こそ、小田原城が中世最大規模の城といわれた所以であります。

そして、このように東海道が東西方向に延びていますが、この東海道に沿って町人地などの城下町が形成されています。この図が中世、天正18年（1590）当時の最大の城域になります。近世の小田原城になると、ここのJR東海道線より西側が丘陵部、東側の海側が低地部のほぼ平坦な場所になりますが、主に低地部の平坦な部分を使いながら発展しています。ですので、小田原城は、丘陵部に戦国時代の遺構が非常によく残されている中世的な城と、低地部は近世化工事が行われて石垣が積まれるなどした近世的な城の要素を持つということで、中世的・近世的な姿を持つ複合城郭といえます。

（1）本丸･二の丸

次に、主な発掘調査の事例をエリア毎に見ていきます。まず、本丸・二の丸です。ここでは、史跡整備に伴う調査が多く行われています。今お見せしている写真が、御用米曲輪と呼ばれる場所の調査状況です。こちらは、昭和57 ～ 58年（1982 ～ 83）に2,000㎡以上の面積の試掘調査が行われ、小田原城初の本格的な発掘調査となります。ここに石組の井戸があります。ここは、幕府の米蔵のあった場所ということで御用米曲輪と呼ばれているのですが、これはその米蔵の礎石です。このように遺構が多く発見されまして、遺構が非常によく残っていることがわかった調査です。

この写真は、二の丸の馬屋曲輪と呼ばれる場所ですが、これも史跡整備に伴う調査です。平成12年（2000）から行われており、平成22年度も調査を行っています。断続的に調査を行って、整備のためのデータを積み重ねています。その結果、ここにお見せした写真が馬屋跡の礎石と石列です。ここに水路がありまして、水路の内側に建物があったと考えられます。この馬屋跡のほか、大腰掛跡でも礎石等が検出されています。ちなみに、馬屋跡とは、登城の際、二の丸までは馬に乗って行けますが、これより先は馬に乗れませんので、その馬を留め置く場所になります。そして、大腰掛とは、その御供の人が休む休憩の場所といわれていますが、江戸時代後半に大腰掛は無くなってしまいます。現在は、これらの建物の平面的な整備を進めており、建物の復元はデータ的に不足しているということで、今回は立体的な復元は行っていません。

（2）三の丸

次は、三の丸になります。ここは、最も発掘調査事例が多い場所です。まず、この藩校集成館跡第Ⅲ地点は、平成5 ～ 6年（1993 ～ 94）に調査が行われたのですが、ここにお見せした写真が箱根口跡第Ⅱ地点3号堀と呼ばれる遺構です。大きく下層と上層で堆積した土がまったく違うのがお分かりいただけると思いますが、この下層の黒い土は自然に埋没した土、これより上層は人為的に埋められた土になります。この上層の土は、出土した遺物から考えると、慶長19年（1614）に大久保氏が突然徳川家康から謀反の疑いがあるとい

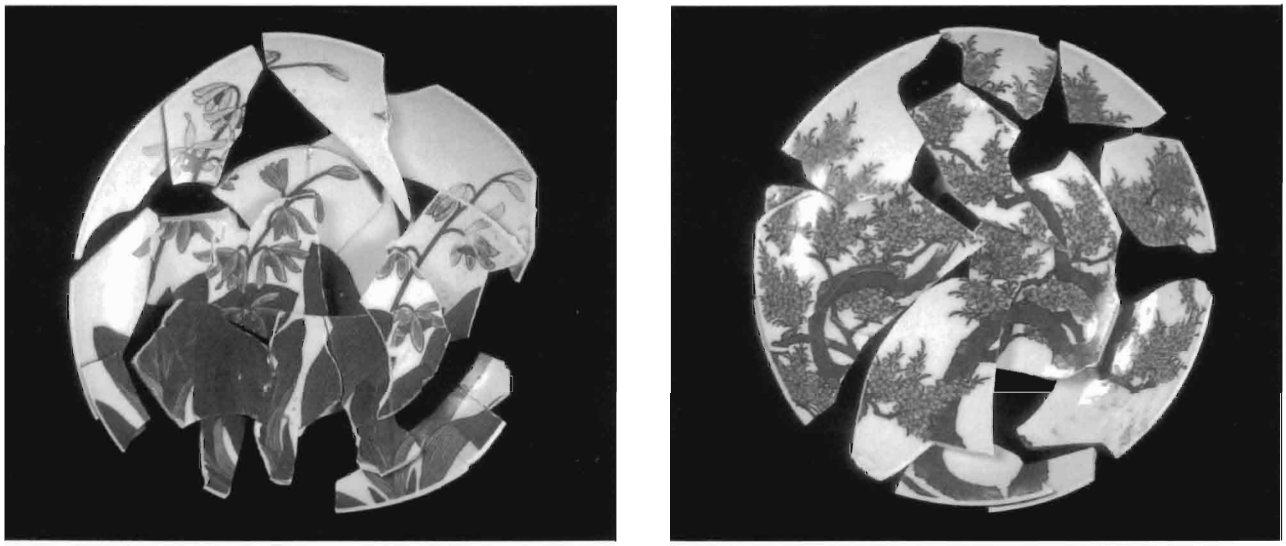


写真1　小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ地点出土鍋島（左：色絵皿・右：染付皿）（小林 2002 より）

うことで、小田原を追放されます。その際に、小田原城二の丸・三の丸の櫓や門を壊したり、堀を埋めてしまったという記録がありますが、その時の痕跡ではないかと考えられています。一説によると、当時の小田原城は、江戸城よりもまだ規模が大きくて堅牢な城だったということで、徳川家康が非常に心配してこのような破却を行ったのではないかともいわれています。

ここでの調査でもう一つ注目されるのは、鍋島焼の皿が何種類も出土していることです。この写真のように、左側は蘭が描かれた色絵の皿、右側は桜が描かれた染付の皿ですが、いずれも7寸の皿になります。同じ模様の部分が複数ありますが、1個体に復元はできませんでした。通常は5枚で1セットになりますので、同じ模様の皿が相当数あったことになります。鍋島焼の出土がどうして重要かといいますと、一つは肥前鍋島藩で当時の最高技術で焼いた焼き物でして、将軍家や大名などへの贈答用に作られたものです。贈答用に作られた鍋島焼がどうして小田原藩から出土するのかが、一つのポイントになるわけです。

これには、小田原藩と鍋島藩との交流の記録がありまして、鍋島藩主が国許に帰る途中、小田原あたりで病気になってしまい、40日間位小田原に滞在したそうです。その時に大久保氏が御見舞に来て色々世話をしてくれたということで、その後陶器その他を小田原藩に贈ったということです。18世紀の明和2年（1765）の記録です。この出土した鍋島焼自体は、17世紀末～18世紀の初めの製品でして、この記録とは少し年代

写真2　小田原城三の丸東堀第Ⅱ地点石垣検出状況（小林ほか 1995 より）

写真3　小田原城総構伝肇寺西第Ⅰ地点堀検出状況（山口ほか 2004 より）

的に違いますが、当時贈られた鍋島焼の可能性があるということで非常に重要ということです。

ちなみに、全国で鍋島焼が出土する地域をみますと、やはり江戸は大名屋敷がありますので圧倒的に数多く出土するのですが、それ以外の地域では長崎と小田原が非常に多いです。小田原が多いというのは、歴代の藩主が老中などの幕府の要職に就いていたことが大きなポイントではないかといわれています。

（3）三の丸堀

次に三の丸堀です。三の丸堀は、東堀・南堀・北堀と元蔵堀の4面があり、東堀・南堀では石垣が検出されていますが、北堀と元蔵堀は現在のところ調査で石垣が確認されていません。

石垣が確認された三の丸東堀第Ⅱ地点ですが、ここでは二つの時期の石垣が発見されました。一つは、16世紀終わり～17世紀初めの河原石の石垣で、この写真のようになっています。この石垣を一部壊して、ここに17世紀中葉の近世化工事によって積まれた切石の石垣が写真のように延びています。このように二つの時期の石垣が見つかっています。三の丸東堀と南堀については、写真のような石垣があるのですが、三の丸北堀と元蔵堀は、このような石垣も無くて中世そのままの堀となっています。

ちなみに、古い河原石の石垣が曲がるラインですが、現在小田原城で一番古いとされている「相州小田原古絵図」、通称「加藤図」と呼んでいる城絵図にも、この石垣のクランクが確認されています。この「加藤図」は、非常にラフな描き方をしているのでこれまで信憑性が疑われていたのですが、実際に描かれていることと発掘調査の成果が一致したということで、再評価されるきっかけにもなった調査です。

（4）総構

4番目は、一番外側に位置する総構です。これは、天正18年（1590）に豊臣秀吉が攻めてくるという予測のもと、小田原北条氏が周囲約9㎞に渡って造った堀と土塁になります。この写真は、伝肇寺西第Ⅰ地点の調査になります。堀の幅は、反対側の堀の肩までが16mです。深さは、10mあります。堀底の幅は5m程ありまして、ここに堀障子と呼ばれる仕切りを造って、堀底での通行を妨げたり、水が急激に流れないように溜めたりする施設として使われています。堀幅が16mもありますので、どうやっても乗り越えることが困難であるというくらい大きな堀になっています。

写真４　小田原城下筋違橋町遺跡第Ⅴ地点木樋・竹樋検出状況

（5）城下

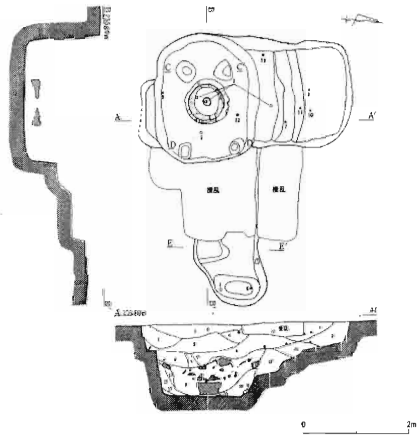
5番目の城下にいきます。ここでは、色々な遺構や遺物が確認されておりまして、城内に比べて非常に遺物の出土量が多い場所になります。

まず、ここは欄干橋町遺跡第Ⅱ地点ですが、ここでは写真のような17世紀前半の初期伊万里の磁器碗や、瀬戸・美濃の織部の陶器皿が出土するなど、非常に出土遺物が多かったところです。昭和60年（1985）に調査が行われたのですが、小田原城の陶磁器の時間的物差しとなる陶磁器編年の基礎となった資料になります。

続きまして、欄干橋町遺跡第Ⅳ地点です。この写真は、最下面の遺構になりますが、16 ～ 19世紀の遺構が重複して非常に多く発見されています。右側の写真が東海道側、左側の写真が敷地の奥側になりますが、奥側にはこのようにゴミを捨てた土坑が非常に多い。東海道側については、土坑のほかに柱穴が多いということから、東海道側には屋敷、奥側には庭の中にゴミ穴を造ったことが分かった調査です。

それから、欄干橋町遺跡第Ⅴ地点です。ここでは、写真のようにガラス製の簪・笄が77点も出土しています。これは、いくら破片といえどもあまりにも量が多過ぎるということで、色々文献史料を調べてみますと、調査した場所は天保3年（1832）以降が竹本屋という旅籠で、そこが飯盛女を置いて大いに繁盛したという記録が残っていました。飯盛女とは何かということですが、読んで字のごとく夕飯などの食事の世話をする仲居さんのことです。しかし、それだけでなく、夜にはいわゆる娼婦としても働いていたといわれていまして、その飯盛女を置くか置かないかで繁盛するかしないかということが大きく関わっていたということです。それを考えますと、77点ものガラス製の簪類が出土しているということは、飯盛女が使った遺物でないかと考えられるわけで、使った人がある程度推測できる資料として非常に注目されます。

次が、筋違橋町遺跡第Ⅴ地点になります。ここでは、平成20 ～ 21年（2008 ～ 09）に調査したのですが、大きな成果が二つありました。まず一つ目は、写真にあるように、木樋である木の管と竹の管が発見されています。これらの連結部には、水を分けられるように穴を開けて3か所に分水した、木で作られた施設も発見されました。これは、写真下が東海道側になりますが、この東海道には小田原用水が造られていました。小田原用水は、16世紀中頃には既にあったといわれていますが、定かではありません。小田原用水は、芦ノ湖を水源とする早川から城下町まで水を引いてきています。その用水から各敷地に水を引き込むという上水



第2図　宮ヶ瀬遺跡群北原（No.9）遺跡
内長福寺址1号梵鐘鋳造遺構実測図
（市川ほか1993より）

写真5　宮ヶ瀬遺跡群北原（No.9）遺跡炭焼窯全景
（市川ほか1993より）

の施設が、このような形でしっかりと確認されたのは今回が初めてということで、非常に注目されます。

それから、もう一つ重要な成果は、こちらの写真のように左右に石積の水路がありまして、中央に非常に硬い硬化面である道路が見つかりました。この道路幅は、7.8mあります。写真右側が東海道になりますが、ここで見つかった道路は17世紀初め頃の東海道ではないかということで、注目されています。ここから少し離れた筋違橋町遺跡第Ⅲ地点でも、同じような硬化面と石積の水路が見つかっています。これらは、恐らく17世紀前葉に小田原城の近世化工事が行われた際、敷地などの区画の変更に伴って、東海道が付け替えられて廃絶されたと考えられています。

3．神奈川の近世遺跡

（1）宿場町

次からは、神奈川県内の近世の遺跡をみていきたいと思います。

最初に、宿場町の調査事例をみていきますが、この写真は厚木市の東町二番遺跡です。この遺跡は、近世に大山詣で賑わった旧矢倉沢往還の街道沿いに栄えた厚木宿に位置しますが、その街道に面した豪商の屋敷

写真6　津久井城根小屋根本遺跡4号竈跡（池田ほか2004より）

写真7　早川石丁場群関白沢支群

地を調査したものです。写真の上が街道になりますが、このように街道側に店の跡、それから便所と推定されている遺構があり、後ろの街道奥側に土蔵群があります。このように、街道側に店、奥側に土蔵が置かれた屋敷地の土地利用が明らかにされています。この他、藤沢宿や平塚宿でも調査した事例があります。小田原宿は、先ほどご紹介したように多くの調査を行っていますので、各地で宿場町の調査が行われています。

（2）村落跡

それから2番目は、近世村落の跡ということで、綾瀬市の宮久保遺跡です。この遺跡は、かなり前に調査した事例ですが、その成果はその後に与えた影響が非常に大きいといえます。ここでは、掘立柱建物群と段切りの遺構を基本としまして、井戸・土坑・竪穴状遺構・柱穴などを一つのセットとして捉え、9箇所の屋敷跡を設定しました。そして、屋敷跡の変遷を明らかにしたことで、その後の近世村落の研究に非常に大きな影響を与えた調査であったと思います。その後は、清川村宮ヶ瀬遺跡群や逗子市池子遺跡群などの遺跡でも、近世村落というものが明らかにされています。

（3）寺院跡

それから3番目の寺院跡です。この写真が清川村宮ヶ瀬遺跡群の北原遺跡内にある長福寺址と呼ばれる寺院跡で、平成2 ～ 3年（1990 ～ 91）に調査が行われています。ここで特に注目されるのが、中・近世の寺院跡とともに、こちらの写真にありますように、梵鐘を鋳造した遺構が発見されています。この梵鐘鋳造遺構については、『新編相模風土記稿』に載っています元文5年（1740年）銘の梵鐘と関連があるといわれています。出土遺物も18世紀前半であることから、1740年銘の梵鐘を造った遺構ではないかということで、非常に注目されています。このように、梵鐘を造った遺構というのは、全国的にも非常に珍しいといえます。

（4）生産遺跡

次は、生産遺跡としましたが、ものを生産する痕跡が発見された遺跡を紹介します。最初に、炭焼窯が見つかった清川村宮ヶ瀬遺跡群の北原遺跡になります。写真のように、斜面のところに穴をいくつも掘りまして、炭焼窯を造っています。ここでは、15基が重なり合って発見されています。このため、15基が同時に機能した訳ではないのですが、長い期間炭を作り続けていたということが考えられることから、炭を商品として生産していたことを連想させるような発見であろうと思います。近世では、炭というのが生活する上での必需品と考えられますので、そういった意味では山間部の経済活動を考える一つのきっかけになるような事例だと思います。

写真8　上ノ町・広町遺跡第2区第2号溝出土焼継資料（大村ほか 1997 より）

それから、相模原市にある津久井城根小屋根本遺跡からは、大形の竈が発見されています。こちらの写真のように、手前が焚口部分になりまして、奥に鍋などを置く場所があって、このように火を受けて真っ赤になっている状況が分かると思います。これは、兵庫県の伊丹郷町遺跡、現在も酒造が盛んなところですが、そこでは酒米を蒸すための竈が発見されていまして、その構造が非常によく似ています。津久井城根小屋根本遺跡でも、酒造を行った際の竈の跡であろうと推定されています。なお、ここでは、この大形の竈のほか、特殊竪穴や井戸などが発見されていますので、恐らくこれらの遺構全体で酒蔵が形成されていたと推測されています。このような大形の竈は、清川村宮ヶ瀬遺跡群の馬場遺跡でも確認されています。以上が酒造の事例ということになります。

次は、海老名市の四大縄遺跡です。ここでは、中世～近世の水田跡が確認されています。近世の水田跡というのは、年貢を米で納めていることを考えれば存在することは間違いないのですが、実際に遺構として見つかるというのは事例としては少ないといえます。写真の四角い一つ一つが水田の跡になります。この細い部分が畦畔で、このような水田跡が層位的に総数5面確認されている事例です。

それから、こちらが小田原市にある早川石丁場群関白沢支群と呼ばれる石垣を切り出した遺跡になります。こちらがその写真ですが、人が写っていますので一つ一つの石の大きさが分かると思います。このように直方体に石を割って加工していくわけです。ここに少し窪んだ部分が並んでありますが、これはクサビを差し込むための矢穴と呼ばれる穴でして、これを利用して石を割っています。この石は、箱根起源の安山岩ですが、ゴロゴロと斜面に転げ落ちています。その中から石垣に使えそうなものを見つけて割って使っています。

加工の方法は、次の写真のように、あらかた綺麗な直方体に荒割りをしています。やはりここに矢穴がずっと並んでいる状態です。だいたい一辺が3 ～ 4尺位の0.9 ～ 1.2mで、長さが2.5m前後と非常に大きなものです。これだけで重さが４ｔ・５ｔあるだろうといわれています。

この切り出した石ですが、どこの城のために切り出したかということが一つ問題になります。一番近いのが小田原城ですが、小田原城ではこれに匹敵するような大きな石垣は積まれておりません。もう1つ考えられることは、早川石丁場群関白沢支群が石垣山一夜城に非常に近いところに位置していますが、その石垣山一夜城に『此石可き左右加藤肥後守石場』という刻銘が刻まれた石垣が残っています。その刻銘から考えると、加藤肥後守は加藤清正かその嫡男の時代に相当し、石垣山一夜城一帯が加藤家の石丁場だったということが分かっています。その当時の17世紀前半は、江戸城普請のために幕府が各大名に石を調達するように命じており、その結果、伊豆半島一帯に石丁場が造られ、石垣用石材が江戸に運ばれています。早川石丁場群

関白沢支群の石の大きさから考えても、やはり江戸城に石垣用石材を運ぶために造られた石丁場であろうということが通説となっています。

それからもう一つ、切り出した石をどのように運んだかということですが、早川が近くにありますので、早川の河口から船で江戸まで運ばれたということは分かります。ここの石丁場からどのように早川の河口まで運んだかというと、写真のように石曳道と呼ばれる遺構が発見されています。路面が1.2～1.6m位の幅ですが、この道と平行して延びる2か所の黒い部分があります。これが轍の跡になります。まだ轍を掘っていない状態ですが、その他の部分は関東ローム層が出ています。ちなみに、この石曳の様子を描いた絵図が残っていますが､それによると石を荷車のようなものに載せて運んでいる様子が描かれています。先の轍は、この荷車の車輪が通った痕跡と考えられます。このように、早川石丁場群関白沢支群は、石曳道も確認されています。

最後に、茅ヶ崎市の上ノ町・広町遺跡です。ここでは、写真のように焼継された遺物が溝から多く出土しています。小田原城でも焼継された資料が出土していますが、写真のように割れたところに白玉粉と呼ばれるものを低火度で焼いて、接着剤として器を修理するわけです。当時は、焼継師が修理したのですが、その際に、所有者の場所と名前を朱書きで写真のように書いています。焼継師が修理したらまたその家に届けるので、所有者が分かるようにこのような朱書きがされています。通常は、所有者が捨てるとその敷地ではだいたい同じ名前の朱書きが出てきます。小田原城でも、100％とはいいませんが、8割方同じ名前の朱書きが出てきます。ところが、この上ノ町・広町遺跡では、溝から出てきた焼継資料に色々な名前がありました。朱書きは、通常二文字あると上に町名や地名、下に名前を書きます。地名は、だいたい大字の単位だと思います。小田原城でいえば、欄干橋町であれば「欄」と略字で上に書かれます。その下に名前とか屋号といったものを書いています。そのようにみますと､この写真左端が「田」の字に人偏の「仁」で､寒川町にある「田端」でしょうか。写真右端は「萩」で、茅ヶ崎市にある「萩園」です。そういったように色々な地名の資料がここでは出土しています。このことから考えて、どうもこの近くに焼継をした職人がいたのではないかということが推定されています。そうであれば、確認された地名から焼継師がどのくらいの範囲まで仕事を請け負っていたのかなどが分かるという意味で、非常に面白い資料であると思います。ちなみに、それほど範囲は広くないようで、茅ヶ崎から北の寒川町の範囲になります。このように、焼継師の商圏を示す非常に貴重な資料だといえます。

（5）墓地

それから5番目の墓地です。この写真は､横須賀市の向井将監正方夫妻墓です。ここは何が重要かというと、亡くなった方の没年が分かるということで、下の写真が奥方の墓で、1670年、上の正方が1674年に亡くなっています。没年がわかるということで、これらの墓で採用された木槨甕棺墓という埋葬形態が、この時期には既に成立していたことが明らかになりました。木槨甕棺墓の出現期を示す資料として非常に重要だということになります。

次は、逗子市の池子遺跡群第7地点から発見された中世～近代の墓地です。こちらの写真が墓坑と呼ばれる墓ですが、このように重なり合いながら集中して確認されています。

（6）街道

6番目の街道です。先程小田原城下のところで東海道の道路の事例を紹介しましたが、その他箱根旧街道では、一里塚の調査が行われています。この写真のように整備されていますが、二つの一里塚が確認されています。これも非常に事例の少ないものになります。その他箱根町では、東海道が調査されています。石畳

が確認され、整備されています。

4．まとめ

最後に、近世の動向ということで簡単にまとめてみたいと思います。まずは、1970年代後半から神奈川県内では小田原城を中心に近世の調査が始まったということです。そして、一つ目の大きな画期としては、1980年代後半から大規模開発による調査が行われ、それによって村落跡や炭焼・酒造などの色々な性格の遺跡が確認されるようになり、一気に資料が蓄積された時期といえるかと思います。第二の画期としては、平成10年に文化庁が提言した近世遺跡というものを必ず調査をするということではなくて、地域において必要なものを対象とすることができる、という見解が出されたことです。この提言は、実際には大きく影響していないかと思いますが、その後には、先程から紹介してきました石丁場や一里塚のほか、台場の話はできませんでしたが、この後天野さんが紹介していただけると思っていますが、そのような新たな資料も続々と見つかっており、近世遺跡は地域に欠かせない歴史資料となってきています。近世遺跡というのは、文献史料も多く残っていますので、これらと一緒になって地域史に位置付けていくことなど、近世考古学という分野が考えていかなければいけない点だと思います。

大分駆け足で話してしまったので、分かりにくい部分もあったかと思いますが、これで終わりにしたいと思います。

挿図・写真引用文献

池田　治ほか　2004『津久井城根小屋地区遺跡群』かながわ考古学財団調査報告166、財団法人かながわ考古学財団

市川正史ほか　1993『宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21、神奈川県立埋蔵文化財センター

大村浩司ほか　1997『上ノ町・広町遺跡』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会・財団法人茅ヶ崎市文化振興財団

小林義典　2002『小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ・Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第100集、小田原市教育委員会

小林義典ほか　1995『小田原城三の丸東堀第2地点発掘調査報告書』東京電力株式会社・玉川文化財研究所

山口剛志ほか　2004『小田原城総構伝肇寺西第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第118集、小田原市教育委員会

渡辺定夫　1990「城のあるまちづくり」『小田原城とその城下』小田原市

近代・現代の動向　― 近代遺跡の調査研究事例から ―

天野　賢一

皆様、たいへんお疲れ様です。発表の最後になりますが、近代･現代の動向を、天野から報告させていただきます。なぜ、私が担当したのかといいますと、2007年度、2008年度に山下居留地遺跡という外国人居留地の遺跡を発掘調査しました。そのことも含めてという主旨があると思いますが、岡本会長からお電話をいただきまして、今回担当させていただきました。

報告の概要は要旨に記載していますが、県考古学会2004年度の講座で「考古から近世・近代へのアプローチ」が開催され、これを契機として大きく近年、研究が進んだといえます。前の発表「近世の動向」で“近世”の考古学といっても新しい分野であるとありましたが、近代・現代になると、さらにもっと新しい部分の領域になってくるということです。文化財保護法の取り扱いについても､近世の遺跡は地域で重要なもの、近代の遺跡はより重要なものということで、必ずしも網羅的にやるものではない、という現代社会の中での位置づけも、課題の一つとして挙げられると思います。

それから最近の遺跡発表会などでも、第32回神奈川県遺跡調査･研究発表会では「小特集 近代遺跡にみる神奈川の夜明け」で近代遺跡が3遺跡取り上げられ、翌年の第33回の発表会では日吉地下壕を含めた戦争遺跡の報告も記憶に新しいと思います。

これまでの動向につきましては第30回の発表会の資料に、横須賀の野内秀明氏が詳細にまとめられているので、それを超えるものではありませんけども、その研究成果の蓄積に近年の近代･現代の動向を含めて、今回ご報告させていただきます。

野内氏の報告で指摘されているとおり、近代遺跡の特色は､「本格的な近代化の始まりは地域によって異なり、それぞれに特徴があり、それは現代に至る各地域の地域形成史に他ならない」ということです。たとえば、横須賀は軍港ですから、遺構や出土品も軍事施設が主体で、直接または間接的にも、ほとんどの場合何らかの形で軍港に関連性があるという特色があります。外国人居留地の調査をしてみると、外国商館ですから外国の西洋遺物ばかり出てくるという特色があります。汐留の新橋ステーションは駅舎ですから駅・鉄道関係の施設がたくさん出てきます。それぞれ遺跡によって特化したものが発見･出土され、極端にいうと、それしか出てこないということが特徴として挙げられます。

県内の代表的な遺跡を映像で説明します。

横浜の遺跡は開港150年で賑わいましたけれども､開港から徐々に近代化が拡散･広まっていくのではなく、ダイレクトに急速に近代化が進みます。例えば外国人遊歩区域の限界付近にあたる宮ヶ瀬では、外国人が避暑として頻繁に足を運び様々な足跡を残すとか、県央部の海老名市では赤レンガで積まれた酒造施設、現在まで軍港として続く横須賀港、それから郊外の漁港・漁村の方の様子についてもみていきたいと思います。

「神奈川台場」は､2009年の横浜開港150年記念に関連する整備に伴って発掘調査成果の報告がありました。台場に接続する土手の部分が残っております。現況は台場跡の表示板が所在しますが、貨物線などの鉄道施設があって、石垣など僅かに往時の面影が残されていました。これまではっきりとした位置関係が明らかでなかったわけですけど、絵図や図面などが残されている幕末期の遺構が、発掘調査によってその具体的な位置関係や構造について明らかになりつつあるというのが状況です。

「二代目横浜駅」の駅舎は関東大震災で被災し約9年間しか使われなかったものですが、たいへん美しく落

ち着いた建物でした。その駅舎の一部が発掘によって明らかになった。これも埋蔵文化財の発掘調査ではなくて、ある程度の記録が行われ、駅舎に関係する遺構とそれ以前に所在していた発電所に関する遺構が発見されました。現地のビルの一角には、これら駅舎や導水管などの遺構の一部が見学できる状態で保存されています。煉瓦の基礎を良く見ると関東大震災の地震による亀裂まで克明に残されています。

次は中区日本大通に所在する「居留地消防隊の地下貯水槽」で、1893(明治26)年に作られたものと推定されています。地下水が湧いて覗き込めば、水の溜まった様子が見えます。発見時には、ガラス瓶などのボトル類が浮いていたようです。

次は近代の横浜港・波止場です。現在の「象の鼻パーク」と呼ばれる波止場です。安政年間に構築された波止場は、何度も改修・港湾整備されてきましたが、関東大震災以降近年まで崩壊が進み、満潮時には今にも水没しそうな状況でした。現在は公園整備で明治中頃の姿をイメージして復元されます。その他、隣接地で発見された貨物線の転車台も公園の一角に一部保存されています。

山手の丘には「ブラフ80メモリアルテラス」という遺構は、関東大震災で崩れ落ちた外国人が住んでいた建物が公園の一角に保存・展示されています。

近代遺跡研究の先進地横須賀市に所在する「猿島砲台跡」は、発掘調査によって明治期から戦前・戦後に至るまでの様子が明らかになっています。そして砲台や発電所跡など関連施設も含めて都市公園として整備されました。

横浜や横須賀など都市部のみならず、郊外の農村・漁村の近代の様子が明らかになりつつあります。慶応大学などによって発掘調査された三浦市所在の「ヤキバの塚遺跡」は、いわば近代の貝塚のようなものですけれども、漁村における近代化がこの調査によって明らかとなっています。生活材などの廃棄物で構成された塚の層序堆積を調べると、灯明皿の出土層の上にはランプ出土する層があり、照明の電化など地域の近代化が発掘調査によって克明に把握できる。さらに生活材の単純な廃棄場ではなく、人形や玩具など様々な物の、「ものおくり場」的な性格としての場所でもあったと実証しています。

近代化というと都市部を主として「○○の発祥の地」などといわれるものが多く残されていますが、意外と郊外の様子までは記録などが残らず明らかではない場合も多くあります。郊外の近代化を探る上では、「ヤキバの塚遺跡」の発掘事例のように考古学的な調査がたいへん有効な方法であると言えます。

海老名市の河原口坊中遺跡では、酒造施設の遺構が発見されています。大島酒造という造り酒屋さんは銅版画を作っており、それが残されています。その銅版画は造り酒屋を鳥瞰するもので、その作業の様子が克明に描かれ、それぞれがどのような施設であるかの説明も表記されています。銅版画で描かれた煙突の下部構造と考えられる部分が発掘調査の範囲にあたり、耐火煉瓦などを用いたかまどの跡が発見されました。焚口が煉瓦で積まれた施設で半地下構造を呈し、煙突とは煙道で接続しています。銅版画に描かれている位置関係に準じていることから特定できます。

丹沢山地にあたる清川村に所在する宮が瀬遺跡群でも近代化の足跡が考古学的な調査から把握できます。外国人の遊歩区域となった宮ヶ瀬は避暑にちょうど良い土地で、食器やガラス瓶などのボトル類などの西洋遺物が出土します

次に山下居留地遺跡を見ていきます。調査地点は、山下公園に面する県民ホールの裏手、本庁通りに面した自治会館の通りを挟んだ向かい側になります。山下町48・49・53・54・55番地です。開港以降外国人居留地とされた地域で、調査地点は記録資料でイギリスやドイツ商館のあった場所になります。県立の芸術劇場建設に伴って、発掘調査が実施されました。

画像右手が本庁通り、奥が中華街方面になります。そして調査の主体となる55番地と54番地が敷地のほぼ中央にあたります。49番地の部分は攪乱が深く際立った出土遺物には恵まれませんでしたが、駿河町通りと呼ばれていた、関東大震災後の区画整理で復興されなかった街路が発見されました。

55番地の代表的な商館にコッキング商会があります。サムエル・コッキングは雑貨商として横浜に来て以来多彩な商売を営み、江の島にはコッキング苑という温室を造営します。現在のサムエル・コッキング苑の温室遺構です。当時､東洋随一を誇るような規模の蒸気機関による暖房施設を有する温室がつくられました。鉄砲百合を西洋に紹介した人物といわれ、百合根も貿易しており、植物に関する知識も豊富であったようです。温室遺構からは55番地と同じ刻印の有する煉瓦が出土しています。また土管など他の構造物なども共通点が多いと考えていますが、現況では詳細は明らかではありません。

55番地に1885年(明治18年)から1895年(明治29年)まで、商館を営んでいた場所になります。事業の都合などで頻繁に転居しているようですが、理由は明らかではありません。現在のオフィスビルのように事業の盛衰や事業の内容などから頻繁に転居しているのかもしれません。55番地で発見された煉瓦建物の基礎構造の一部は近接地に移築復元されています。

発掘調査では幕末期から関東大震災にいたるまで各時代の遺構や遺物が多量に発見されました。コッキング商会はハッカの精製工場も営んでいたようで、商館は日本人からハッカ屋敷とも呼ばれていたようです。その出土品の一部に彼の存在を物語るようなものがあります。淡い緑色の瓶ガラス瓶の破片で「COCKING & COMPANY」､「JAPAN OIL PEPERMINT」と陽刻されています。ペパーミントつまりハッカは主に薬や香料、船員たちの痛め止にもペパーミントも服用があったようです。

このように考古学的な発掘調査でそれを物語るような、実証するような出土が発見されます。近代遺跡ですから、写真資料や文献資料、銅版画などのように様々な資料が残されており、その実像が克明に把握できる部分も多いですが、こういった発掘調査によって明らかになる出土品は、彼らが生活を営んでいた証を実際に手に取ることができるということが考古学的な調査の大きな魅力･有効性の一つではないかと感じます。

その他の遺構についても謎の施設が多数発見されています。蒸気機関に関係すると考えられる施設では、木製の導水管が3本並列して発見されました。その端部には雑なつくりの煉瓦基礎がありその一部に耐火煉瓦が積まれ、周囲などには煤などの付着が認められることなどから燃焼部に関係する部分と考えられます。コッキング商会は銅版画で社屋の俯瞰が描かれています。複数の建物があり、煙を上げる煙突も2本見られます。発見された遺構の位置関係から銅版画の奥の煙突の下の部分ではないかと考えられるものです。しかしこれがどのような機能を有する施設なのか、発見された遺構はそのどの部分なのかは現状では明らかにすることは困難です。これは近代の技術史、工業技術史、蒸気機関の歴史に及ぶ課題なので、現在と近い時代ですけど判らなくなっていることもたいへん多い。その発見された遺構の構造を見ると、木組み構造の筒であることから大正時代の水道管に酷似する構造を呈しています。一部には断熱材で覆われた鉄管が通っています。導水に関係した施設または蒸気機関の一部、暖房施設など様々な見解がありますが、現状で結論づけることは困難であるため、研究課題として挙げておきます。

次に排水施設などに関係する施設を見ていきます。樽のタガと考えられる環状の鉄製品が切石の上に置かれた状態で発見されました。この排水施設の構造を見ると、樽の貯水槽から洗い物などの作業を行い、排水が切石による排水溝に流れて、排水枡に落ちて下水道につながっているものです。水売りの写真を参考資料として見ると、建物の横に大きな樽や桶などが置かれた洗い場があり、地下部分は写真からは把握できませんが、発見遺構と類似した構造を呈しているものと考えられます。

排水桝の構造

切石製の排水桝を見ると排水が切石の排水溝に流れ、枡の中に落ちます。枡の中には、仕切りがあります。水がある一定程度溜まりましたら、外側の下水管に向かって流れます。現在の「トラップ」などと呼ばれる排水が一定に滞留することによって臭気や害虫などを遮蔽する仕組みを持つ構造です。当時、コレラなどの伝染病予防など、衛生管理にはかなり留意していたようで、居留地ではこのような技術をいち早く取り入れていることが特筆されます。排水桝の奥に接続する黒い土管を見ると、セメントの代用品と考えられる黄色の粘土で保護されるよう、包まれた状態で出土しています。以前にも黒色の土管が工事中に発見された事がるようで、当時はイギリスからの輸入品と考えられていたようです。黒色の土管を観察すると胎土や焼成など品質が桟瓦に酷似していることから､国内の瓦職人が製作したものであると考えられます。出土品では｢ひらがな｣の一文字や右から読むと「瓦甚」の刻印が受け口部などに認められました。他の遺跡出土事例では、刻印も瓦屋の刻印と同じ物が認められることから、屋号などが明らかになれば製造所を特定することも可能であると思われます。

文献や写真資料などの記録は特別な物や記念碑的なものは多くの情報が残されている場合も多くありますが、ではなく、排水施設の構造や下水管の施工方法やその部材など、日常的なごく普通の一般的なものについての情報は失われている場合が多く、手がかりがあまりない状態であると思います。したがって発掘調査によってその構造などの様相が明らかになるという事例であり、近代遺跡においても考古学的阿発掘調査は極めて有効な方法であるということができると思います。

続いて本庁通りに面した山下町54番地にあたる発掘調査の内容を見ていきます。主な商館としてはドイツ商館があった場所になります。記録資料によるとクニフラー商会があった場所です。

54番地で社屋の写真です。石造りの門に石造りの洋館が建っている。屋根には西洋瓦が葺かれています。クニフラー商会を引き継いだカール・イリスによってイリス商会は現在でも都内に現存する企業で、幕末開港開業第一号の商館でドイツ商館の老舗です。このドイツ商館の建物は、1907年(明治40年)竣工のたいへん立派で美しい建物です。ドイツ帝室建築士の資格を持つゲオルグ・デ・ラランデによって設計されたものです。ラランデによる作品は神戸異人館に所在するドイツ人貿易商ゴッドフリート・トーマス氏の自邸であった「風見鶏の館」、東京の「高田商会」社屋など多くの建築がありました。山下町に事務所を構え多くの仕事をしていたようです。

残念ながらこのイリス商会の社屋は関東大震災で倒壊してしまいますが、社員や関係者による記録が残っています。社員であったギルデマイスターによる資料によれば54番地の当初の社屋は石造りで、家具や調度も満足なものではなく、極めて質素なものだったとの記載があります。

この場所に発掘調査では、震災で倒壊した建物の廃棄物などで埋め尽くされていました。鉄筋や倒壊した煉瓦塀などの下層部にはコンクリートの床面が確認できました。下層からは瓦礫に混じってドイツ製のタイル破片がまとまっており、一部には床面に貼られた状態で残存している状態でした。出土状況から当時の状態を紐解いていくと、赤色と白色の六角形のタイルを用いているということ、赤色タイルを中心に白色タイルを取り囲む配置が読み取れ、当時の施工がたいへん良く把握できる事例であると言えます。タイルの目地はほとんど隙間なくきっちりと密着して施工されているということも把握できました。54番地の敷地の中央部分の調査では切石基礎による建物が発見され、瓦礫の中には綺麗な色粘土をプレスしたドイツタイルが出土しています。裏面には、Villeroy&Boch社（ビレロイ＆ボッホ社）の刻印もあり製造所・紋様パターン・1905年頃という製作年代も特定することができました。国内では明治末葉～大正期にかけての建築に使用さ

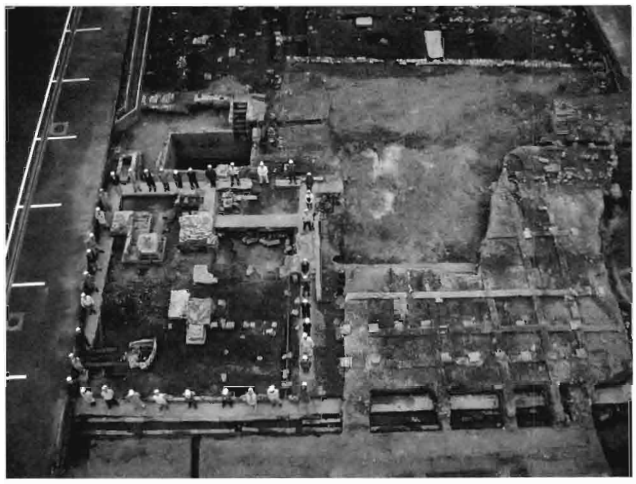
れている事例が複数確認できます。1905年頃の型録に掲載されたタイルが、居留地では1907年竣工の建築に使用されているということは、日本においても欧州での最新の情報や物資が入ってきて、ほぼダイレクトにそれらが使用されているという事を裏付けるものです。

これは倒壊した建物から散在した状態で出土しているので、具体的な施工状況は判りませんが、この波型の文様と縁取りの文様、その他、ゴシック調の模様など、たいへん美しい装飾タイルが出土しています。

次に48番地を見ていきたいと思います。

これは今でも神奈川県指定重要文化財としてこの一角が奇跡的に残っています。最終的に倉庫として使われていたものです。このキーストーンと呼ばれる入り口の上には「48番」との表記が残っており、イギリス商館であるモリソン商会の建物の一部になります。この商会では、ノーベル製ダイナマイトの輸入など様々なものを取り扱っていたようです。J.P.モリソン氏は、製茶検査人として来日以来、居留地では古参でありクリケットクラブの会長など様々な経歴をお持ちの方であったようです。発掘調査地点が、この場所にあたります。イギリス商館であるためイギリス製の器が出土しています。ワイルドローズと呼ばれる野薔薇の文様が描かれる皿の裏面には「DAWSON」の刻印が読み取れます。四角いタイルは暖炉の周りや床面などに使われていたものと思われます。百合の花をあしらった非常に綺麗なイギリス製のタイルは、暖炉の縁取りなどの装飾に使われていたと思われます。

喫煙具では、江戸時代の遺跡を掘ると煙管がたくさん出土しますが、ここの遺跡の場合は、粘土で作ったクレイパイプが出土します。草花文や犬など丁寧な装飾が施されているものもあります。クレイパイプは、人に分け与えて吸う時に、口元を折って相手に渡す習慣があるようで、そのほとんどは折れた状態ですが、



①山下居留地遺跡航空写真（西から）②～⑤山下居留地遺跡プロムナード

100点を超えるような数が出ています。

建築部材では、横須賀製鉄所製の煉瓦が特筆されます。製鉄所から造船所となるため、製鉄所としては、慶応2年から明治4年までの間に限定される年代の刻印があります。その他、煉瓦には色々な種類がありますけれど、いわゆる「赤煉瓦」と呼ばれる建築用普通煉瓦の様相は多種多様です。また「白煉瓦」である耐火煉瓦も、製造所などの手がかりとなる文字がある、「AICHI RENSEKI」は「愛知煉石」とか、「HIRAMATSU」・「HINODE」などある程度情報を有するものもありますが、「YOKOHAMA」・「KAWASAKI」など単純に地名だけだったり、「SYK」・「YTR」などイニシャルだけであったりするものは、製造所や年代を特定するのが困難であるものも多くあります。また耐火煉瓦の一部は輸入されているものもあるようです。

容器のなかでも特筆されるものは、写真の現像用品です。白い容器で、長方形で、浅く、角部に片口が付くもので、現像液などを入れるもののようです。幕末の写真黎明期を象徴するような、出土遺物であると言えます。

ウェッジウッドの保温具と酷似する器やラムネ瓶・マスタード瓶・炭酸水瓶など、多彩な西洋遺物は、横浜外国人居留地ならではの出土品であると言えます。

発掘調査後になりますが、遺構の一部を関係機関や関係者の尽力によって、現地で移築復元されています。現在でも地元の方に積極的に活用していただいているようです。たいへん有り難いことですが、これからいかに継続的に、将来にわたって、発掘調査で得られた資料を活用していくかが、私たちの課題でもあると言えます。

最後になりますけども、簡単にまとめると。近代の遺跡は意外と写真や絵図、図面なども残っていますけれども、それはあくまで一側面で目的がどうであったとか、表現したくないものはあったのか、なかったのか分からない事が多いという事です。したがって考古学的調査の有効性がかなりある。近代建築的な側面では、横浜にはまだ数多く残っていますが、その内部の構造や建物の基礎がどういったものかが判らない状況にあります。こういったことでも、発掘調査によって解明される部分がたいへん多いと言えます。

コッキング商会の「PEPPERMINT」の瓶ではないですけど、当時の生活していたものを実際手に取って見ることができるというのも、発掘調査の魅力の一つではないでしょうか。

現時点での近代遺跡に関する研究課題や問題点も多く浮かび上がり、その提示のみに終始してしまいましたが、近代遺跡に関する今回の発表を終わりたいと思います。

引用・参考文献

青木祐介　2005「地中に眠る都市の記憶　地下遺構が語る明治・大正の横浜」横浜都市発展記念館・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

青木祐介　2009「横浜建築家列伝」横浜都市発展記念館

天野賢一　2010「山下居留地遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』258　(財)かながわ考古学財団

天野賢一他　2010「近代の遺跡」『掘り進められた神奈川の遺跡』(財)かながわ考古学財団編　有隣堂

安藤広道・大坪宣雄・山田仁和　2008「横浜市　日吉台地下壕－軍令部第三部地下壕出入口施設の発掘調査－」『第33回神奈川県遺跡調査・研究発表会』発表要旨　神奈川県考古学会

市川正史　2004「宮ヶ瀬遺跡群出土の西洋遺物に関連して」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

市川正史　1997「宮ヶ瀬出土の西洋遺物に関連して」『考古論叢神奈河』第6集　神奈川県考古学会

大坪宣雄　2004「戦争遺跡」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

坂上克弘　2004「横浜の近代遺跡」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

坂上克弘・青木祐介　2007「横浜の近代遺跡と出土遺物その1－煉瓦・ジェラール瓦・土管を中心に－」『紀要』№3　横浜都市発展記念館

坂上克弘・青木祐介　2008「横浜の近代遺跡と出土遺物（その2）」『紀要』№4　横浜都市発展記念館

坂上克弘・青木祐介　2010「横浜の近代遺跡と出土遺物（その3）」『紀要』№6　横浜都市発展記念館

櫻井準也　2004「総括－近世・近現代考古学研究の意義」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

鈴木重信・山田光洋　2008「横浜市　神奈川台場　確認調査2件－表海面西側と西取渡り道の調査－」『第32回神奈川県遺跡調査・研究発表会』発表要旨　神奈川県考古学会

諏訪間順　2004「近世小田原宿－焼継ぎされた陶磁器と飯盛女のかんざし」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

中三川昇　2004「向井将監正方夫妻の墓」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

福田敏一　2004「新橋駅発掘　考古学からみた近代」雄山閣

藤山龍造　2004「考古学から見た近現代の漁村」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

宮田　眞　2008「藤沢市 東海道藤沢宿（藤沢市№78遺跡）－近世・近代の宿場町」『第32回神奈川県遺跡調査・研究発表会』発表要旨　神奈川県考古学会

野内秀明　2004「東京湾要塞－猿島砲台跡・小原台堡塁跡の発掘事例」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

野内秀明　2006「テーマ発表　神奈川の遺跡調査をめぐる30年　近代－近代遺跡の調査事例と今後の課題－」『第30回神奈川県遺跡調査・研究発表会』発表要旨　神奈川県考古学会

横浜開港資料館　1998「図説横浜外国人居留地」横浜開港資料館

渡辺清史　2004「宝永火山灰にかかる遺構」『考古から近世・近代へのアプローチ－神奈川県内の遺跡を中心にして－』平成15年度考古学入門講座　神奈川県考古学会

神奈川県考古学会設立 20 周年記念
神奈川県考古学会の過去・現在・未来
－神奈川県考古学会設立 20 周年記念講演および
考古学講座『神奈川の考古学・最近の動向』の記録－

発　行　日　平成 27 年（2015 年）3 月 31 日
編集・発行　神奈川県考古学会
印　　刷　株式会社 興版印刷